

南小泉遺跡他

発掘調査報告書

南小泉遺跡第52～57次

今泉遺跡第5・6次、大野田古墳群第12次

西台畠遺跡第6次、中田南遺跡第4次

茂ヶ崎城跡、伊古田B遺跡第2次

北目城跡第7次、北屋敷遺跡第4次

2008年3月

仙台市教育委員会

南小泉遺跡他

発掘調査報告書

南小泉遺跡第52～57次

今泉遺跡第5・6次、大野田古墳群第12次

西台畠遺跡第6次、中田南遺跡第4次

茂ヶ崎城跡、伊古田B遺跡第2次

北目城跡第7次、北屋敷遺跡第4次

2008年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれる仙台の風景は、私たち市民の誇りであると同時に将来へ守るべき大切な財産であります。

この仙台市の素晴らしい自然・風景と同様に、私たち市民の誇りであり大切な財産の一つに、悠久の歴史に育まれ守ってきた文化遺産（文化財）の存在が挙げられます。実は、仙台市内には現在約800ヵ所もの遺跡が確認されております。これらの文化財は、これまでの大きな時の流れの中でその存在価値を高めるとともに、現在においては各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされています。当教育委員会としましては、皆様のご理解とご協力を賜りながら、これらの貴重な文化財を保存し、次世代へと継承いくことに日々努めております。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成18年度に発掘調査を実施した西台畠遺跡、大野田古墳群、今泉遺跡、南小泉遺跡の他、平成19年度に発掘調査を実施した南小泉遺跡、今泉遺跡、中田南遺跡、茂ヶ崎城跡、伊古川B遺跡、北目城跡、北屋敷遺跡の調査結果を収録しております。

西台畠遺跡の調査では関東系土師器が多く出土し、古代の仙台と関東地方とのつながりを解明する手がかりとなる貴重な資料を得ることができました。茂ヶ崎城跡では、仙台の伝統工芸品である堤焼の大甕を使用した、近世後半のものと思われる甕棺墓が出土しました。また、その他の遺跡の調査についても貴重な資料を得ることができました。

先人達の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大事な仕事であると思います。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成20年3月

仙台市教育委員会
教育長 荒井 崇

例　　言

1 本書は、仙台市教育委員会が実施した民間開発事業に伴う南小泉遺跡第52・53次、伊古田B遺跡第2次と、個人住宅建設に伴う南小泉遺跡第54・55・56・57次、今泉遺跡5・6次、大野田古墳群第12次、西台畠第6次、中田南遺跡第4次、北日城跡第7次と、仙台市関連施設建設に伴う茂ヶ崎城跡、北屋敷遺跡第4次の各発掘調査報告書の合本である。

民間開発事業にかかる調査は事業者の負担において、また個人住宅建設と仙台市関連施設建設にかかる調査は公費で実施した。

2 本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議のもとに、長島栄一・鈴木降がとりまとめ、次のように分担して行った。

主　任　長島 栄一：南小泉遺跡第53次

主　事　加藤 降則：南小泉遺跡第56次、中田南第4次、北日城跡 7次

文化財教諭　早川 潤一：今泉遺跡第5次、大野田古墳群第12次、西台畠遺跡第6次

◆　藤田 雄介：南小泉遺跡第52・54次

◆　志賀 雄一：南小泉遺跡第55次、茂ヶ崎城跡、伊古田B遺跡第2次

◆　工藤慶次郎：今泉遺跡第6次、北屋敷第4次

臨時職員　森田 賢司：南小泉遺跡第57次

3 遺物実測やトレース等の整理作業は、主に向田文化財整理収蔵室の作業員にお願いした。

4 本書に掲載した陶器・磁器に関する産地及び年代については、仙台市教育委員会文化財課調査係の佐藤洋に鑑定をお願いした。

5 茂ヶ崎城跡より出土した人骨については、独立行政法人国立科学博物館人類研究部　坂上和弘氏に助言をいただいた。

6 本書にかかる遺物・写真・実測図面等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

7 本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」(小山・竹原：1976)に準拠した。

8 断面図・平面図の標高値は、海拔高度を示している。

9 遺物図版の縮尺は、任意とする。

10 遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

SI：竪穴住居跡　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SK：土坑

SE：井戸跡　P：ピット　SX：性格不明遺構

11 遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非クロクロ）　D：土師器（クロクロ）　E：須恵器

F：丸瓦　G：平瓦　I：陶器　J：磁器　K：石器・石製品

L：木製品・杭材　N：金属製品　P：土製品

12 掘立柱建物跡の柱穴及びピット内の網かけは、柱痕跡の位置と範囲を示している。

13 上師器実測図における網かけは、黒色処理されていることを示している。

14 遺物観察表のカッコ内の法量は、残存値を示している。

15 平面図の座標値は平面直角座標系X（日本測地系）による。

目 次

序文

例言

目次

I 南小泉遺跡第52次発掘調査報告書

1 調査要項	1
2 調査に至る経過と調査方法	1
3 遺跡の位置と環境	3
4 基本層序	4
5 発見遺構と出土遺物	4
1) 掘立柱建物跡	4
2) 溝跡	5
3) 土坑	6
4) ピット	6
5) 出土遺物	6
6 まとめ	6

II 南小泉遺跡第53次発掘調査報告書

1 調査要項	9
2 調査に至る経過と調査方法	9
3 遺跡の位置と環境	9
4 基本層序	9
5 発見遺構と出土遺物	9
① 1トレンチ	
1) 溝跡	10
2) ピット	10
② 2トレンチ	
1) 壓穴住居跡	11
2) 掘立柱建物跡	12
3) 土坑	12
4) ピット	12
6 まとめ	12

III 南小泉遺跡第54次発掘調査報告書

1 調査要項	21
2 調査に至る経過と調査方法	21
3 遺跡の位置と環境	21
4 基本層序	21
5 発見遺構と出土遺物	21

1) 挖立柱建物跡	21	4) ピット	23
2) 土坑	23	5) 出土遺物	24
3) 小溝状遺構群	23		
6) まとめ			24
IV 南小泉遺跡第55次発掘調査報告書			
1) 調査要項			29
2) 調査に至る経過と調査方法			29
3) 遺跡の位置と環境			30
4) 基本層序			30
5) 発見遺構と出土遺物			30
①Aトレント			
1) ピット	30	2) 出土遺物	31
②Bトレント			
1) 溝跡	31	2) ピット	31
③Cトレント			
1) 土坑	34	3) 性格不明遺構	34
2) ピット	34		
④Dトレント			
1) 溝跡	35	2) ピット	35
6) まとめ			36
V 南小泉遺跡第56次発掘調査報告書			
1) 調査要項			49
2) 調査に至る経過と調査方法			49
3) 遺跡の位置と環境			49
4) 基本層序			49
5) 発見遺構と出土遺物			49
1) 溝跡	50	3) 流路跡	51
2) 土坑	50	4) 出土遺物	51
6) まとめ			52
VI 南小泉遺跡第57次発掘調査報告書			
1) 調査要項			65
2) 調査に至る経過と調査方法			65
3) 遺跡の位置と環境			65
4) 基本層序			65
5) 発見遺構と出土遺物			65

1) 溝跡	65	3) 性格不明遺構	67
2) ピット	67		
6まとめ			67
VII 今泉遺跡第5次発掘調査報告書			
1 調査要項			71
2 調査に至る経過と調査方法			71
3 遺跡の位置と環境			71
4 基本層序			72
5 発見遺構と出土遺物			73
1) 溝跡	73		
6まとめ			74
VIII 今泉遺跡第6次発掘調査報告書			
1 調査要項			77
2 調査に至る経過と調査方法			77
3 遺跡の位置と環境			77
4 基本層序			77
5 発見遺構と出土遺物			77
1) 溝跡	78	4) 眇畔状遺構	79
2) 土坑	78	5) 出土遺物	79
3) ピット	78		
6まとめ			80
IX 大野田古墳群第12次発掘調査報告書			
1 調査要項			83
2 調査に至る経過と調査方法			83
3 遺跡の位置と環境			83
4 基本層序			84
5 発見遺構と出土遺物			85
①Ⅲ層上面検出遺構			
1) 挖立柱建物跡	85	3) 土坑	86
2) 溝跡	85	4) ピット	86
②V層上面検出遺構			
1) 26号墳周溝	86	3) ピット	86
2) 小溝状遺構	86	4) 出土遺物	88
6まとめ			90

X 西台畠遺跡第6次発掘調査報告書

1 調査要項	101
2 調査に至る経過と調査方法	101
3 遺跡の位置と環境	102
4 基本層序	102
5 発見遺構と出土遺物	103
1) 竪穴住居跡	104
2) 溝跡	106
3) 土坑	106
4) ピット	108
5) 出土遺物	110
6 まとめ	111

XI 中田南遺跡第4次発掘調査報告書

1 調査要項	125
2 調査に至る経過と調査方法	125
3 遺跡の位置と環境	125
4 基本層序	127
5 発見遺構と出土遺物	127
1) 竪穴住居跡	128
2) ピット	128
6 まとめ	128

XII 茂ヶ崎城跡発掘調査報告書

1 調査要項	131
2 調査に至る経過と調査方法	131
3 遺跡の位置と環境	131
4 基本層序	132
5 発見遺構と出土遺物	133
1) 溝跡	133
2) 木棺	134
3) 出土遺物	134
6 まとめ	136

XIII 伊古田B遺跡第2次発掘調査報告書

1 調査要項	143
2 調査に至る経過と調査方法	143
3 遺跡の位置と環境	143
4 基本層序	144
5 発見遺構と出土遺物	144
1) 竪穴住居跡	145
2) 溝跡	147
3) 土坑	147
4) 小溝状遺構群	147
5) ピット	148
6) 性格不明遺構	150

6	まとめ	150
---	-----	-----

XIV 北目城跡第7次発掘調査報告書

1	調査要項	157
2	調査に至る経過と調査方法	157
3	遺跡の位置と環境	157
4	基本層序	159
5	発見遺構と出土遺物	159
1)	堀跡・溝跡	160
6	まとめ	161

XV 北屋敷遺跡第4次発掘調査報告書

1	調査要項	165
2	調査に至る経過と調査方法	165
3	遺跡の位置と環境	166
4	基本層序	166
5	発見遺構と出土遺物	167
1)	溝跡	167
6	まとめ	168

I 南小泉遺跡第52次発掘調査報告書

1 調査要項

遺 跡 名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調 査 地 点	仙台市若林区一本杉町26-1
調 査 期 間	平成19年1月29日～1月31日
調査対象面積	96m ²
調 査 面 積	約20m ²
調 査 原 因	薬局建築
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査 工藤 哲司 文化財教諭 早川 潤一 藤田 雄介

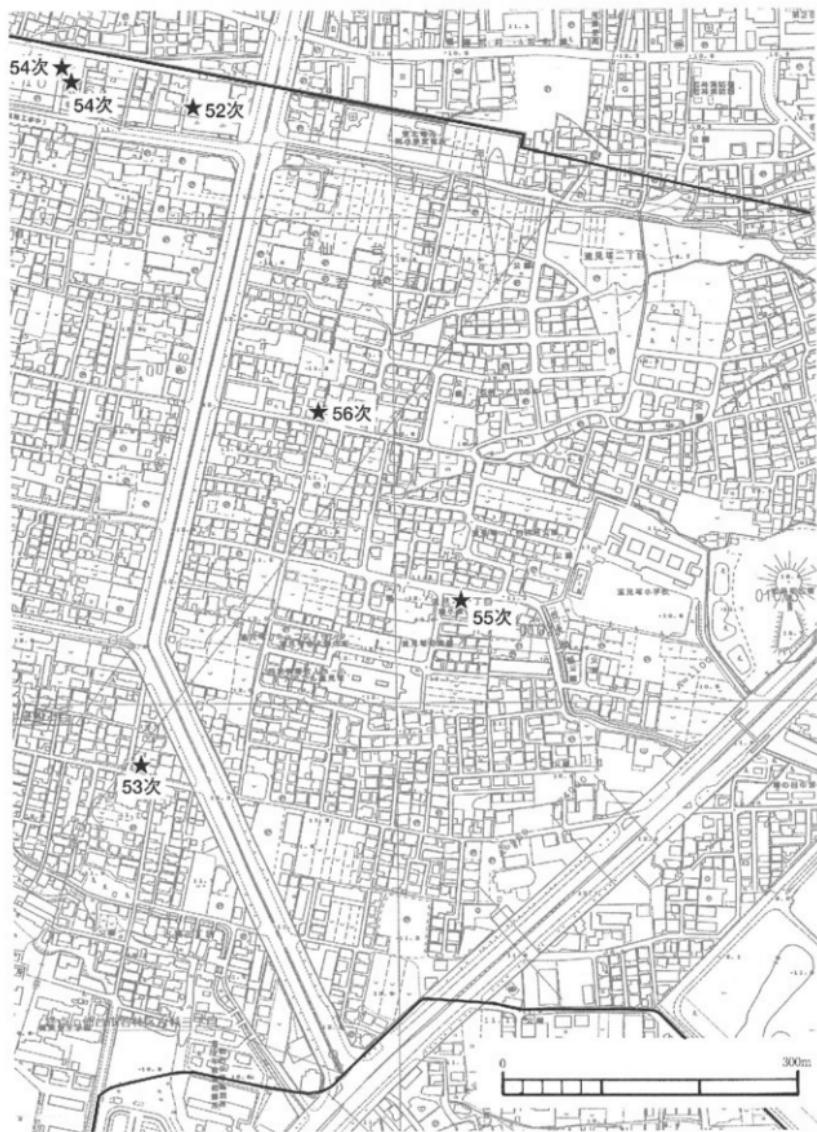
2 調査に至る経過と調査方法

平成18年12月27日付で、地権者渡邊龍彦氏、渡邊好子氏より深さ4～4.5mの柱状土壤改良を作らう薬局の建築工事に係る「埋蔵文化財発掘の取扱い（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。平成19年1月29日に建物建築予定地に東西2.5m×南北6.5mの調査区を設定して確認調査を行ったところ、掘立柱建物跡や溝跡、ピットなどが検出された。調査区北半部で検出された掘立柱建物跡が調



番号	遺跡名	種 別	立 潜	時 代	番号	遺跡名	種 別	立 潜	時 代
1	南小泉遺跡	集落	自然崩壊	縄文～古墳	9	砂押上遺跡	散在地	自然堆积	先史・古代
2	渡良原古墳	前方後円墳	自然崩壊	古墳（前昭）	10	砂押下遺跡	散在地	自然堆积	古墳・古代
3	若林城	城郭	自然崩壊	近世	11	神代遺跡	官衙関係	自然堆积	古代
4	南横堀遺跡	城郭	自然崩壊	古代・中世・近世	12	中野西古墳	散在地	自然堆积	古墳・古墳・古代
5	海春院前遺跡	集落	自然崩壊	古代・中世・近世	13	河野城跡	城郭	自然堆积	中世
6	法雲院古墳	円墳	自然崩壊	古墳（後昭）	14	新古山切石里跡	秦汉墓葬	堆雪堆积	古代
7	柳原古墳	円墳？	自然崩壊	古墳（後昭？）	15	守山家遺跡	包含地	後雪堆积	不明
8	藤原古墳	円墳？	自然崩壊	古墳（後昭？）	16	中谷家遺跡	秦汉墓葬	自然堆积	古生・中世

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査地点の位置

査区西側に延びることが予想されたため、調査区北半部の西側を東西1m×南北3.5mの範囲で拡張し、引き続き本調査を実施した。

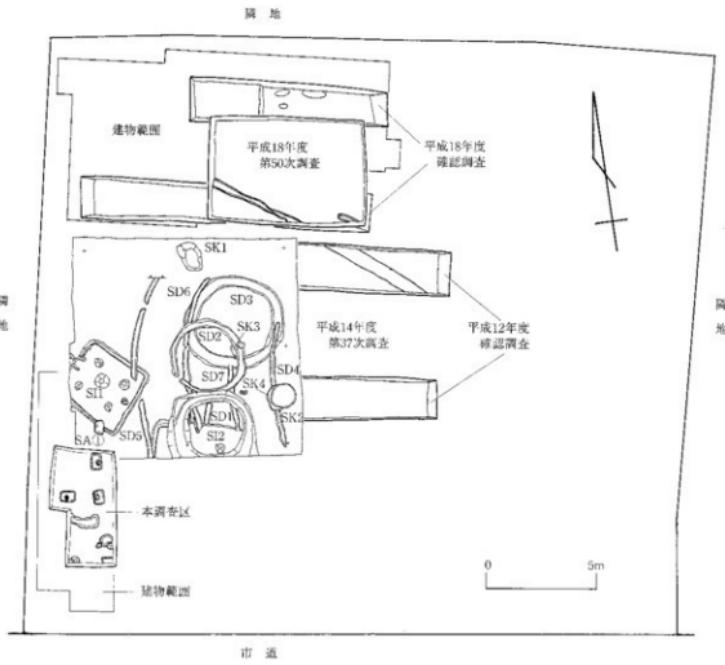
3 遺跡の位置と環境

本書所取の南小泉遺跡の調査は第52～57次で、位置は第2回に示したとおりである。各地点の周辺調査成果はそれぞれの項に譲り、以下では南小泉遺跡の位置と環境を概述したい。

仙台市は西部と東部で地形が大きく二分され、西部は奥羽山脈から派生する丘陵ないし段丘地形となっている。東部は、北から七北田川、名取・広瀬川、阿武隈川の3河川が形成した「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野が広がり、河川の流域には扇状地、自然堤防、後背湿地、旧河道からなる複雑な地形を形成している。

南小泉遺跡は仙台市の東部に位置し、七北田川と名取・広瀬川に挟まれた沖積平野の自然堤防上に立地している。遺跡の規模は、東西約2km、南北約1kmの範囲に広がる市内でも最大規模の遺跡である。遺跡内には遠見塚古墳(2)を含んでおり、西側では、南部で若林城跡(3)と、また北部で養種園遺跡(4)や法領塚古墳(6)、蛇塚古墳(7)、猪塚古墳(8)などの古墳群と接している。標高は西側で約13m、東側で約7.5mの西高東低である。

遺跡は、これまでに51次の調査が実施されており、縄文時代から近世の複合遺跡として理解されている。周辺遺跡との関わりからこれまでの調査成果を見ていくと、縄文時代では、第17次で大木10式～南境式期の土器が出土し



第3図 調査区配置図

たほか、第19次で大洞A式期の遺物包含層を検出している。

弥生時代は、第16・17次などで前期青木畠式期の土器を検出している。中期中頃は、昭和14・15年に霞日飛行場の拡張工事に伴って折形圓式期の上器棺墓が発見された。他地点でも遺構の検出は依然少なく具体的な相は捉えられないが、多くの調査地点で土器片が確認されている。この時期に集落の拡大があったことは間違いないだろう。集落の中心は前代より東へ移っている。東方約1kmの中在家南遺跡（14）でも同様の集落変遷が連れ、水田整備作を意識した汎仙台平野的な動態と理解される。

古墳時代は、中在家南遺跡で前期の方形周溝墓群が形成される。当遺跡内でも塙釜式期後半（4世紀終末～5世紀初頭）に東北地方4番目の規模を誇る前方後円墳の遠見塙古墳が造られる。同期の集落は、古墳南西の第20次で竪穴住居跡1軒を検出したほかは、第21・26次などで遺物を確認したのみで、次期の南小泉式期の集落が急増する状況と対照的である。南小泉式期の集落は古墳の西側を中心に広範囲にそして濃密に展開した。面的な調査がなく、断片的な調査の積み重ねではあるが、これまでに60軒以上の竪穴住居跡の検出例がある。後期の住社式一棟圓式期には、前時期に引き続いで古墳西側で集落が営まれる一方で、これよりさらに西側でも集落が営まれるようになる。同時期の古墳である法領塙古墳（7世紀前半）や猫塙古墳、蛇塙古墳、または若林城跡内の古墳などが遺跡西側に造られているのも、これと期を一にした現象と捉えられよう。当遺跡におけるこの時期の特徴に、いわゆる「関東系土器」の出土が挙げられる。第22次調査では、まとまった「関東系土器」の出土および大溝で画された集落配置などから「一般的な集落とは異なる」とし、同溝の人為的な埋め戻しとその後の集落の衰退を、広瀬川を挟んだ郡山遺跡に先行する集落の興りと関連付けて説明した（斎野1994）。郡山遺跡とこれに先行する集落については、長町駅東遺跡や本書所収の「IV 西台畠遺跡第6次」からも理解されるように、近年急速に大規模な調査が進み、関東系土器の出土状況とそこから推測される「横戸」の様子が捉えられつつある。

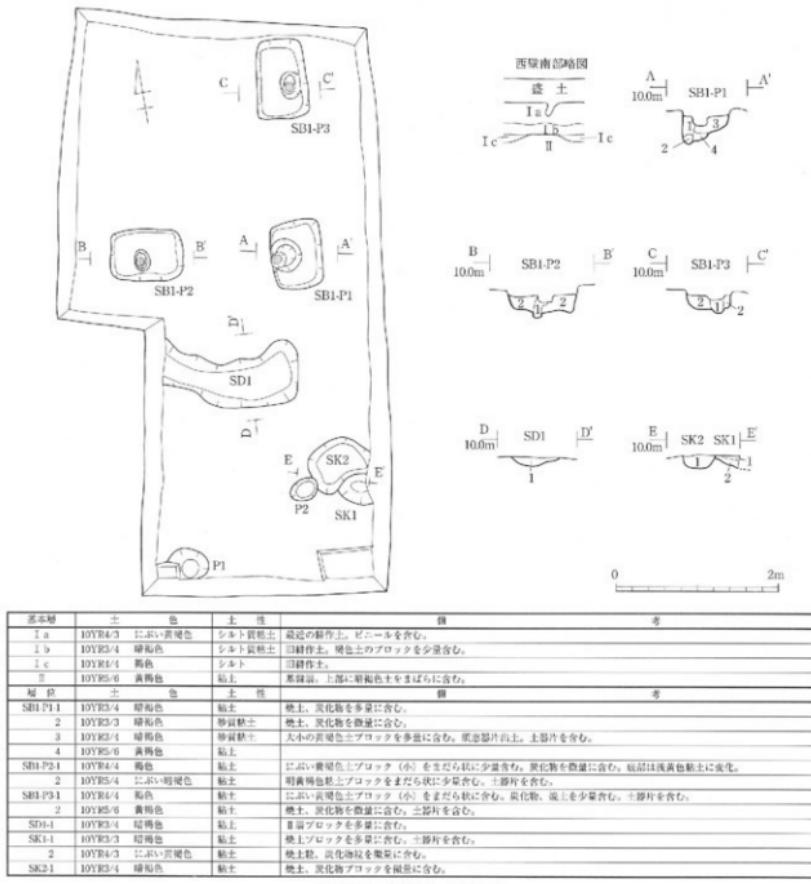
その後、奈良時代になると遺跡の北西約1kmでは陸奥国分寺、国分尼寺が建立される。遺跡内でもこれまでに集落の認められなかった北西部において竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。平安時代には遺跡内のはば全域にわたって生活の痕跡が残された。居住域のみでなく、各地点で生産域（小溝状遺構群）も検出されており、掘立柱建物跡のような倉庫群も併せ、周辺地形を含めた集落景観の構造的な把握が求められる。

当遺跡での中世の遺構は、第16次で13世紀前半～14世紀前半の屋敷跡と14世紀中頃～15世紀前半の城館跡を、また東側の第17次では12世紀後半～13世紀初頭頃の屋敷跡と、これを埋立てた13～16世紀の区画溝のある屋敷跡を検出した。これらの成果から、城館の周辺に方形の屋敷を構えた中世村落の景観が復元されている。周辺の同時期の遺跡では、今泉遺跡（城跡）や沖野城跡（13）などがある。両遺跡は、現在では広瀬川の右岸に位置しているが、当時は城跡の北側に河川が東流し名取郡と宮城郡の境界となっていた。「仙台領古城書上」によれば、今泉城は「須田玄蕃」の居住した中世城館、また沖野城は栗野氏に関わる城とされている。今泉遺跡の調査でも12世紀の屋敷跡が確認され、改変・整備を経て城館（今泉城）となったことが明らかになっている。沖野城跡（13）も時期的に並行している可能性があるが、検出された堀跡は時期の特定ができず詳細は不明である。

近世には、寛永4年（1627）、遺跡西側で伊達政宗が晩年の居城とした若林城が造営される。当遺跡や西側の養種園遺跡は、若林城下町の一部と考えられ、9次・11次・14次・17次で検出された遺構は城下町のうち武家屋敷に相当するものと考えられている。

4 基本層序

調査地点は約30cmの盛土がある。基本層は大別2層、細別4層を確認した。Ia層は層厚約25cmで近年の畑耕作土である。Ib層は層厚10～15cm、Ic層は層厚約10cmで、ともに旧畑耕作土層である。II層は黄褐色粘土で本調査の遺構検出面である。北側隣接地の第37次調査では、同層上面で8世紀前半以降の遺構を検出している。



第4図 遺構平・断面図

5 発見遺構と出土遺物

II層上面で、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土坑1基、ピット2基を検出した

1) 掘立柱建物跡

SB 1 掘立柱建物跡 調査区北半部に位置し、北側および西側は調査区域外に延びる。北側隣接地の第37次調査で建物北東角の柱穴 (SA 1 ①) を検

出しており、建物規模は、南北2間、

東西2間である。南北方向の柱間は、

SA 1 ① - P 3 が220cm、P 3 - 1 が



第5図 出土遺物

216cmで、総長436cmである。また東西方向の柱間はP1～2が170cmである。柱穴の長軸は、東列が南北方向、南列のP2が東西方向で、規模は、SA1①が85cm×60cm、深さ40cm、P3が100cm×63cm、深さ34cm、P1が87cm×64cm、深さ45cm、P2が91cm×65cm、深さ42cmである。いずれも底面に柱痕跡を検出している。遺物は土師器片、須恵器片が数点出土したが、図示できたのは須恵器蓋1点である。

2) 溝跡

SD1溝跡 調査区中央に位置し、西側は調査区域外に延びている。規模は検出長170cm、上端幅40～80cm、底面幅10～40cm、深さ5～10cmである。堆積土は暗褐色粘土で、黄褐色粘土ブロックを多量に含んでいる。

3) 土坑

SK1土坑 調査区南東に位置し、東部は調査区域外に延びている。北部はSK2土坑に切られている。平面形は長軸東西方向の長円形で、深さは約10cmである。遺物は、1層より土師器片が出土したが時期は不明である。

SK2土坑 調査区南東に位置し、東部は調査区域外に延びている。SK1土坑よりも新しくP2よりも古い。平面形は不整形で、規模は長軸80cm、短軸約50cm、深さ10～15cmである。出土遺物はなく時期は不明である。

4) ピット

調査区南側で2基検出した。深さはP1が8cm、P2が15cmである。遺物はP2より土師器小片が出上した。

5) 出土遺物

SB1掘立柱建物跡、SK1上坑、P2から土師器片、須恵器片量出土した。図化したのはSB1-P1出土の須恵器蓋である（第5図）。全体器形は不明であるが、小型のものと推定される。調整は内外面ともにロクロナデ、外面には段を有し、内面には端部の丸いカエリをもつ。時期は郡山官衙I期～II-A期に位置づけられる。

6まとめ

今回の調査では、II層上面で掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土坑2基、ピット2基を検出した。SB1掘立柱建物跡は第37次調査のSI1堅穴住居跡（8世紀前半）を切ることから、時期は8世紀前半以降となる。

<参考文献>

斎野裕彦1994「南小泉遺跡第22次・第23次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第192集

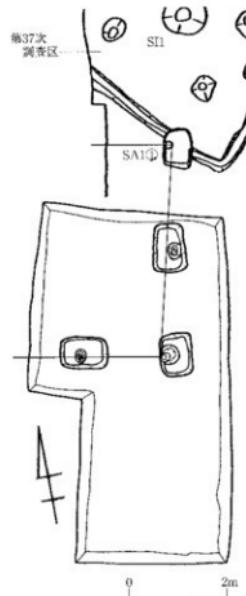
長島榮-2005「郡山遺跡発掘調査報告書」総括編1 仙台市文化財調査報告書第283集

藤田雄介2007「南小泉遺跡第50次発掘調査報告書」「松森城跡他発掘調査報告書」

仙台市文化財調査報告書第310集pp.51-57

渡部弘美2003「南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書」「国分寺東遺跡他発掘調査報告書」

仙台市文化財調査報告書第266集pp.157-172



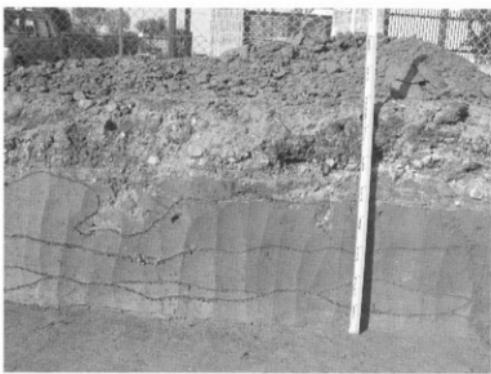
第6図 SB1掘立柱建物跡



1 遺構検出状況
(北西から)

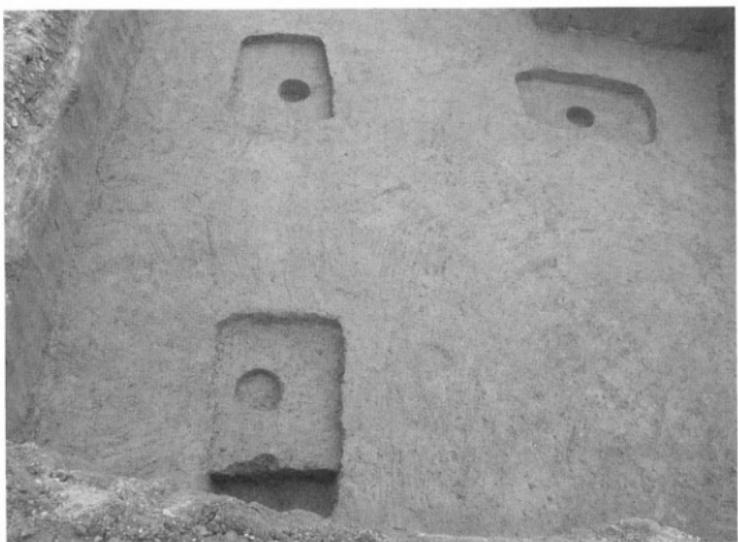


2 遺構完掘状況
(北西から)

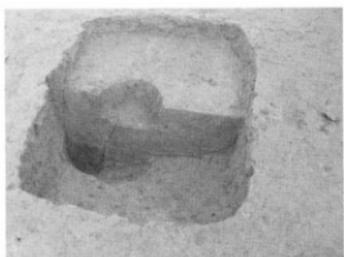


3 西壁断面
(南部)

図版1 調査区全景・基本層序



1 SB 1 据立柱建物跡検出状況（北から）



2 SB 1-P 1 断面（南から）



3 SB 1-P 2 断面（南から）



4 SB 1-P 3 断面（南から）



5 SK 1・2 土坑断面（南から）

図版2 遺構検出状況・断面

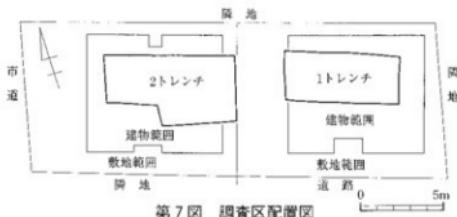
II 南小泉遺跡第53次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名 南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
 調査地點 仙台市若林区遠見塚一丁目6-29
 調査期間 平成19年2月19日～2月22日
 調査対象面積 119.24m²
 調査面積 42m²（1トレンチ21m²、2トレンチ21m²）
 調査原因 個人住宅建築
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
 担当職員 主査 工藤 哲司 文化財教諭 今野 秀治 早川 誠一

2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成18年11月2日付けて、
 敦信商事株式会社代表取締役 堀信男氏より、
 深さ2.5mの柱状土壤改良を伴う建壳個人住宅2棟の建築工事に係る「埋蔵文化財の
 取扱いについて（協議）」が提出されたので、
 確認調査を実施し、その上で必要な場合は本
 調査を実施するとした。確認調査は2月19日
 に着手し、2棟の建物建設予定地にそれぞれ



第7図 調査区配置図

東西7m×南北3mの調査区を設定した（東から1トレンチ、2トレンチ）。Ⅱ層上面で精査を行い、両トレンチで遺構が検出されたため引き続き本調査を実施した。また、2トレンチでは東部で竪穴住居跡が検出されたため、東西5m×南北1mの範囲を拡張した。

3 遺跡の位置と環境

遺跡の位置と現境については第52次発掘調査報告書を参照されたい。調査地点は遺跡の北西部に位置する。

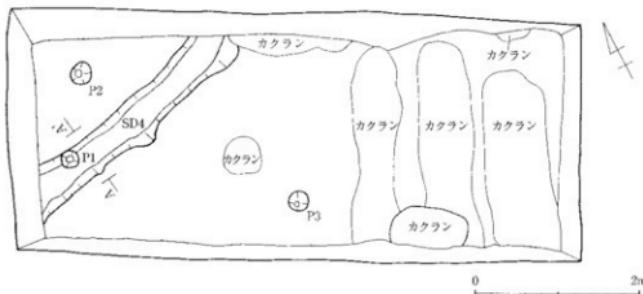
4 基本層序

調査地点では約90cmの盛土が確認ある。基本層序は地表下1.1mまで、I・II層の2層を確認した。II層は粘土質シルトであるが、下位は砂質シルトになる。上面は古代の遺構確認面である。

5 発見遺構と出土遺物

① 1トレンチ

溝跡1条、ピット3基を検出した。調査時に番号を付したSD1～3溝跡は、調査の結果、畑の耕作に関わる天
 地返しであることが判明したためカクランとして扱った。



第8図 1トレンチ遺構配置図



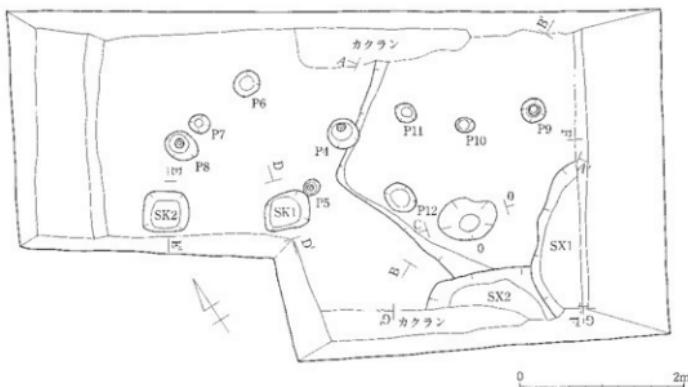
第9図 1トレンチ南壁断面略図、SD 4断面図

1) 溝跡

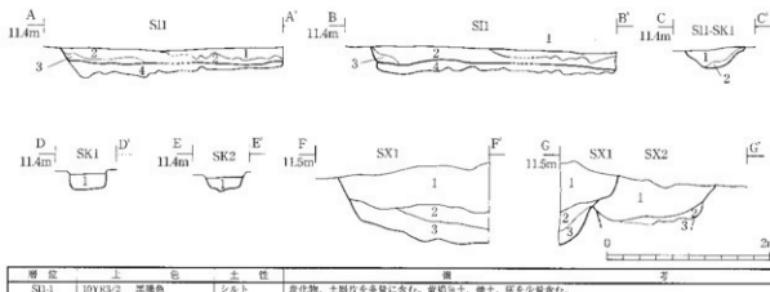
SD 4溝跡 溝充区西側で検出した。西側でP1に切られている。方位はN-40°~50°-Eで、規模は上端幅約50cm、下端幅約30cm、深さ約8cmである。断面形は皿状で、堆積層は1層である。出土遺物はなく時期は不明である。

2) ピット

3基検出した。P1はSD 4溝跡を切っている。P1は柱痕跡が見られることから柱穴の可能性がある。規模は直径20~25cm、深さ15~30cmである。出土遺物はなく時期は不明である。



第10図 2トレンチ遺構配置図



層位	上色	土性	備考
SI1-1	10YR5/3 黒褐色	シルト	炭化物、土殻片を多量に含む。黄褐色土、灰土、灰を少量含む。
-2	10YR4/6 黄褐色	シルト	重粘土を少量含む。
-3	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	褐色土を少量含む。
-4	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	褐色土、灰土、灰を多量に含む。
SI1-SK1-1	10YR3/4 灰褐色	粘土質シルト	褐色土ブロック（小）を微量に含む。
-2	10YR5/4 地褐色	粘土質シルト	褐色土ブロック（小）を微量に含む。
SK1-1	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	褐色土ブロック（小）を微量に含む。
SK2-1	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	褐色土ブロック（小）を微量に含む。
SX1-1	7.5Y5/2 オリーブ黒色	シルト質粘土	炭化物を少量含む。
-2	5Y2/2 オリーブ黒色	シルト質粘土	黒褐色土を微量に含む。炭化物、木片、木礫を少量含む。
-3	5Y2/2 オリーブ黒色	シルト質粘土	木の根を多量に含む。小礫を少量含む。
SX2-1	10YR4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物を少量含む。黒褐色土を微量に多量に含む。表面部はグリアイ化。
-2	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黒褐色土を微量に多量に含む。表面はグリアイ化。
-3	10YR5/3 地褐色	粘土	

第11図 2トレンチ遺構断面図

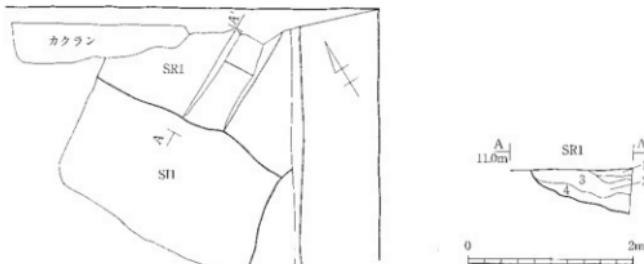
② 2トレンチ

堅穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑3基（うち1基は堅穴住居跡内で検出）、ピット8基（うち3基は掘立柱建物跡を形成、別の2基は堅穴住居跡から検出）性格不明遺構2基、河川跡1条を検出した。

1) 堅穴住居跡

SI1 堅穴住居跡 調査区東側に位置し、北側、東側は調査区域外におよんでいる。南側はSX1・2 性格不明遺構に切られている。確認面からの深さは約20cmである。住居内からはSK1 土坑とピット3基を検出した。SI1 内土坑としたものは住居内の南側床面で検出した。平面形は不整円形で、長軸74cm×短軸54cm、深さ30cmである。

遺物は堆積土中からロクロ使用の土器が多数出土しており、時期は9世紀前半でも中頃と考えられる。



層位	上色	土性	備考
SR1-1	10YR4/6 黄褐色	砂質シルト	
-2	10YR4/4 黄褐色	粗粒砂	
-3	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルトをまだら状に含む。
-4	10YR5/4 黄褐色	粗粒砂	にぶい黄褐色粘土を斑状に含む。

第12図 SR1 流路跡平・断面図

2) 挖立柱建物跡

SB 1 挖立柱建物跡 調査区中央北寄りで検出され、北側は調査区域外に延びている。東西 2 間以上の建物で南北は不明である。柱間は P 8 - 4 が 200cm、P 4 - 9 が 240cm で、東西の総長で 480cm である。柱穴の規模は、P 8 が 38cm × 34cm、深さ 32cm、P 4 が 38cm × 36cm、深さ 50cm、P 9 が 30cm × 28cm、深さ 35cm である。いずれも底面に柱痕跡が見られる。時期は、P 9 から 17 世紀頃の陶器が出土したことから、江戸時代前半頃であろう。

3) 土坑

SK 1 土坑 調査区中央西寄りに位置する。平面形は方形で、東西 57cm × 南北 44cm、深さ約 20cm である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、堆積土は 1 層である。出土遺物はなく時期は不明である。

SK 2 土坑 調査区西側に位置し、平面形は隅丸方形である。東西 54cm × 南北 50cm、深さ約 15cm で出土遺物はない。

4) ピット

掘立柱建物跡を構成しない単独のピットを 6 基検出した。P 5 では柱痕跡を確認している。それぞれのピットの深さは、P 5 = 42cm、P 6 = 30cm、P 7 = 43cm、P 10 = 17cm、P 11 = 9cm、P 12 = 11cm である。

5) 性格不明遺構

SX 1 性格不明遺構 調査区南東に位置し、東側は調査区域外に延びている。SI 1 竪穴住居跡および SX 2 性格不明遺構を切っている。平面形は不整形で、底面は未検出である。規模は検出範囲で南北 2m、東西 0.5m、深さは最深部で約 1m である。遺物は明治期と思われる陶磁器が出土しているため、近代の遺構と考えられる。

SX 2 性格不明遺構 調査区南東に位置し、南側は調査区外に延びている。SX 2 性格不明遺構に切られ、SI 1 竪穴住居跡を切っている。平面形は不整形で、底面は未検出である。規模は検出範囲で東西 1.5m、南北 0.5m、深さは最深部で 0.6m である。掘り込み形状から井戸跡の可能性もある。堆積土は 3 層で出土遺物はない。

6) 河川跡

SR 1 河川跡 調査区北東、SI 1 竪穴住居跡の掘り方底面で検出した。完掘は行わず、一部掘り下げを行い土層堆積状況の確認に留めた。東西方向に延びており、堆積土は 4 層である。出土遺物は、ロクロ不使用の土師器片が数点出土している。新旧関係および出土遺物から、時期は平安時代以前と思われる。

7) 出土遺物

遺物は SI 1 竪穴住居跡と SR 1 河川跡から出土している。ロクロ使用の土師器片（第 13 図 1 ~ 3）は底部回転系切りで、内面が黒色処理、ヘラミガキされているものである。また、大型の塊（同図 4）も同様の特徴を示している。ロクロ使用の甕（同図 6）は、口縁部が外傾し、受け口状を呈している。第 13 図 5 は底部が欠損しているロクロ使用の壺である。使用痕跡の明瞭な砥石（同図 8）も出土している。SR 1 流路跡からはロクロ不使用の単孔式の瓶も出土している。

6まとめ

- ① 1 トレンチでは、溝跡 1 条、ピット 3 基を検出したが、時期は不明である。

② 2 レンチでは、平安時代以前の河川跡 1 条、平安時代の堅穴住居跡 1 軒、近世の掘立柱建物跡、近代の性格不明遺構 2 基のほか、土坑 3 基、ピット 6 基を検出した。

<参考文献>

工藤哲司2006「南小泉遺跡第44次発掘調査報告書」「前田館跡他発掘調査報告書」

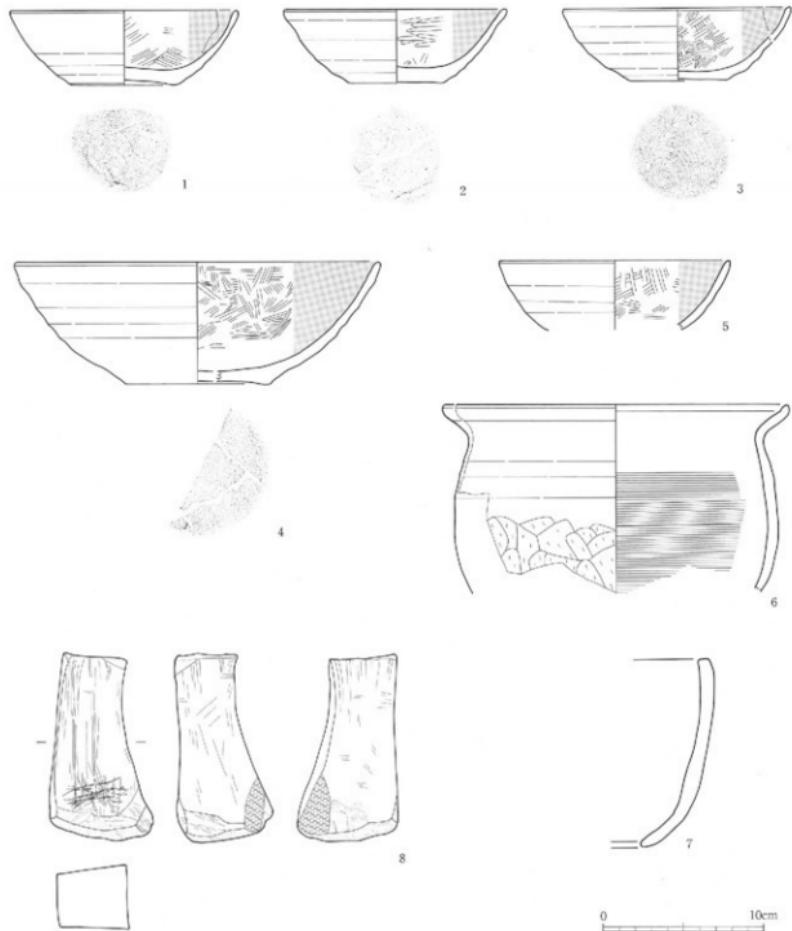
仙台市文化財調査報告書第301集pp.81-93

今野秀治2005「南小泉遺跡第45次発掘調査報告書」「山田本町遺跡他発掘調査報告書」

仙台市文化財調査報告書第287集pp.127-134

渡部弘美2003「南小泉遺跡（第37次）発掘調査報告書」「国分寺東遺跡他発掘調査報告書」

仙台市文化財調査報告書第266集pp.157-172

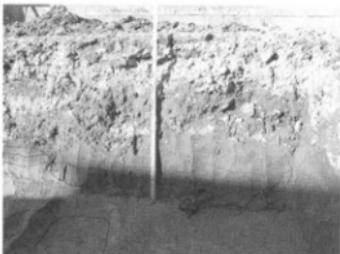


図号	登録番号	出土場所	分類	基準	寸 法 (cm・g)			特徴・備考 (調査、重版、実材、断片、本数、深度、時期)	写真 登載	
					高さ・長 さ	口径・幅 さ	底径・厚 さ			
1	D-1	SE-1	1	ロクロ土師器	環	4.7	14.1	6.4	外面：ロクロ 瓶口斜面直切 内面：ヘラミガキ、黑色處理	7-1
2	D-16	SE-1	2	ロクロ土師器	環	4.6	13.8	5.0	外面：ロクロ 底部斜面直切 内面：ヘラミガキ、黑色處理	7-2
3	D-17	SE-1	2	ロクロ土師器	环	4.5	14.2	5.0	外面：ロクロ 底部斜面直切 内面：ヘラミガキ、黑色處理	7-3
4	D-2	SE-1	1	ロクロ土師器	环	7.6 (22.6)			(9-1) 外面：ロクロ 底部斜面直切 内面：ヘラミガキ、黑色處理	7-4
5	D-4	SE-1	1	ロクロ土師器	环	(4.3)	14.3		外面：ロクロ 内面：ヘラミガキ、黑色處理	7-5
6	D-9	SE-1	1	ロクロ土師器	環	(11.7)	21.4		外面：ロクロ 体部ヘラケメリ 内面：ロクロ後体部ヨコナデ	7-6
7	C-2	SR-1	1	青ロクロ土師器	瓶				内外面黒被	7-7
8	K-1	SE-1	2	石製品	砾石	11.8	6.5	6.0 480	表面状あり 図中のトーンは施想圖	7-8

第13図 遺物実測図



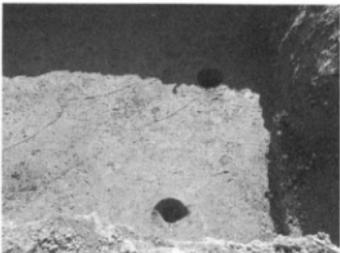
1 第1トレンチ造構検出状況（東から）



2 基本層序（北壁）



3 SD4溝跡（西から）



4 P1・2完掘（北から）



5 P3完掘（北から）

図版3 第1トレンチ



1 第2トレンチ遺構検出状況
(南東から)



2 遺構発掘状況
(南東から)



3 遺構完掘状況
(南西から)

図版4 第2トレンチ



1 SI1・SK1・P11・12検出状況
(南東から)

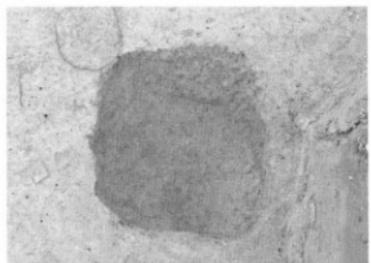


2 完成状況
(南西から)

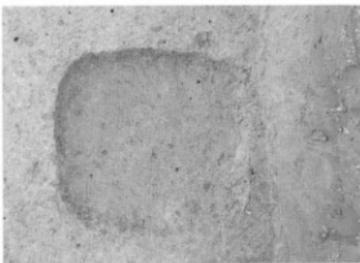


3 完成状況
(南東から)

図版5 SI1 竪穴住居跡



1 SK1 完掘（西から）



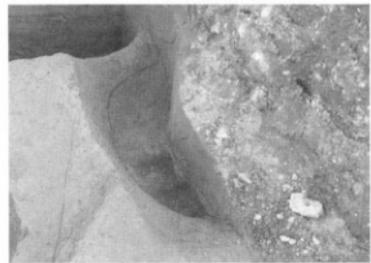
2 SK2 完掘（西から）



3 SX-2 性格不明遺構（南から）



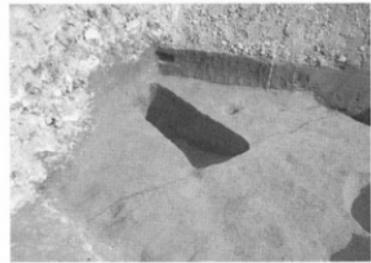
4 SX1 性格不明遺構断面（西から）



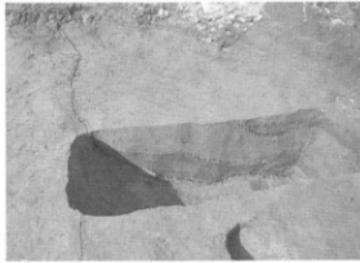
5 SX2 性格不明遺構（西から）



6 SR1 流路跡検出状況（南東から）

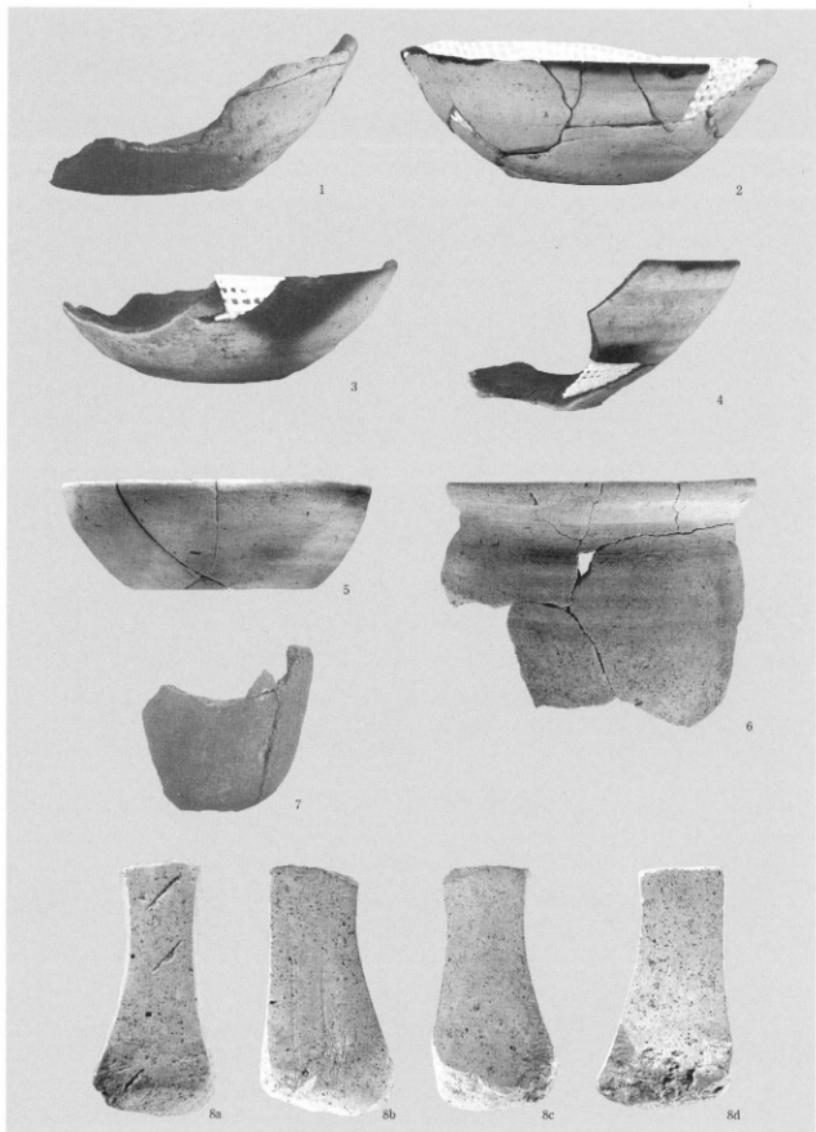


7 SR流路跡検出状況（西から）



8 SR1 流路跡断面（南東から）

図版6 土坑・性格不明遺構・流路跡



図版7 南小泉遺跡53次出土遺物

III 南小泉遺跡第54次発掘調査報告書

1 調査要項

遺 跡 名 南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
 調 査 地 点 仙台市若林区一本杉町22-9
 調 査 期 間 平成19年3月5日～3月7日
 調査対象面積 89.59m²
 調査面積 約33m²
 調査原因 個人住宅建築
 調査主体 仙台市教育委員会
 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
 担当職員 主査 工藤 哲司 文化財教諭 今野 秀治 藤田 雄介

2 調査に至る経過と調査方法

平成19年1月26日付で、地権者武者辰夫氏より深さ2.75～3.75mの柱状土壤改良を伴う2階建て個人住宅の建築工事に係る発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。

確認調査は、平成19年6月1日に実施した。建物建築予定地に南北3m×東西11mのトレンチを設定して調査を行ったところ、調査区内から掘立柱建物跡や小溝状造構群などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。



第14図 調査区配置図

3 遺跡の位置と環境

南小泉遺跡の位置と環境については、本書の「I 南小泉遺跡第52次発掘調査報告書」を参照されたい。今回の調査地点は南小泉遺跡の北西部に位置しており、標高は約12mである。

4 基本層序

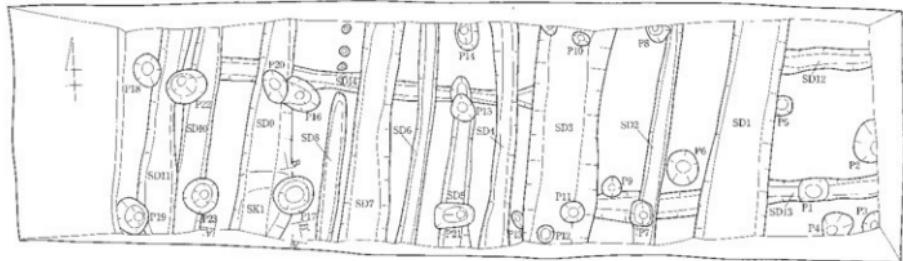
調査地点は50～75cmの盛土がある。その下のⅠ層は層厚5～15cmのシルト層で、近年の畑耕作土である。Ⅱ層以下はシルト質粘土層で土色により分層される。層厚はⅡ層が5～10cm、Ⅲ層が層厚5～10cm、Ⅳ層が層厚5～15cmである。Ⅳ層は旧耕作土と推定され、土器片、須恵器片を少量含む。Ⅴ層は基壇層で遺構検出面である。

5 発見遺構と出土遺物

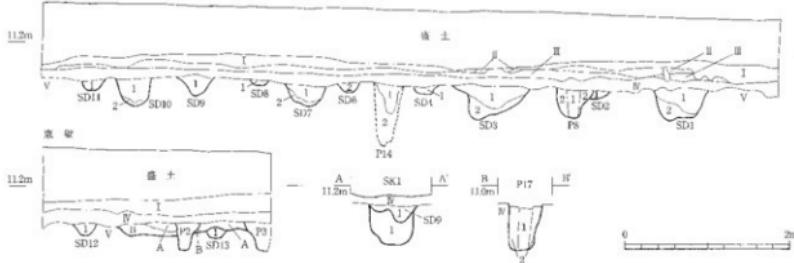
Ⅴ層上面で、掘立柱建物跡1棟、小溝状造構群4群、土坑1基、ピット19基が検出された。

1) 掘立柱建物跡

SB1 掘立柱建物跡 調査区の中央やや東寄りで4基の柱穴（P7、8、14、21）が検出された。P8は、小溝状構1c群を切っている。P7およびP21は、それぞれ重複する小溝状構1c群を掘削した際に検出されたが、P8と1c群の重複関係から、P7およびP21も各小溝状構を切っていると考えられる。P14は他遺構と重複がない。



北壁



東壁

高水期	上			中			下		
	土	ナ	性	土	ナ	性	土	ナ	性
I	10YR4/3	にじみ黄褐色	シルト	酸性灰土。一部はクライ化して黄褐色に変化。					
II	10YR2/2	黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含む。					
III	10YR2/3	にじみ黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を含み、下部に腐植する。					
IV	10YR2/4	暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄およびマンガンを含む。土器片、破壊器具を含む。旧耕作土か。					
V	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	シルト質粘土、黑褐色。砂を多量に含む。					
層位	土	ナ	性	土	ナ	性	土	ナ	性
SAL1-P7-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を複数に含む。新規に酸化鉄が発達。					
2	10YR5/6	黄褐色	粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SAL1-P8-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
2	10YR5/6	黄褐色	粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。マンガン粒を少量含む。					
SB1-P14-1	10YR4/3	にじみ黄褐色	粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
2	10YR3/4	暗褐色	粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。土器片を含む。					
SB1-P14-2	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。土器片を含む。					
2	10YR5/6	黄褐色	粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD1-1	10YR3/4	にじみ黄褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
2	10YR3/4	暗褐色	粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD2-1	10YR5/6	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
2	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD3-1	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
2	10YR5/6	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD4-1	10YR5/6	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD5-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD7-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
2	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD8-1	10YR4/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD9-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD9-0	10YR2/3	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
2	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD11-1	10YR5/6	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD12-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD12-2	10YR5/6	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SK1-1	10YR5/6	黄褐色	粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
SD1-1	10YR5/6	黄褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
P2-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
P3-1	10YR5/6	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
P4-1	10YR4/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
P5-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
P7-1	10YR3/4	暗褐色	粘土	塊状土塊。黄褐色土塊を多量に含む。					
2	10YR5/6	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
A	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。					
B	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	柱状理。黄褐色土塊を多量に含む。小漂状痕跡の堆積土上。					

第15図 遺構平・断面図

検出部の規模は東西1間約230cm、南北1間約230cmである。南北両方向もしくは一方に延びていると推定されるが建物の規模、柱穴配置は不明である。方向はN-10°-Eである。柱穴は隅丸長方形を基調とし、長軸30~50cm、短軸20~30cmを測る。検出面からの深さは30~75cmである。柱痕跡は4基とも検出されており、円形で直径10~15cmを測る。柱は4基とも抜き取られている。P14の掘り方堆土中から土師器片が数点出土した。

2) 土坑

SK1土坑 調査区西部南壁際で検出された。南部は調査区外に延びている。SD9小溝状造構、P17に切られている。平面形は隅丸方形で、南北長軸80cm以上、東西短軸約60cmを測る。断面形は不整なU字形で、深さは25~40cmである。

3) 小溝状造構群

調査区全面にわたって溝跡が14条検出された。検出規模や方向、切り合いなどの関係から、

- ・調査区の東半部で検出され、南北方向で比較的大規模なものを小溝状造構1a群
- ・調査区の西半部で検出され、南北方向で比較的中規模なものを小溝状造構1b群
- ・調査区の西部2/3で検出され、南北方向で比較的小規模なものを小溝状造構1c群
- ・調査区の全面で検出され、東西方向で比較的小規模なものを小溝状造構2群

と分別した。

小溝状造構1a群 調査区の東半部で検出されたSD1、3である。小溝状造構2群とP5、10~13を切る。検出部の規模は長さ約2.7m、上端幅70~90cm、下端幅45~60cm、深さ30~40cmで、断面形は不整なU字形である。調査区を南北方向に横切り、心々距離220cm前後ではほぼ平行して2条検出された。堆積土中から土師器片が少量出土した。

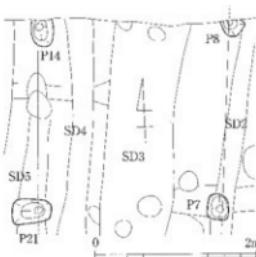
小溝状造構1b群 調査区の西半部で検出されたSD7、9、11である。小溝状造構1c群と小溝状造構2群を切り、SK1土坑、P16~20、22に切られている。検出部の規模は長さ約2.7m、上端幅40~70cm、下端幅20~40cm、深さ20~35cmで、断面形は不整なU字形である。調査区を南北方向に横切り、心々距離130cm前後ではほぼ平行して3条検出された。堆積土中から土師器片が少量出土している。

小溝状造構1c群 調査区全域で検出されたSD2、4~6、8、10である。小溝状造構2群を切り、SB1掘立柱建物跡と小溝状造構1b群、P15、22、23に切られている。検出部の規模は長さ2.1~2.7m、上端幅10~40cm、下端幅10~20cm、深さ5~30cmで、断面形は船底形である。調査区を南北方向に横切り、心々距離60cm前後ではほぼ平行して6条検出された。

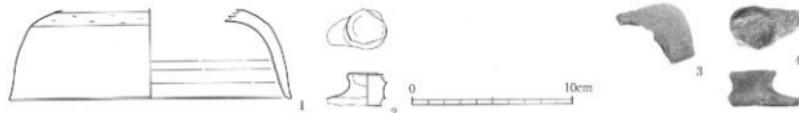
小溝状造構2群 調査区全域で検出されたSD12~14である。SB1掘立柱建物跡と小溝状造構1a~1c、2群、P9、15、16、20に切られている。検出部の規模は長さ1.1~3.9m、上端幅20~30cm、下端幅10~20cm、深さ2~10cmで、断面形は船底形である。調査区を東西方向に横切り、3条が検出された。配置に規則性は見られない。

4) ピット

調査区全域で19基のピットが検出された。平面形は直径20~50cmの円形もしくは梢円形で、深さは10~65cmで



第16図 SB1 掘立柱建物跡平面図



図中 番号	登録 番号	出土場所	分類	法 器名	径 (cm・g)	特徴・備考 (関係・重量・素材・頃様・木取・施装・時期)	参考 図版
1	E-1	荒木解 遺構名 遺構番	須恵器 種別 瓢箪	器高 5.5	17.5 重さ 11.5g	外面：ロクロ 球部斜面へラグアリ 内面：ロクロ つまみ前のみ	3
2	C-1	P14	2	赤ロクロ土器 蓋			4

第17図 出土遺物

ある。柱痕跡は、調査区西部で検出されたP16、17、19、22、23の5基で確認された。柱の並びが想定されるものはない。P15、23の堆積土中から土師器片が数点出土した。

5) 出土遺物

IV層より土師器小片、須恵器蓋が出土したほか、SB1掘立柱建物跡のP14の掘り方埋土、SD3、7小溝状遺構、P15、23より土師器片が出土した。IV層出土の須恵器蓋は端部から上方へ立ち上がる器形であり、器高5.5cmを測る(第17図1)。端部は平坦に整形されている。この器形の蓋は壺蓋と想定され(長島2005、他)、郡山遺跡第65次調査の報文では同種の蓋を宮城県黒川郡大和町鳥屋窯跡出土遺物(東北学院大学考古学研究部1975)と比較し、遺物の時期について8世紀前半としている(長島1992)。郡山遺跡の他の出土例もⅡ期官衙に伴う遺構から出土しており、第17図1の須恵器蓋は7世紀末~8世紀前葉のものと考えられる。

また、SB1掘立柱建物跡のP14の掘り方埋土より土師器蓋が出土した(第17図2)。ツマミ部のみであり、全体形状、時期は不明である。ツマミ中央が凹み、リング状を呈する。他に時期を特定できる資料は出土しなかった。

6まとめ

- ① 基本層V層上面で、掘立柱建物跡1棟、小溝状遺構群4群、土坑1基、ピット19基が検出された。
- ② 掘立柱建物跡および小溝状遺構群に関しては、時期を決定する資料の出土はないが、近接する調査地点の対応する遺構検出面から、古墳時代から平安時代の建物跡や小溝状遺構群が検出されていることから、この年代の遺構と推定される。土坑やピットも検出状況などからほぼ同時期の遺構と推定される。

<参考文献>

工藤哲司2005「南小泉遺跡第41次発掘調査報告書」『山田本町遺跡他発掘調査報告書』

仙台市文化財調査報告書第287集pp.121-126

今野秀治2007「南小泉遺跡第51次発掘調査報告書」『松森城跡他発掘調査報告書』

仙台市文化財調査報告書第310集pp.59-63

東北学院大学考古学研究部1975「鳥屋窯跡群三角田南地区発掘調査報告」『温故』9 pp.1-90

長島榮一1992「郡山遺跡」仙台市文化財調査報告書156集

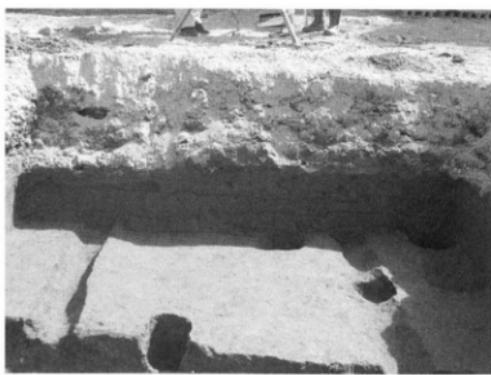
長島榮一2005「郡山遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第283集



1 遺構検出状況
(北東から)

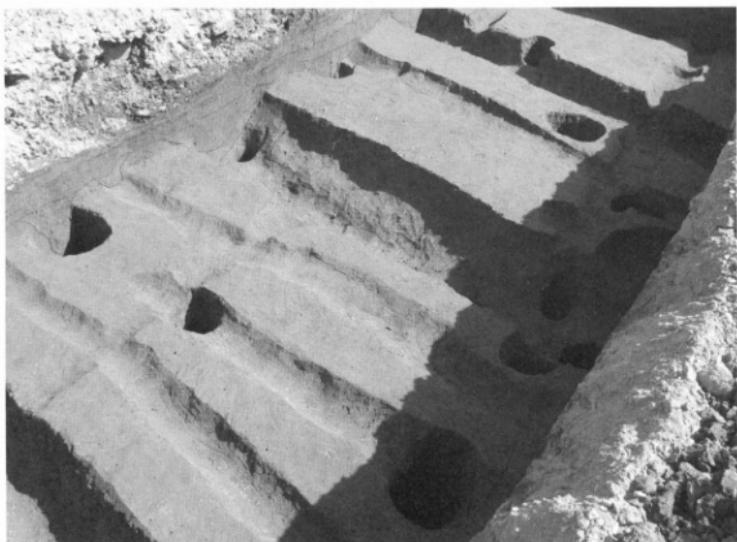


2 遺構検出状況
(南西から)



3 基本層序
(北壁)

図版 8 検出状況・基本層序



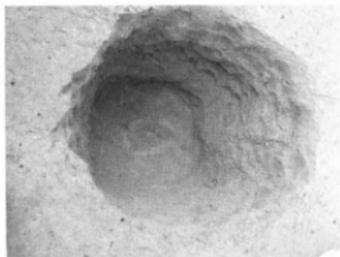
1 SB 1 挖立柱建物跡（南西から）



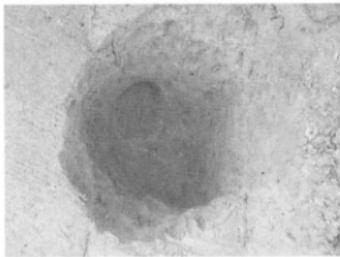
2 SK 1 土坑とP17（西から）



3 SK 1 土坑断面（北から）



4 P17完掘（東から）



5 P19完掘（西から）

図版 9 挖立柱建物跡・土坑・ピット



1 小溝状遺構群（南西から）



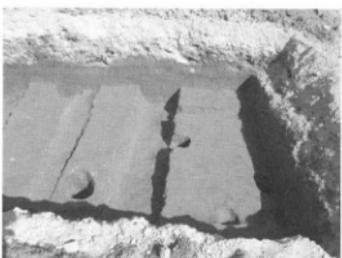
2 小溝状遺構群西部（南から）



3 小溝状遺構群中央西（南から）



4 小溝状遺構群中央東（南から）



5 小溝状遺構群東部（南から）

図版10 小溝状遺構群



1 遺構完掘状況（西から）



2 遺構完掘状況（東から）

図版11 調査区全景

IV 南小泉遺跡第55次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）	
調査地点	(Aトレンチ) 仙台市若林区遠見塚一丁目44-5の一部 (Bトレンチ) 仙台市若林区遠見塚一丁目44-51 (Cトレンチ) 仙台市若林区遠見塚一丁目44-52 (Dトレンチ) 仙台市若林区遠見塚一丁目44-53	
調査期間	Aトレンチ	平成19年4月18日～19日
	B～Dトレンチ	平成19年6月7日～8日・11日
調査対象面積	(Aトレンチ) 67m ²	(Bトレンチ) 58.79m ²
	(Cトレンチ) 56.31m ²	(Dトレンチ) 69.77m ²
調査面積	(Aトレンチ) 21m ²	(Bトレンチ) 20m ²
	(Cトレンチ) 28.6m ²	(Dトレンチ) 27m ²
調査原因	個人住宅建設	
調査主体	仙台市教育委員会	
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係	
担当職員	主任 長島 栄一	主事 加藤 隆則 文化財教諭 志賀 雄一 工藤 慶次郎

2 調査に至る経過と調査方法

本調査は、同じ造成地内での隣接する4棟の住宅建築に伴うため、一括して第55次調査として扱った。それぞれ西からA～Dトレンチとし、調査区を設定して確認調査を実施した。

(Aトレンチ)

平成19年3月2日付けで、曾澤貞美氏より、柱状土壤改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行うこととした。建設予定地に7×3mのトレンチを設定して調査を行ったところ、調査区内から土師器甕などの遺物や柱痕跡を伴うピットなどの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

(Bトレンチ)

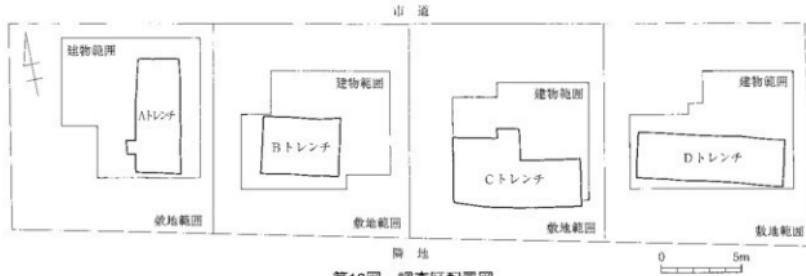
平成19年4月20日付けで、高橋徹氏より、柱状土壤改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行うこととした。Aトレンチ東側の建設予定地に4×5mのトレンチを設定して調査を行ったところ、溝跡・ピットなどの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

(Cトレンチ)

平成19年4月20日付けで、志賀理雄氏より、柱状土壤改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行うこととした。Bトレンチ東側の建設予定地に3×8mのトレンチを設定して調査を行ったところ、壺・壺などの遺物や土坑などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

(Dトレンチ)

平成19年5月31日付けで、見田智氏より、柱状土壤改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので確認調査を行うこととした。Cトレンチ東側の建設予定地に3×9mのトレンチを設定して調査を行ったところ溝や



第18図 調査区配置図

ピットなどの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

遺跡の環境については本報告書掲載の南小泉遺跡第52次発掘調査報告書を参照されたい。

今回の調査区は遺跡のほぼ中央部で、遼見塚古墳の西側220mに位置する。周辺では昭和63年度に、今回調査区の北側で、宅地造成に伴う道路部分を対象とした第18次調査が行われている。その際に調査区南側のⅡ区では、堅穴住跡3軒、溝跡8条、小溝状遺構群などが発見され、古墳時代後期の集落や中世の遺構群の広がりを確認している。特にカマドや貯蔵穴がある堅穴住跡からは、土師器壊・壺・甌などの遺物が出土したりしている。また、平安時代の遺存状況が良好な住跡も発見されている。

4 基本層序

A・C・Dトレンチの北壁、Bトレンチの東面で基本層の観察を行った。AトレンチとB～Dトレンチとの層序の違いがあったため、4トレンチのうち、B～Dトレンチの基本層序のみ共通のものとした。

(Aトレンチ)

調査地点には15cm～30cmの盛土がある。その下のI層は旧耕作土である。II層は褐色粘土質シルトであり、調査区東側のみ堆積している。III層は黄褐色砂である。このII・III層が遺構検出面である。IV層は褐色砂であり、砂礫を多量に含んでいる。

(B～Dトレンチ)

15cm～25cmの盛土がある。I層はIII耕作土であり、大部分がグライ化している。II層は褐色シルトで、遺構検出面である。AトレンチのII層に対応しているものと考えられる。III層はにぶい黄褐色砂であり、AトレンチのIV層に対応するものと考えられる。

5 発見遺構と出土遺物

①Aトレンチ

II・III層上面から、ピットを16基検出した。また、土師器壺や土師器壊、平箱1/4程度の土師器片が出土した。

1) ピット

P9 II層上面の、調査区中央部で検出した。直径約12cm、深さ16cmで、柱痕跡が唯一検出され、柱材を伴った小規模な柱穴と考えられる。

P12 II層上面の、調査区南西部で検出した。長軸42cm、短軸35cm、深さ32cmの楕円形である。底面から、ロクロ不使用の土師器壺、小型壺が出土した。

壺（第23図4）は、体部が縦長の楕円形で、「く」字状に外反する口縁部を持つ。底部は口径が小さい平底でやや安定性を欠く。外面の体部がヘラミガキ、内面の体部がヘラナデである。

2) 出土遺物

I層の上面からほぼ完形の土師器壺が、II層上面から土師器壺が、II層中から弥生土器が出土した。また、III層上面から壺、高壺、小型壺、壺、瓶が出土した。いずれもロクロ不使用の土師器である。I層上面出土の壺（第23図1）は、平底で体部が丸味をもって立ち上がり、口縁部になりやや内寄する。外面は、口縁部がヨコナデ、体部から底部までヘラケズリである。内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラミガキである。以上の土師器は、器形、調整の特色から東北地方の土器編年でいう南小泉式（古墳時代中期）に相当するものと考えられる。II層出土の弥生土器（第23図3）は壺の破片で、表面に沈線文がある。

②Bトレーナー

II層上面において、溝跡2条とピット12基を検出した。また、SD1から石器片、陶器片、土師器片、SD2から瓦片、青磁片、土師器片、ピット群から土師器片が出土した。

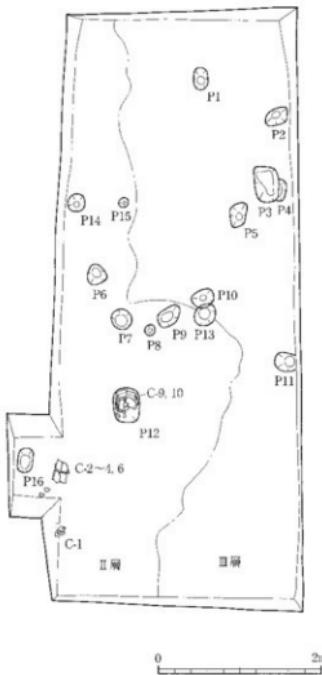
1) 溝跡

SD1溝跡 調査区南東隅で検出された。南西から北東方向に延びる幅80cm～100cmの溝跡で、調査区外に延びている。断面はほぼU字型を呈し、堆積土は1層である。堆積土から石器片、陶器片、土師器片が出土した。土師器片はすべて非ロクロ成形である。

SD2溝跡 調査区北西部で検出された。南北に伸びる幅160～180cmの溝跡で、調査区外に伸びていると考えられる。断面形はV字型であるが、南端部分のみU字型に深く掘り込んである。堆積土は2層である。堆積土から青磁片、瓦片、石器片が1点ずつ、土師器片が数十点出土した。瓦片は、形状から玉縁の部分で時期は平安時代であると考えられる。また、青磁片は中国青白磁小皿の体部および底部の一部で、形状等の特色から鎌倉時代（13世紀か）のものであると考えられる。

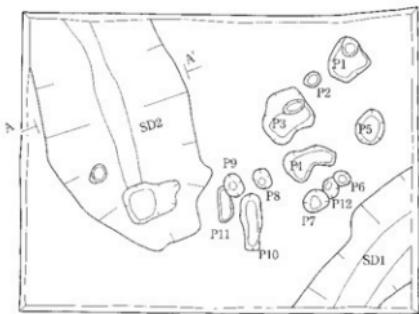
2) ピット

調査区全域から、計12基のピットを検出した。検出面はいずれもII層上面である。平面形は不整形を基調とし、

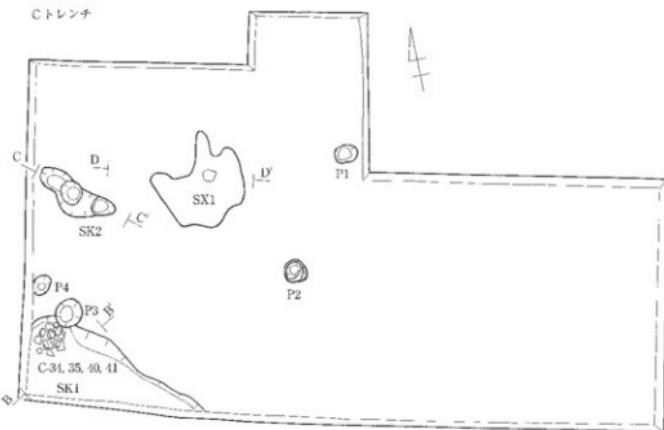


第19図 Aトレーナー遺構配置図

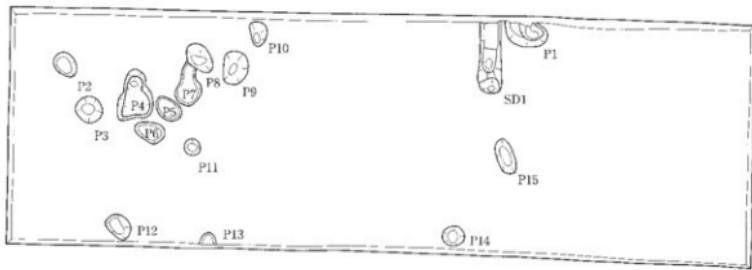
B トレンチ



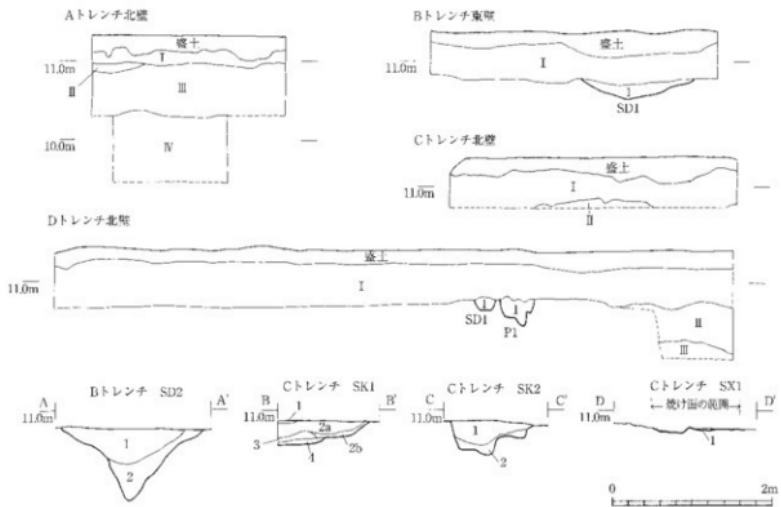
C トレンチ



D トレンチ



第20図 遺構配置図



A レンチ				B レンチ				C レンチ				D レンチ			
層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
I	10YR4/4 暗褐色	粘土質シルト	泥炭特有土。												
II	7.5YR4/4 暗褐色	粘土質シルト	過剰換気層。中に分厚。												
III	10YR5/5 黄褐色	砂	過剰換気層。両方に分厚。												
IV	7.5YR6/5 暗褐色	粗粒砂	0.5~50mmの砂砾を多量に含む。												
B-D レンチ				A' - C'				B' - C'				D'			
I	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	グライ化した土を多量に含む。	A'	11.0m	1		B'	11.0m	1		C'	11.0m	1	
II	10YR4/4 暗褐色	シルト		B		2a		C		2		D			
III	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂				1									
層 定				ナ、カ、ホ				層				考			
B-SK2-1	10YR4/2 黄褐色	シルト質粘土		ナ				カ				ホ			
2	10YR5/3 厚灰色	シルト質粘土	黄褐色シルトブロックを含む。												
C-SK1-1	10YR4/2 黄褐色	シルト質粘土													
2a	10YR4/1 厚灰色	シルト質粘土													
2b	10YR4/1 厚灰色	シルト質粘土	砂を多量に含む。												
3	10YR5/2 黄褐色	シルト質粘土	変化物を多量に含む。												
4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	変化物を少量化。												
C-SK2-2	10YR3/2 黄褐色	シルト質粘土													
2	10YR3/2 黄褐色	シルト質粘土													
C-SK1-4	5YR6/6 带色	粘土													

第21図 遺構断面図

大きさからは直径20cm~50cmで、検出面からの深さは4cm~40cmである。柱痕跡を検出できたものはない。P1、4、5からそれぞれ土師器片が出土した。ロクロ使用のものと不使用のものが含まれている。

③C レンチ

II層上面においてピット4基、土坑2基を検出した。また竪穴住居を著しく削平した跡とみられる性格不明遺構SX1を検出した。遺物は、SK1土坑とSX1およびその周辺のII層上面から高坏や坏などのロクロ不使用の土師器等がまとまって出土した。さらにピットからも土師器片等が少量出土した。

1) 土坑

SK1土坑 調査区南側のⅡ層上面で遺構の一部を検出した。遺構の全容は明らかではないが、調査区内における幅は東西約2m30cm、南北80cm、深さは約25cmである。堆積土は4層である。堆積土から、土師器高环が6点、土師器甕2点、土師器坏1点、手捏ね土器出土した。

高环は、調整は不明瞭であるが脚端部のみ欠損したもの（第25図9）、同様の形態で環部のみのもの（第25図8）が出土し、その他に口縁部の破片のみのものが4点ある。第25図9は、環底部と体部の境があまり明瞭でなく口縁部まで立ち上がる。脚部は円錐状で中央がやや膨らんでいる。調整は、内面の脚部はヘラケズリである。第25図8は外面は口縁部がヨコナデのちヘラミガキ、体部はヘラケズリのちヘラミガキ、内面はヨコナデのちヘラミガキである。甕は2点出土した。第25図7は、口縁部および体部上部の一部のみである。口縁部は「く」字形に外傾している。外面、内面ともにヨコナデ、頸部はナデのちヘラミガキである。また第25図8は、口縁部の破片のみである。折り返し口縁で、表面が磨滅しており調整は不明瞭である。

坏（第25図6）は、口縁部が屈曲し、体部内面には明確な棱がつく。体部はふくらみをもちやや肩が張る。底部は平底である。手捏ね土器（図版19-6）は、底が丸みを帯びた平底である。

第25図8は口縁の形状から、塗釜式または南小泉式初期と考えられる。また、他の土師器は器種、形状等の特徴から南小泉式に相当すると考えられる。塗釜式の土師器は、今回調査地点の近接で実施された第21次調査、第26次調査でも出土していることから、この遺構の時期は古墳時代中期が中心ではあるが、前期までさかのばる可能性も考えられる。

SK2土坑 調査区西側のⅡ層上面で検出した。東西約1m、南北20~40cm、深さ約40cmの土坑である。平面形は楕円形を呈し、堆積土は2層である。遺物は出土しなかった。

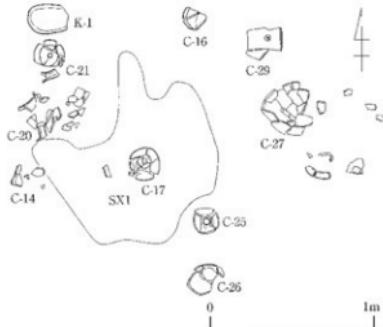
2) ピット

調査区中央部から西側で、4基検出した。いずれも平面形は円形である。大きさは直径20cm~30cmで、深さは20cm~30cmである。P3、P4から土師器片が1点ずつ出土した。いずれも器種、形状等は不明である。

3) 性格不明遺構

SX1性格不明遺構 調査区北側、Ⅱ層上面で検出された。東西約650cm×南北20cm、深さ約7cmの不整形を呈し、東西方向に広がっている。貼床やピットなどは検出されなかつたが、遺物の出土状況や炉状の焼土痕跡などがあることから、堅穴住居が著しく削られた跡である可能性がある。SX1およびその周辺から出土した遺物は、礫石器1点、高环7点、环5点、甕2点、甕2点、壙1点、小壙1点等である。出土した土師器はすべてロクロ不使用のものである。

礫石器（第23図5）は中央に敲打痕のある磨凹石である。不整な楕円形で、長軸42cm、短軸35cm、厚さ21~48cmである。



第22図 Cトレーンチ遺物出土状況

高坏はほぼ完形のものが3点出土した（第24図4・5・6）。第24図4は、下端が直線的になるが、中位が膨張り状に膨らみ、坏部ではまるものである。外面は口縁部がヘラミガキ、体部、脚部はヘラケズリ、内面は坏部がヘラナデのちヘラミガキ、脚部がヘラミガキである。第24図5は同4に比べ脚部の立ち上がりが直線的である。外面は坏部がヘラナデとヘラケズリ、脚部がヘラナデである。内面は脚部がヘラケズリ、内面は口縁部は磨滅している。脚部がヘラケズリである。第24図6は、同4・5に比べ坏部の体部と底部の境に明瞭な稜がつく平底である。外面は体部がヘラミガキ、ヘラケズリ、脚部がヘラケズリ、内面は口縁部がヘラナデのちヘラミガキ、脚部はヘラケズリ、ヨコナデである。第24図3は坏部のみである。いずれも口縁部は直線的に外傾し、平底風である。

坏は、底部から口縁部まで残存するものは2点出土した（第24図1・2）。いずれも丸底で、体部から口縁部へ全体に丸みをもって立ち上がる。第24図1は口縁部がほぼ直立するのに対し、同2は口縁部がくびれ外反する。調整はいずれも外面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラケズリ、内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデである。この他に坏では口縁部と体部の一部のみではあるが、2点出土した。第25図5は口縁部と体部の境に明瞭な角がつき、口縁部は直立気味に立ち上がる。外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリのちヘラミガキ、内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラケズリである。また、第25図4は内、外面が赤彩されている。体部から口縁部へ丸みをもって立ち上がり、口縁部は屈曲している。調整は磨滅のため不明瞭である。

瓶は2点出土した（第25図2、第24図9）。第25図2は口縁部が「く」字状の屈曲をもち、体部は丸味があり、底部は単孔式である。調整は、外面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデのちナデ、内面は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデのちナデ、底部がヘラケズリである。第24図9は体部の一部のみである。中央部には把手がつけられている。外面は口縁～体部がヘラナデ、把手付近はヘラケズリ、内面にはハケメが施されている。

甕は2点出土した（第25図1・3）。第25図3はほぼ完形である。最大径が体部中央にあり、球形であるがやや縱長である。底部は平底で安定している。外面は、口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデのちナデ、内面は口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデのちナデ、底部はヘラケズリである。同1は底部と体部の下部のみである。平底で、調整は体部がヘラケズリで火燃を受けている。壠（第24図7）は、口縁部と体部上部のみである。口縁部は直線的に外傾し、体部は球形であると推定される。調整は、口縁部の内面がヘラナデで、外面は磨滅している。

土師器は器種ごとに形状や調整の違いは多少あるものの、いずれも南小泉式に相当するものと考えられる。したがってSX1は、古墳時代中期の遺構であると考えられる。また、高坏の出土が多いことが特徴的である。

④Dトレーンチ

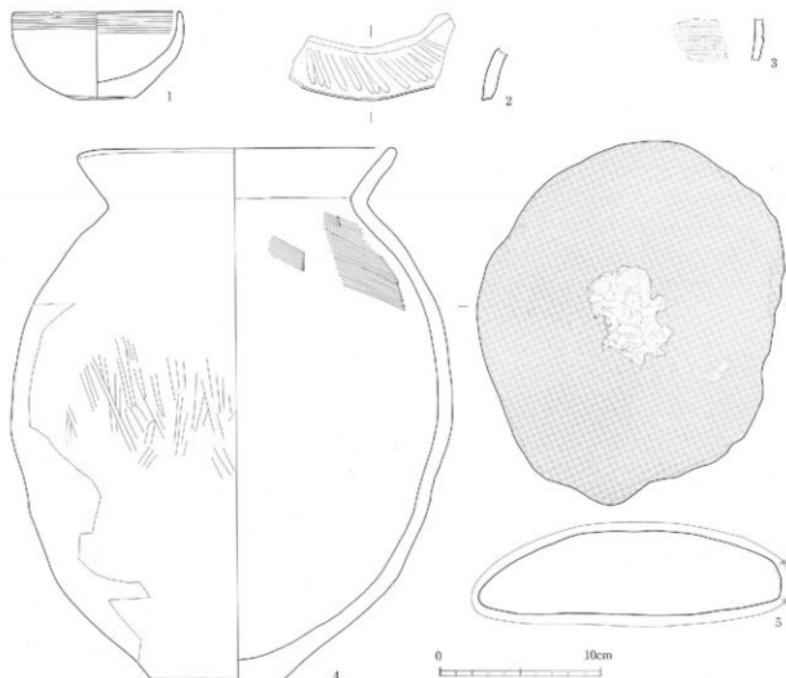
II層上面で溝跡を1条とピットを16基検出した。また、II層上面や溝跡、ピットからは磁器片が出土した。

1) 溝跡

SD1溝跡 調査区北壁から中央部にかけて検出し、調査区外に延びている。南北方向に延び、幅が約30cm、深さ約16cm～28cmの溝跡である。断面形はU字形を呈す。遺構の堆積土から土師器片が数点出土した。器種等の詳細が明らかでないが、いずれもロクロ不使用の土師器である。

2) ピット

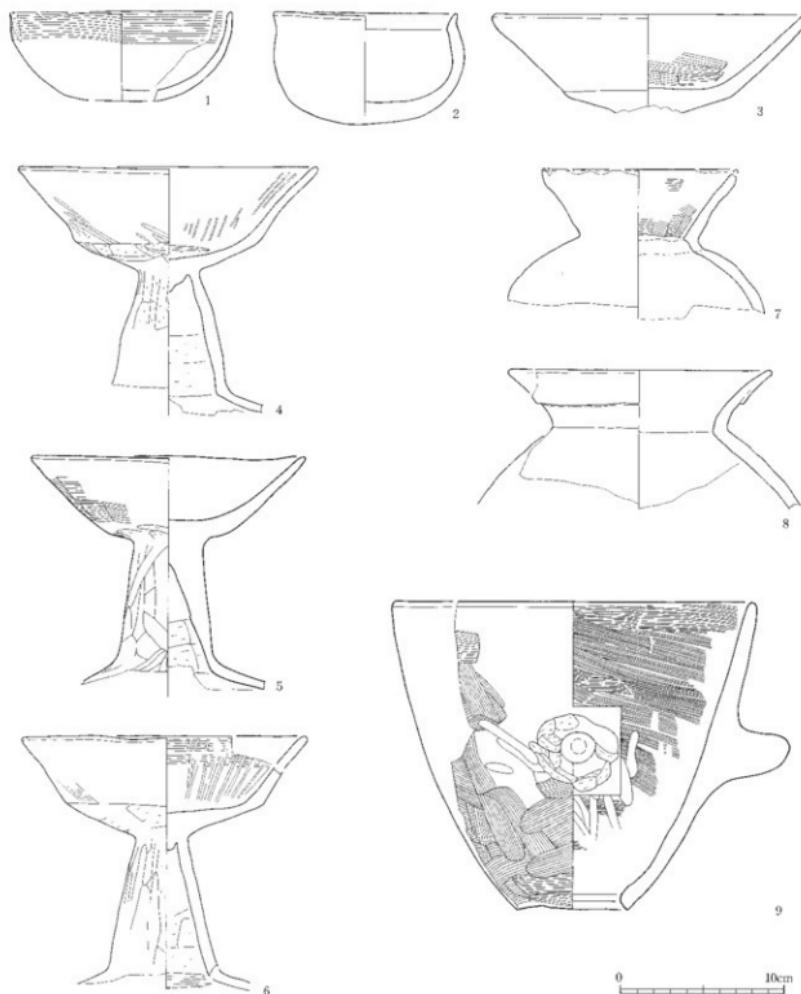
調査区東側に13基、中央部に3基検出した。P6はP14を切っており、P10はP11を切っている。P1の北側とP16の南側は調査区外に延びている。いずれも堆積土は1層である。P2、4、5、8から土師器片が出土した。器種等の詳細が明らかでないが、いずれも形狀からロクロ不使用の土師器である。



第23図 出土遺物 1

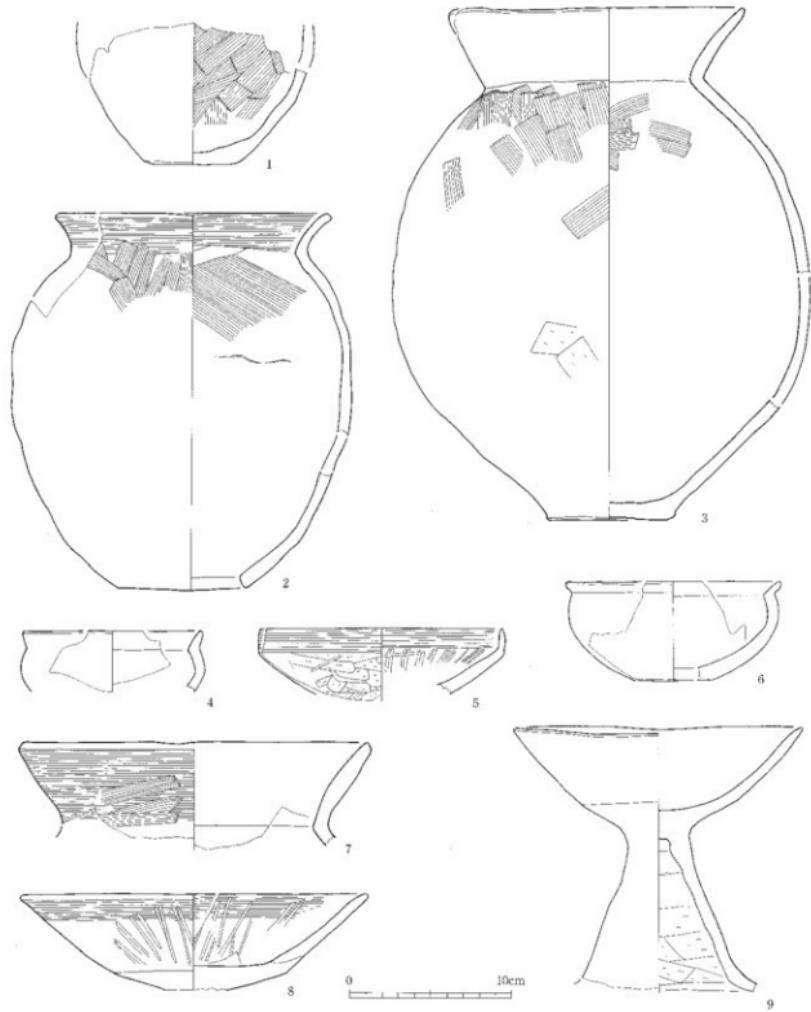
6まとめ

- ① 今回の調査区では、溝跡3条、土坑2基、ピット48基、性格不明遺構1基が検出された。
- ② Aトレントで検出されたピットのうち、P12は、出土遺物から古墳時代前期の遺構と考えられる。他にも、その時期まで遡る遺構がある可能性がある。
- ③ Bトレントで検出されたSD2溝跡は、遺物と遺構の形状から、堀などの抜き取り溝である可能性が考えられる。鎌倉時代の中国産青白磁片が出土しており、中世まで存在した遺構であると見られる。
- ④ Cトレントで検出された性格不明遺構は、検出面が浅く耕作等で削られた部分が多いため、不明な点も多いが、焼土や生活の中で使ったと見られる扁平な磨石が検出されたことから、堅穴住居を伴う生活の場であった可能性がある。出土遺物から時期は古墳時代中期頃と考えられる。また、同じくCトレントで検出された土坑は、遺物から古墳時代前期までさかのばる可能性が考えられる。
- ⑤ Dトレントから複数の土師器片が出土した。いずれもロクロ不使用の土師器である。



図名	登録番号	出土地点	分類	法量(cm)			特徴・備考(測定・重量・材質・表面・本取・実地・時期)	写真 版面	
				基準高	取上高	底径			
1	C-14	CトレンチⅢ層上部	51	赤陶土上切器	环	15.6	13.6	内面:口縁部ココナラ、体部ハケヅリ、内面:口縁部ココナラ、体部ハラナテ	30-1
2	C-16	CトレンチⅢ層上部	52	赤陶土上切器	环	7.0	11.2	外周:口縁部ココナラ、体部ハケヅリ、内面:口縁部ココナラ、体部ハラナテ	30-2
3	C-17	CトレンチⅢ層上部	54	赤陶土上切器	环	6.2	19.1	外周:マツメ、内面:粘土層表面ヨコナラ、体部ハラナテ	30-3
4	C-19	CトレンチⅢ層上部	52	赤陶土上切器	环	15.4	18.2	外周:粘土層表面ヨコナラ、体部ハラナテハクヅリ、内面:粘土層表面ヨコナラ、体部ハラナテ	30-4
5	C-20	CトレンチⅢ層上部	52	赤陶土上切器	环	(14.5)	16.4	内面:口縁部ハラナテ、ハクヅリ、体部ハラナテ 内面:粘土マツメ、粘土ハラナテ	30-5
6	C-21	CトレンチⅢ層上部	53	赤陶土上切器	环	(15.9)	(27.0)	内面:粘土マツメ、ハクヅリ、体部ハラナテ 内面:粘土マツメ、粘土ハラナテ	30-6
7	C-22	CトレンチⅢ層上部	54	赤陶土上切器	環	(9.4)	12.0	外周:マツメ、内面:粘土層表面ハラナテ、体部マツメ	30-7
8	C-31	CトレンチⅢ層上部	2	赤陶土上切器	素	(8.7)	(16.0)	内面:マツメ	30-8
9	C-29	CトレンチⅢ層上部	58	赤陶土上切器	瓶	(9.1)	22.0	0.8 (泥付) 内面:口縁一部ハラナテ 瓶身部分ハラナテ 内面:ハケヌ	30-8

第24図 出土遺物2



出土点		分類		法 長(cm)		特徴・備考(質地・直裏・古村・樹種・木限・産地・時期)		写真 番号				
番号	年号	区	直裏	通説名	遺物番 号	直裏	古村	木限				
1	C-26	レシント	直裏上部		5-6	直口クロコ土器底	丸	(8.8)	4.9	外縁: マメツ 内面: 體部ヘラナダ 直裏: 直壁ヨコナタ、内壁ヘラナダナダ 外縁: 口縁ヨコナタ、底部ヘラナダ 内面: 體部ヘラナダ	21-3	
2	C-26	レシント	直裏上部		5-2	直口クロコ土器底	丸	28.4	16.9	7.8	直縁: 直壁ヨコナタ、内壁ヘラナダナダ 外縁: 口縁ヨコナタ、底部ヘラナダ 内面: 體部ヘラナダ	21-1
3	C-27	レシント	直裏上部		5-9	直口クロコ土器底	丸	31.6	18.1	7.2	直縁: 口縁ヨコナタ、底部ヘラナダ 内面: 體部ヘラナダナダ 外縁: 口縁ヨコナタ、底部ヘラナダ 内面: 體部ヘラナダ	21-2
4	C-13	レシント	直裏上部		3	直口クロコ土器底	丸	(8.8)	(11.0)	參照(パンガラ)あり	21-4	
5	C-12	レシント	直裏上部		3	直口クロコ土器底	丸	(4.1)	(14.9)	直縁: 直壁ヨコナタ、外壁ヘラナダ引継ヘリゼキ 内面: 體部ヨコナタ、外壁ヘラナダ引継ヘリゼキ 内面: 口縁ヨコナタ、底部ヘラナダ 外縁: 口縁ヨコナタ、底部ヘラナダ 内面: 體部ヨコナタ、底部ヘラナダ 外縁: マク	21-5	
6	C-34	レシント	SK-1	2	19-1	直口クロコ土器底	丸	6.2	(13.1)	(14.8)	外縁: 口縁ヨコナタ	21-6
7	C-41	レシント	SK-1	2	19-1	直口クロコ土器底	丸	(6.7)	(21.6)	外縁: ヨコナタ 内面: ヨコナタ、壁厚ナチ後ヘラミガキ 内面: 口縁ヨコナタ後ヘリゼキ 外縁: 口縁ヨコナタ後ヘリゼキ 内面: ヨコナタ後ヘリゼキ 外縁: マク	21-7	
8	C-35	レシント	SK-1	2	19-1	直口クロコ土器底	高脚	(6.0)	21.1	内面: 口縁ヨコナタ後ヘリゼキ 外縁: 口縁ヨコナタ後ヘリゼキ 内面: ヨコナタ後ヘリゼキ 外縁: マク	21-8	
9	C-40	レシント	SK-1	2-3	19-2	直口クロコ土器底	高脚	(26.6)	17.9	内面: 口縁ヨコナタ後ヘリゼキ 外縁: ヨコナタ後ヘリゼキ 内面: ヨコナタ後ヘリゼキ 外縁: マク	21-9	

第25図 出土遺物 3



1 遺構検出状況
(南から)



2 遺構完掘状況
(南から)



3 北壁断面

図版12 A トレンチ遺構検出・完掘状況・断面



1 I層土師器環出土状況
(東から)



2 III層上面土師器瓶出土状況
(南から)



3 P12層土師器甕出土状況
(西から)

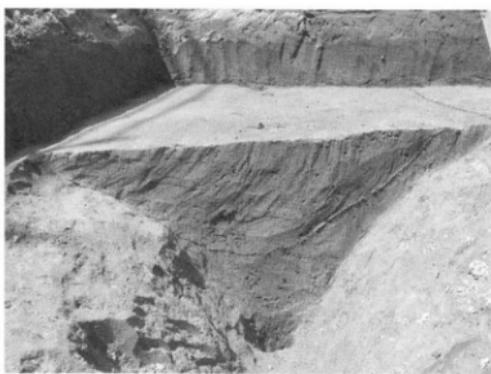
図版13 A トレンチ遺物出土状況



1 遺構検出状況
(南から)



2 調査区完掘状況
(南から)



3 SD 2 溝跡断面
(南から)

図版14 B トレンチ遺構検出・完掘状況・遺構断面



1 構造検出状況
(西から)



2 調査区実測状況
(西から)



3 SK1 土坑検出状況
(南東から)

図版15 C トレンチ調査区全景・土坑



1 検出状況
(西から)



2 遺物出土状況
(西から)



3 断面
(南東から)

図版16 C トレンチSX 1 性格不明遺構



1 SK 1 土坑高坏出土状況
(北東から)



2 SK 1 土坑高坏出土状況
(南から)



3 SK 2 土坑断面
(南西から)

図版17 C トレンチ造構断面・遺物出土状況

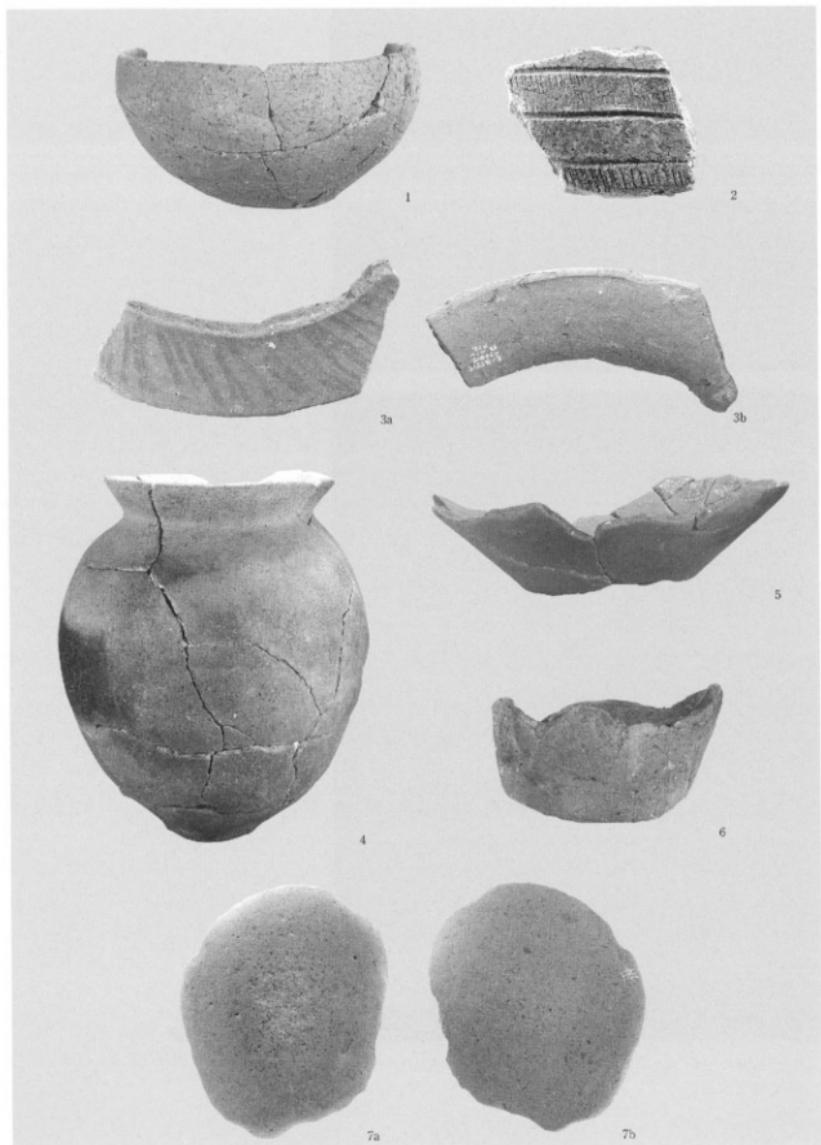


1 遺構検出状況

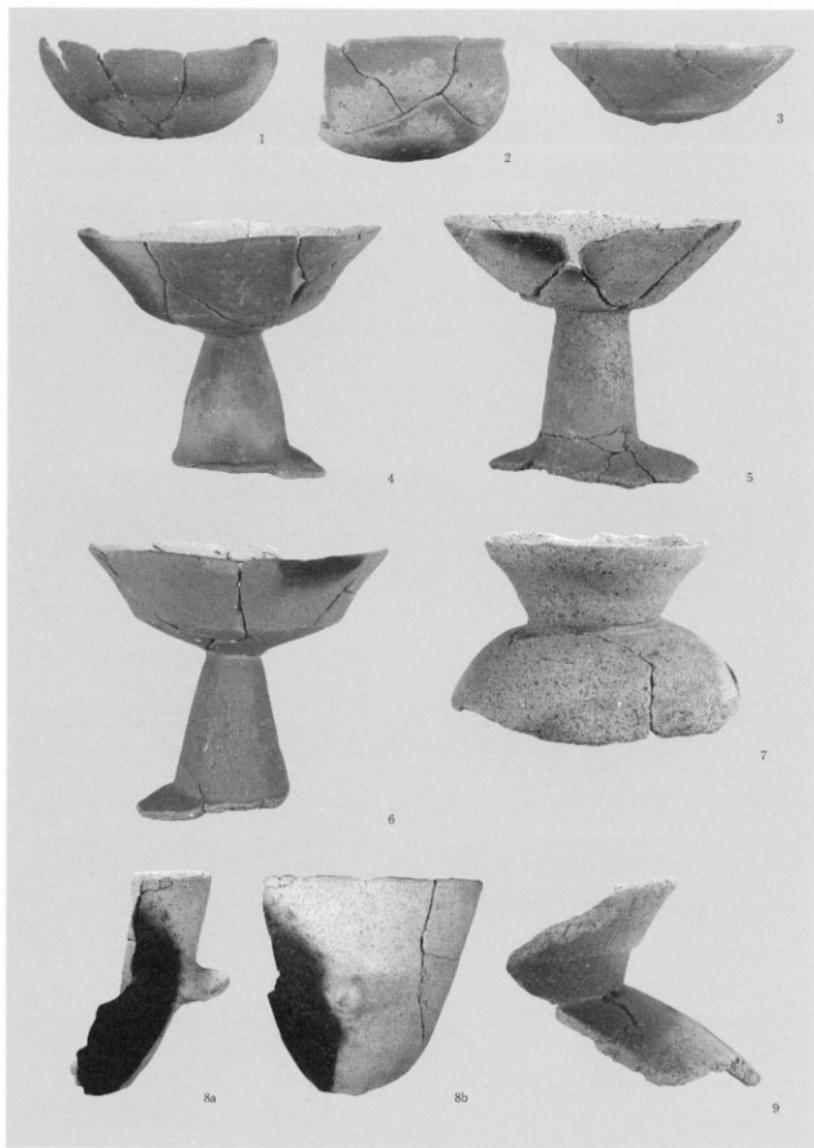


2 遺構完掘状況

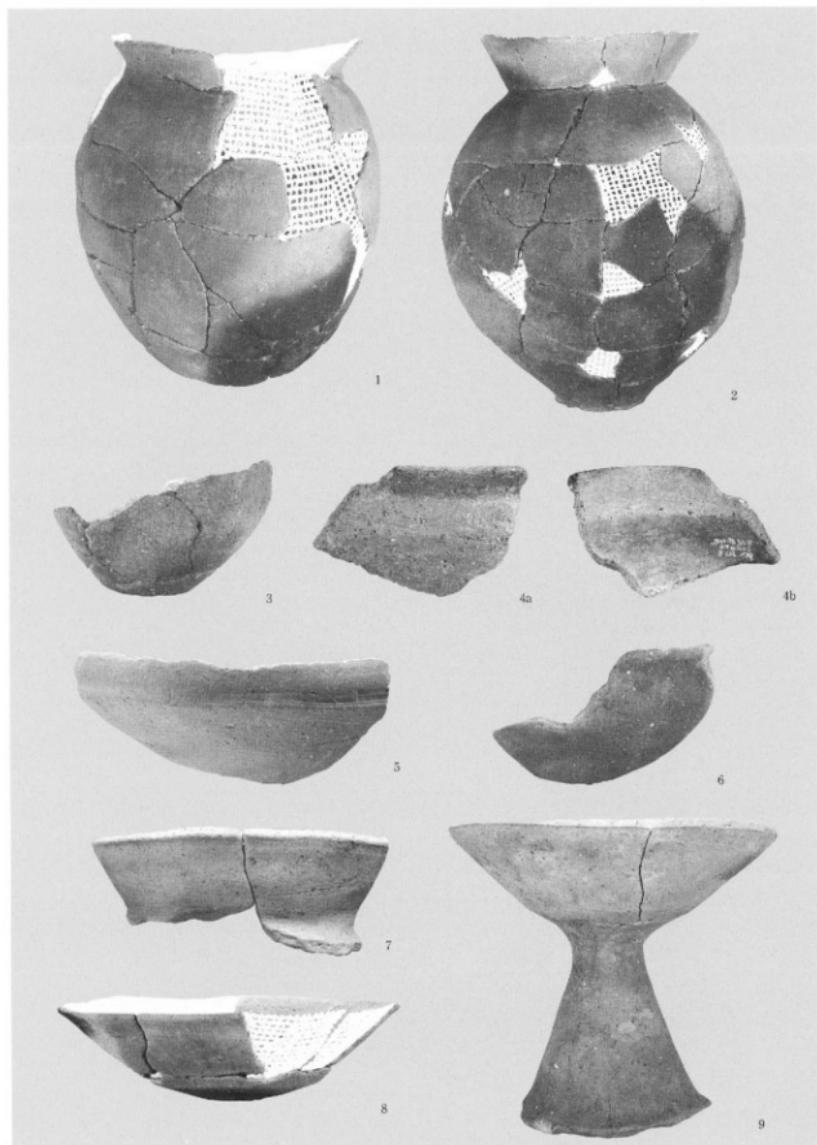
図版18 Dトレンチ遺構検出・完掘状況



圖版19 南小泉遺跡55次出土遺物 1



圖版20 南小泉遺跡55次出土遺物 2



圖版21 南小泉遺跡55次出土遺物 3

V 南小泉遺跡第56次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調査地點	仙台市若林区遠見塚2丁目140・577
調査期間	平成19年5月14日～18日
調査対象面積	73m ²
調査面積	19m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 鈴木 隆 加藤 隆則 文化財教諭 工藤 慶次郎

2 調査に至る経過と調査方法

平成19年4月13日付けで、本間一氏より、杭打ちを行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行い、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。建設予定地に2.7m×7.1mのトレンチを設定して調査を行ったところ、土坑・井戸跡などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

遺跡の位置と環境については、本報告書掲載の南小泉遺跡第52次発掘調査報告書を参照されたい。

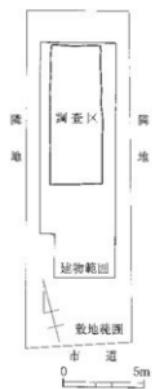
今回の調査地点は、本遺跡の北西部に位置する。今回調査地点の北東50mの地点で行われた第15次調査では、古墳時代中期の住居跡、土坑等が検出され、土師器、須恵器、石製品などが出土している。同じく120m南方地点において行われた第19次調査では中・近世の掘立柱建物跡、土坑、溝跡などが検出された。

4 基本層序

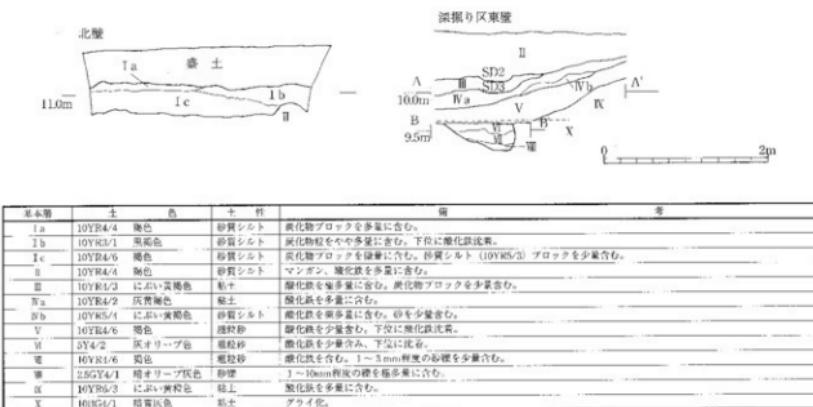
調査地点は40～60cmほどの盛土がある。調査地点の土層は、全体的に酸化鉄を多く含む砂質シルト土が堆積する。基本層はI～X層を付したが、II～X層は、流路跡ないしは堀跡のような窪地に堆積した土層で、北側に向かって傾斜している。なお、調査の結果、窪地底面に東西方向に延びる溝状の落ち込みを検出したため、本報告ではSR1流路跡とした。II層上面は幕末～明治期に廃棄されたSK1土坑を含む土坑3基の確認面で、標高は南側で約11.0m、北側で10.7mである。北側への傾斜はII層に始まり、流路跡の底面には埴層が堆積する。流路跡の堆積層は砂質シルト層であるが、下層のVI～VII層は粗粒砂や細粒砂層となる。流路跡形成以前の基礎層はグライ化の著しい粘土である。

5 発見構造と出土遺物

II層を除去した段階で土坑3基、溝跡2条を検出した。なお調査区北側の下層調査で検出された溝跡（SD1）は、東西方向に延びる流路跡と判断したため欠番とした。



第26図 調査区配置図



第27図 調査区断面図

遺物は、SK 2上坑から幕末～明治期の陶磁器96点に伴って、瓦、木製品（漆器、下駄、木棒、木杭など）などが出土した。

1) 溝跡

SD 2溝跡 調査区北側に位置する。深掘り区のⅢ層上面で検出した。規模は検出長160cm、幅25～30cm、深さ10cmである。堆積土はⅡ層で、出土遺物はなく時期は不明である。

SD 3溝跡 調査区北側に位置する。深掘り区のⅣa層上面で検出した。規模は検出長140cm、幅55cm、深さ10～15cmである。堆積土はⅢ層で、出土遺物はなく時期は不明である。

2) 土坑

SK 1土坑 調査区中央に位置する。平面形は円形で、規模は直径約120cm、深さ45cmである。堆積土は4層でいずれもシルト質粘土である。出土遺物はなく時期は不明である。

SK 2土坑 調査区南側に位置し、西側は調査区域外に及ぶ。検出範囲での平面形は隅丸方形で、規模は南北2.6m、東西は1.5m、確認面からの深さは1.0mである。壁面は全体的に外傾して立ち上がるが、南壁及び東壁の中腹にはテラスが設けられる。このテラス部分で3～4枚の板材をL字形に組んだ木枠を検出した。木枠は、本来、30～40cm間隔で板材の両側に交互に打込まれた継続で固定されていたと考えられるが、東側は内側に向かい倒れた状態であった。堆積土は8層見られる。1層は炭化物・焼土ブロックの集積層である。1、2、3層上部ではまとまった量の陶磁器と少量の瓦、ガラスが出土し、3層下部では下駄や漆器碗などの木製品、板・竹材、大量の木屑などが集積している。木片などの有機物は5層まで含んでおり、6層は基盤層に近い土層（崩落土）が確認される。

SK 2土坑は、出土した陶磁器の年代から、遺物が一括廃棄された幕末～明治期には既に崩落等により半ば埋没していたものと考えられる。

SK 3土坑 調査区北側に位置し、西側は調査区域外におよんでいる。検出範囲での平面形は円形で、規模は南北2.5m、東西1.5m、検出面からの深さは1.3mである。掘り込みは、北半がやや急である。堆積土は5層見られ、1層以外はシルト質粘土である。井戸跡等の可能性が考えられるが、出土遺物はなく時期は不明である。

3) 流路跡

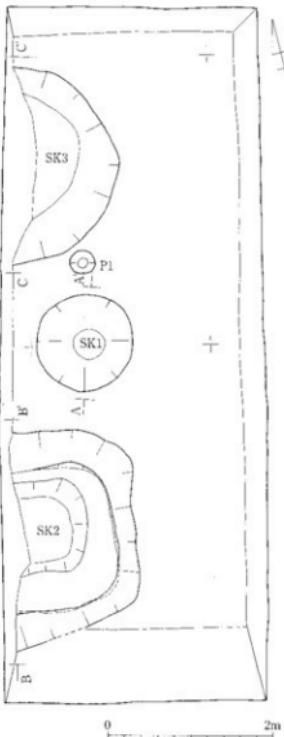
SR1 流路跡 調査区北側で基本層の傾斜を確認した。傾斜はⅢ層以下で見られ、Ⅱ層の堆積によって概ね平坦となる。落ち込みの南限は未確認であるが、上下層の関係から、本来は本調査区中央付近に北側傾斜の始まりがあったものと思われる。緩やかな傾斜は、標高9.6m付近で変換し、ほぼ垂直の落ち込みとなる。この落ち込みは東西方向に延びており、北側の立ち上がりは南側に較べ緩やかである。前述のSD2・3溝跡のようにこの落ち込み部が流路を利用した溝跡である可能性も考えられるが、詳細は不明である。堆積土は、上位が粘土で、落ち込み部はVI～Ⅶ層の粗粒砂や細粒砂層で、同層に磨耗した土師器片を包含している。

遺物は、VI～Ⅸ層から非ロクロ土師器片が約20点出土した。器種は、甕、小型壺、环などで時期は古墳時代から古代のものであろうが、流れ込みの可能性があり流路跡の時期を特定することはできない。しかしながら、SK2土坑との切り合い関係から近世以前と考えられる。

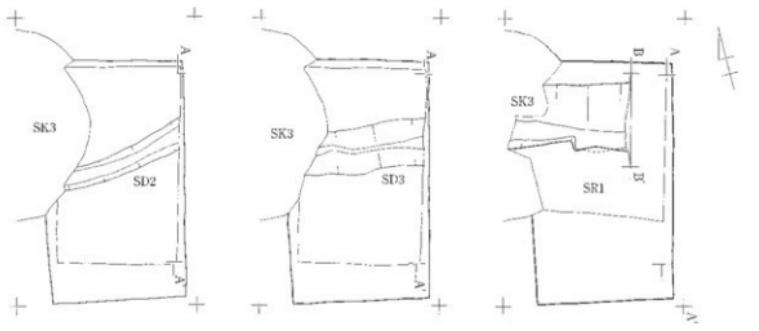
4) 出土遺物

今回の調査では、陶磁器104点の他、漆器椀1点、下駄4点、その他多数の木・竹材が出土した。ここではSK2土坑から出土した96点の陶磁器についてその概略を述べる。

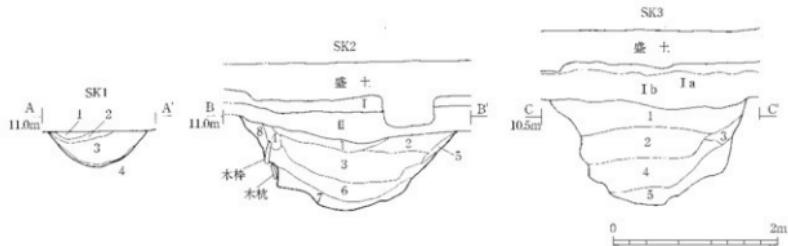
種別の内訳は、陶器39点、磁器56点、瓦質土器1点である。陶器の産地別組成では、大堀相馬が22点と6割弱を占め、堤5点、美濃2点、小野相馬1点、常滑1点と続く。他8点は不明である。陶器の器種組成は、碗9点、皿（油受皿を除く）6点で陶器全体の39%を占める。他には土瓶7点、擂鉢5点、焰灯4点、徳利3



第28図 遺構配図



第29図 溝跡・流路跡平面図



層位	寸	色	土性	備	号
SK1-1	10YR4/3	にじみ黄褐色	シルト質粘土	マンゴンを多量に含む。2層ブロックを微弱に含む。	
2	10YR5/4	にじみ黄褐色	シルト質粘土	マンゴンを微量に含む。炭化物を少量含む。黒褐色(10YR5/1)土ブロックを微量に含む。	
3	10YR4/3	にじみ黄褐色	シルト質粘土	マンゴンを多量に含む。下層に炭化物が多く沈着。1層に鉛鉱。	
4	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む。	
SK3-1	10YR2/1	褐色	シルト質粘土	炭化物・炭化物・2層ブロックを微量に含む。炭化物ブロックを少量含む。	
2	10YR2/4	黒褐色	シルト質粘土	炭化物・マンゴンを多量に含む。炭化物ブロックを微量含む。	
3	10YR4/4	黒褐色	シルト質粘土	上部に陶器片が発掘。下部に木材、竹材、木板の集成が混じり木製品(下段・油漆物など)を含む。	
4	10YR2/2	黒褐色	シルト質粘土	2層ブロックを多量に含む。炭化物を少量含む。	
5	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	下段に鐵鉱石が沈着。	
6	25YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	木片を少量含む。	
7	7.5GY4/1	暗緑灰色	シルト質粘土	炭化物を少量含む。部分的に麻実した木片が集積。	
8	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	炭化物、マンゴンを微量含む。	
SK3-1	10YR4/4	にじみ黄褐色	砂質シルト	炭化物ブロックを多量に含む。	
2	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	炭化物ブロックを微量に含む。砂質シルト(10YR5/3)ブロックを多量含む。	
3	10YR4/2	灰黄褐色	灰黃褐色	炭化物を多量に含む。	
4	10Y4/1	灰褐色	シルト質粘土	炭化物ブロックを微量に含む。	
5	10YR3/1	墨褐色	シルト質粘土	炭化物ブロックを微量に含む。	

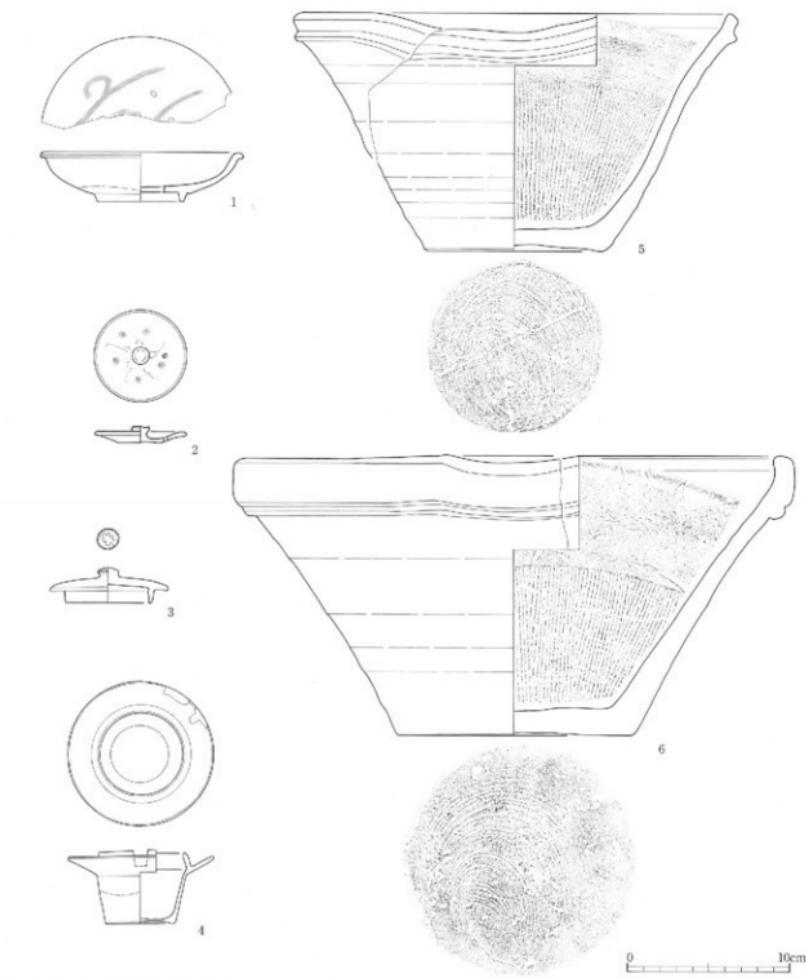
第30図 土坑断面図

点、油受皿2点、壺2点、鉢1点が出土した。特に常滑産の大堀（第32図2）は仙台市内での出土例が少なく注目される。磁器の産地別組成は、肥前29点、瀬戸美濃21点で半数を占め、切込4点、平清水（？）3点と続く。磁器の器種組成は、碗29点、皿13点で磁器全体の75%を占める。他には篠利6点、鉢3点、段重、急須、酒杯、各1点が出土した。磁器は、特に染付に関して明治時代後半に出現する銅版転写によるものが全く見られず、手描きまたは型紙摺りによる絵付けを主体とする点に特徴がある。これらの年代は19世紀代を主体とし、明治期に入った19世紀後半の中で一括廃棄されたと考えられる。また、これらの資料に気泡を多く含むガラス瓶が共伴する点は、今後その廃棄年代についてより詳細に検討していく上で重要である。

6まとめ

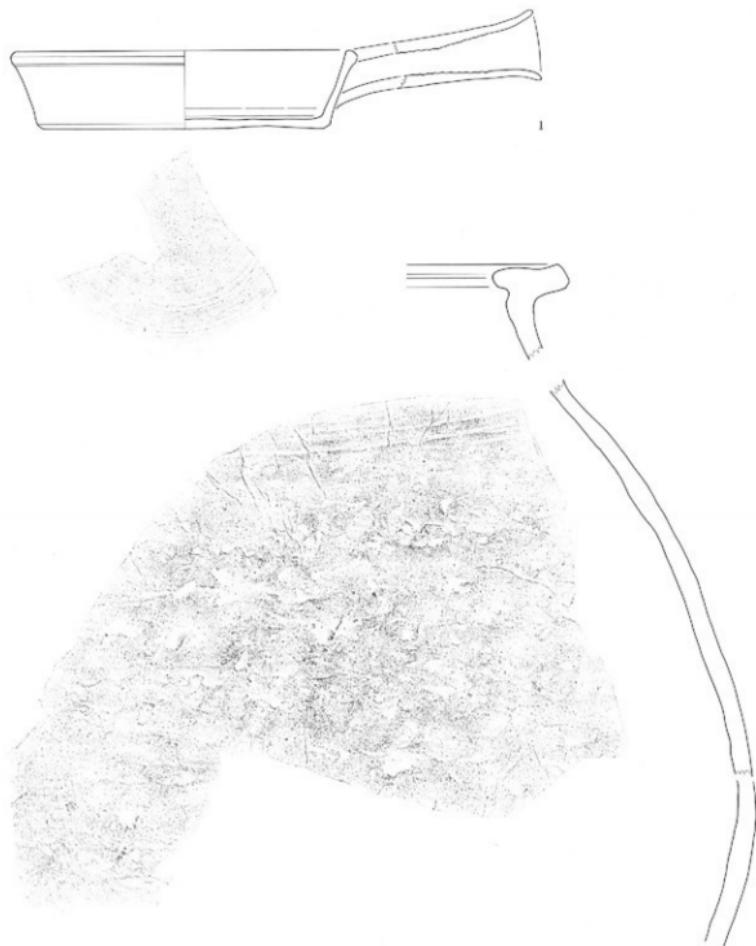
今回の調査では溝跡2条、土坑3基の他、時期不明であるが東西方向に延びる流路跡を確認した。土坑3基の内、特にSK2土坑の性格については、深さが1mと浅く、板材も東側と南側にのみ見られることから井戸等の可能性は低いと考えられる。部分的な検出であるため、その評価については今後の課題としたい。

SK2土坑の廃絶後に一括廃棄された陶器、木製品、ガラス等は、幕末から明治期における遺物の変遷、引いては時代の変化に伴う生活の変化を検討する上で良好な資料である。特に染付については、銅版転写による絵付けが盛行する前段階として、輸入コバルトを用いながら、型紙摺りを含む手描きによる絵付けを主体とする段階が存在した可能性が推測される。今後周辺の調査事例の蓄積を待って検証していく必要がある。



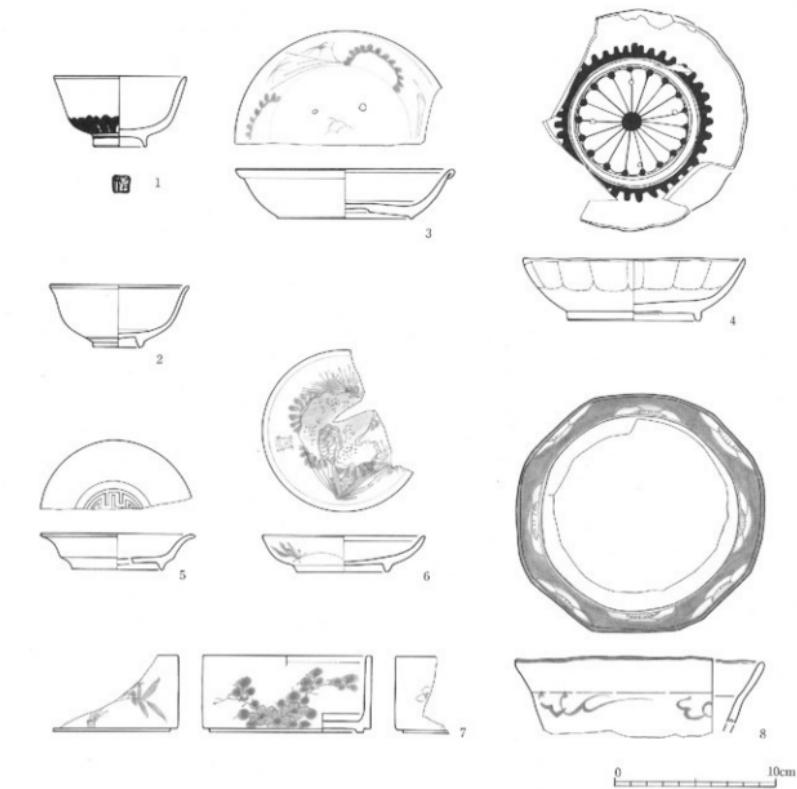
件名 番号	出土地点 番号	分類		法 基 (cm)			特征、備考 (変種、鉢条、文様等、時期)	参考 文献
		遺物	部位	形種	直径	口径		
1-1 SK2	1	陶器	腹	罐	31	12.2	5.3	大崩頭馬、灰動脈反田、見沿縫織文様 19c後
2-1 SK2	1	陶器	蓋	蓋	10	5.7		大崩頭馬、舟底、十點繩、19c前～中
3-8 SK2	3	陶器	蓋	蓋	22	5.4		大崩頭馬、麻核繩 19c前
4-1 SK2	1	陶器	内底部	盆	47	8.1	4.4	大崩頭馬、船形足火口 19c前
5-5 SK2	1	陶器	體	罐	14.8	26.7	10.8	標準不明、鐵輪、灰帶阿帆半瓦、近世
6-6 SK2	1	陶器	體	罐	17.5	33.3	14.4	能、虎形目紋系 19c前
1-4 SK2	1	陶器	十瓶					大崩頭馬、色底、土鳳 19c前～中
1-9 SK2	3	陶器	腹					大崩頭馬、灰動脈紋 19c前
1-10 SK2	3	陶器	底				底底、斜底組	17c

第31図 出土遺物 1



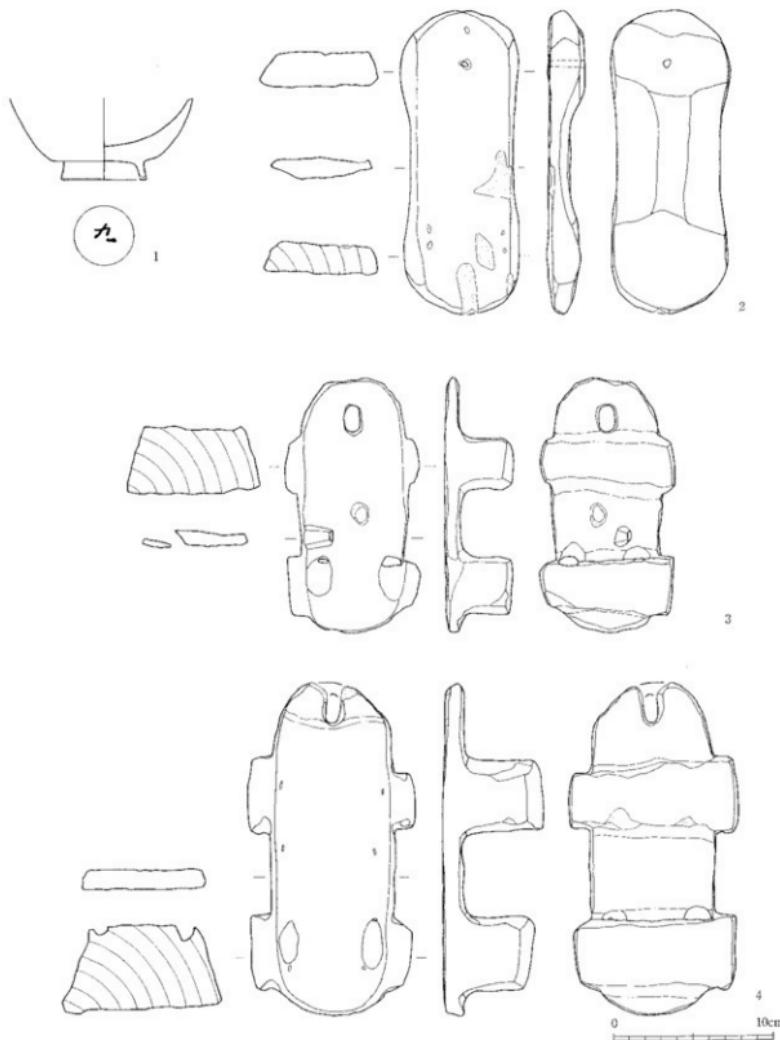
出土地点		分類	直 径(cm)	容 量	参考 (地點・経年・文様等・時期)	写真 回版		
番号	記号	遺物名	種別	高さ	口径	底径		
1	1-2	SK2	3	海部	4.9	20.6	17.2	瓶 底径 19.0 身管 25.2
2	1-11	SK2	1	海部	奥			

第32図 出土遺物 2



部位 番号	型類	出土場所	分類				法 量(cm)	特徴・備考(遺物・施墨・文様等・寸幅)	写真 No.
			横径	縦径	器高	LJ径			
1 J-3	SK2	1	縦器	成	4.4	8.2	3.2	漆戸美濃 施竹 縦反曲 漆器に刷の墨作 口硝 19c中～後	27-3
2 J-4	SK2	1	縦器	成	3.9	(8.7)	(3.2)	漆戸美濃 施竹 縦反曲 口硝 19c後～後	27-4
3 J-2	SK2	1	縦器	且	3.1	(13.6)	(6.3)	見込 施竹 玉理文 葉文 見込人目透2つ 級ノ目引西台 19c前	28-4
4 J-19	SK2	3	縦器	且	3.9	(13.9)	8.3	肥前 施竹 斜花文 是人火目透2つ 級ノ目引西台 19c後～19c前	28-5
5 J-1	SK2	1	縦器	且	2.3	9.6	5.7	漆戸美濃 口硝 塗反曲反目 施人火透文字 19c前～中	28-7
6 J-18	SK2	3	縦器	且	2.2	10.0	5.7	肥前 施竹 草花文小鉢 19c後	28-6
7 J-20	SK2	3	縦器	段成	4.8	10.4	9.5	漆戸美濃 施竹 施墨 緒 繻 竹文 19c中	29-11
8 J-5	SK2	1	縦器	井	(5.0)	15.3		漆戸美濃 施竹 在文彌足井 19c中～後	28-15
J-6	SK2	1	縦器	井				漆戸美濃 施竹 在文彌足井 19c中～後	27-5
J-7	SK2	1	縦器	井				切込 施竹 縦反曲 19c前	27-7
J-8	SK2	1	縦器	井				切込 施竹 縦反曲 施氏番文 19c後	27-6
J-9	SK2	1	縦器	井				漆戸美濃 施竹 縦反曲 施氏番文 口硝 19c中	28-1
J-10	SK2	1	縦器	井				漆戸美濃 施竹 縦反曲 19c中	28-2
J-11	SK2	1	縦器	井				高麗小窓 施竹 入物文 滾物 19c中	28-3
J-12	SK2	1	縦器	井				肥前小窓 施竹 横折し角小窓 19c後～中	28-8
J-13	SK2	1	縦器	井				漆戸美濃 施竹 19c中	28-10
J-14	SK2	1	縦器	井				肥前 施竹 中置 19c後～19c初	28-9
J-15	SK2	1	縦器	井				漆戸美濃小窓 施竹 縦反曲 单花文 19c後	28-13
J-16	SK2	1	縦器	急傾				高麗小窓 施竹 草花文 19c後	28-12
J-17	SK2	1	縦器	急傾				平底小窓 19c後	28-14

第33図 出土遺物 3



第34図 出土遺物

件名 番号	出土地點 遺構名	分類	形態	規 格 (cm)	特徴・備考 (調査・素材・質地・木取・底地・時期)		写真 図版	
					直径・高 さ	口径・脚 厚		
1 L-1 SK2	3	木製品	脚付	(5.0)	52	穴外延溝、両台内面「丸」赤漆あり	29-1	
2 L-2 SK2	3	木製品	下脚	19.0	7.3	23	單脚、前後各土脚所に木釘留め痕、白漆拂り有り、板目	29-2
3 L-3 SK2	3	木製品	下脚	15.9	8.3	45	兎形、飛目、台脚外羽型、底板は合板より垂直にあり、底格穴は楕円形	29-3
4 L-4 SK2	3	木製品	下脚	20.8	(0.3)	63	14は裏面、飛目、台脚は小羽型、合板に木釘留め痕あり	29-4



1 遺構検出状況
(南から)



2 遺構完掘状況
(南から)

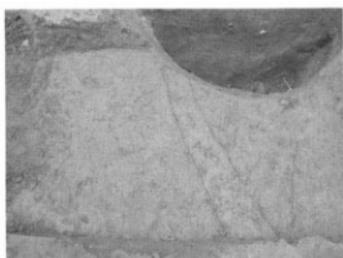


3 遺構完掘状況
(南から)

図版22 調査区全景



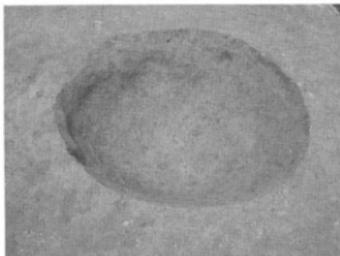
1 北壁土層断面



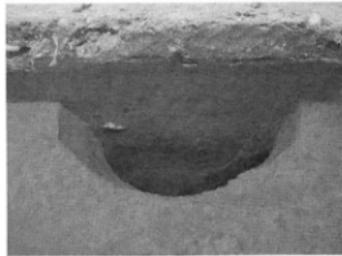
2 SD 2 溝跡（東から）



3 SD 3 溝跡（東から）



4 SK 1 土坑（東から）

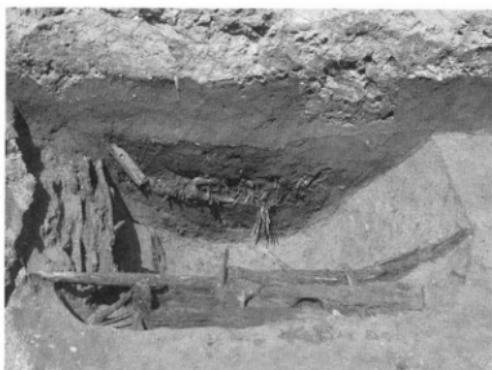


5 SK 3 土坑（東から）

図版23 基本層序・遺構



1 木材出土状況
(北から)



2 木材出土状況
(東から)



3 完掘状況
(東から)

図版24 SK 2 土坑



1 SR 1 流路跡断面
(西から)

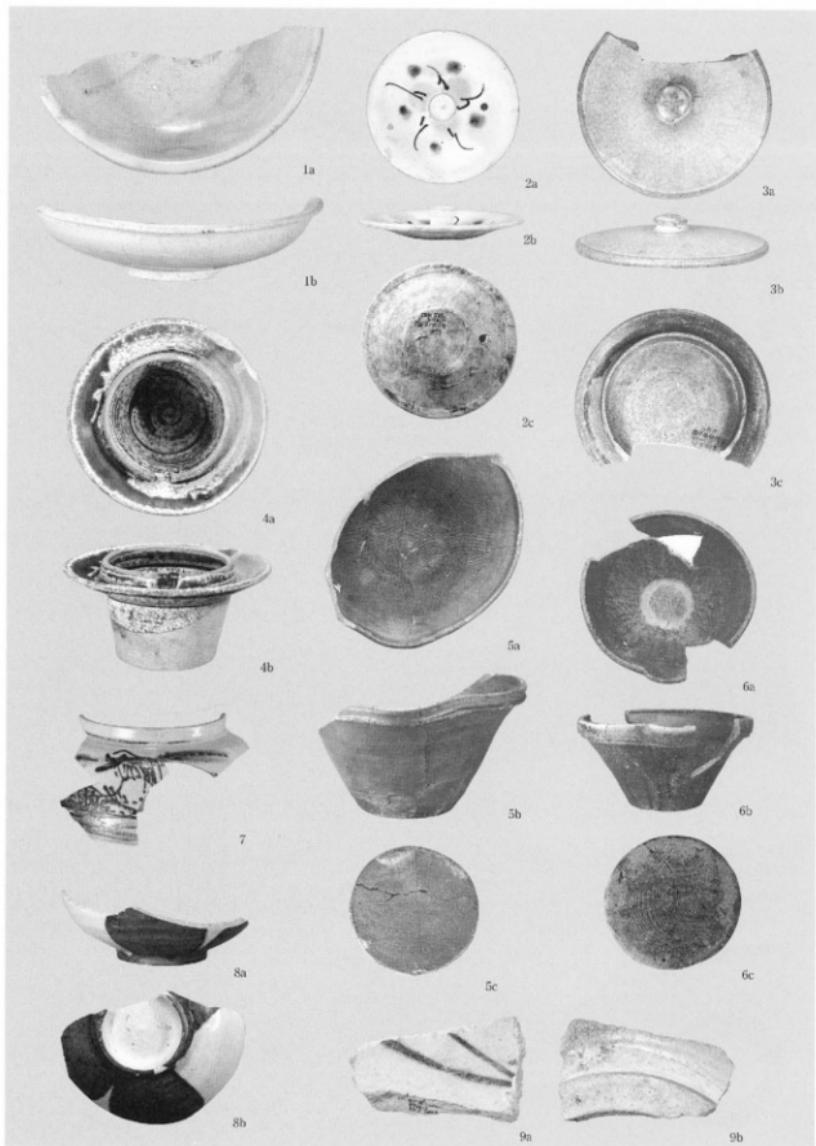


2 SR 1 流路跡
(西から)



3 SR 1 流路跡
(北西から)

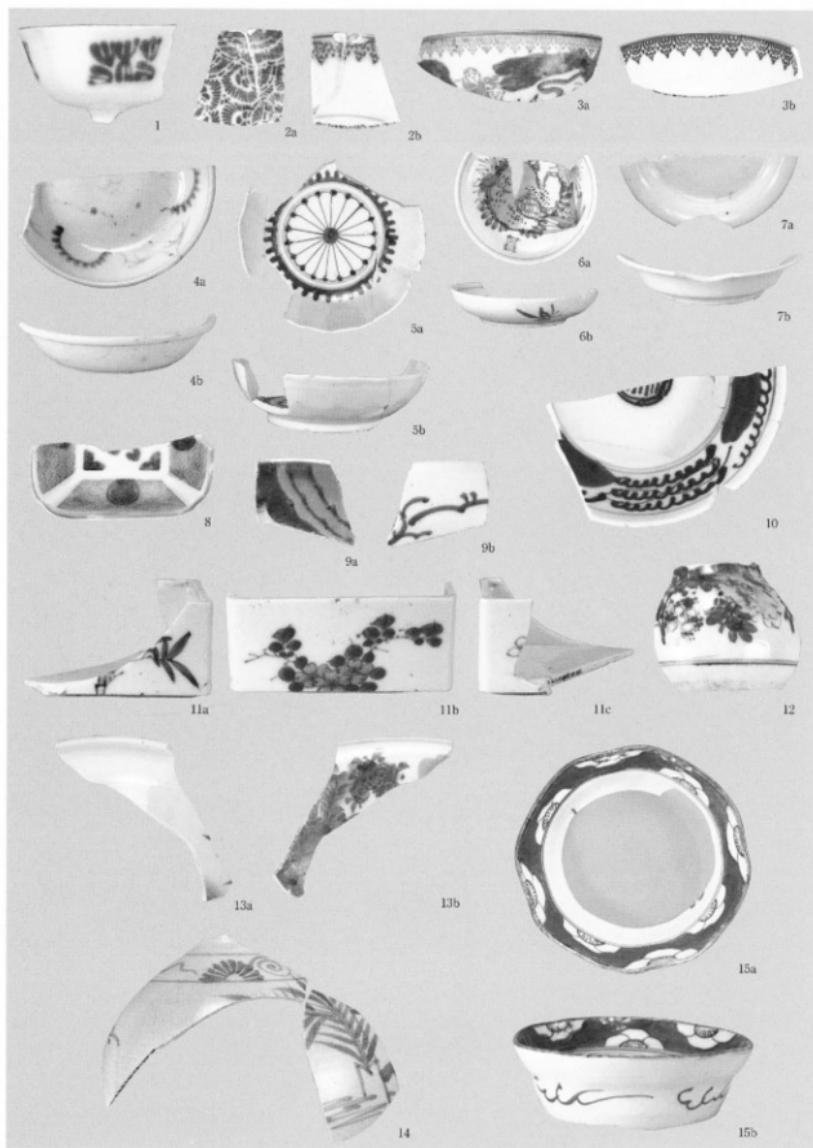
図版25 SR 1 流路跡



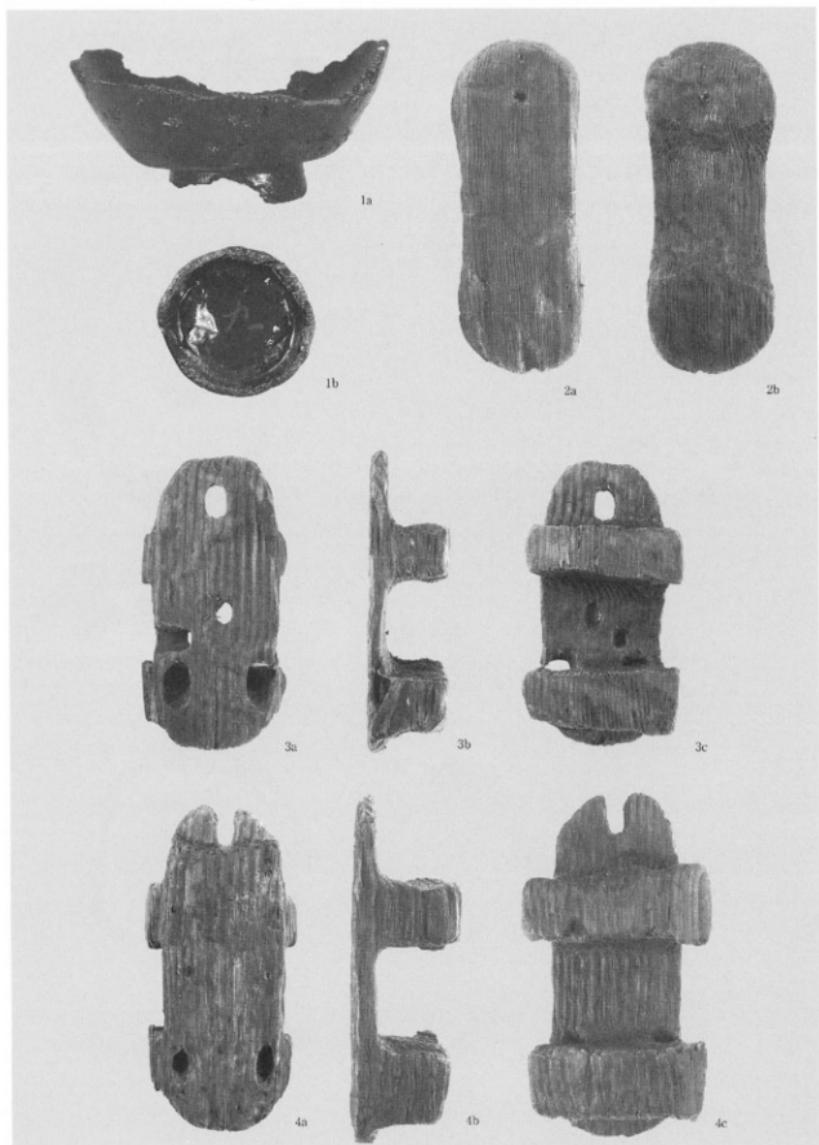
圖版26 南小泉遺跡56次出土遺物 1



圖版27 南小泉遺跡56次出土遺物 2



圖版28 南小泉遺跡56次出土遺物 3



图版29 南小泉遗址56次出土遗物 4

VI 南小泉遺跡第57次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡番号01021）
調査地點	仙台市若林区・本杉町22-7、8
調査期間	平成19年10月15日～10月18日
調査対象面積	106.55m ²
調査面積	40m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 鈴木 隆 文化財教諭 志賀 雄一 臨時職員 森田 賢司

2 調査に至る経過と調査方法

平成19年8月10日付で、佐藤セツ氏より深さ35～4mの杭打ちを伴う鉄骨造2階建個人住宅建設に伴う発掘届が提出されたため、まず確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成19年10月15日より着手し、建物建設予定地に東西7m×南北3mの調査区を設定して調査を行った。その結果、溝跡、柱穴などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

南小泉遺跡の位置と環境については、本書の「I 南小泉遺跡第52次発掘調査報告書」を参照されたい。当地点は南小泉遺跡の北西端にあたり、第54次調査地点に北接する。

4 基本層序

調査地点では50～70cmの盛土が確認された。基本層序はⅠ～Ⅳ層が確認され、Ⅰ層は粘土質シルト、Ⅱ層以下が粘土層であり、Ⅱ層が遺構確認面である。

5 発見遺構と出土遺物

Ⅱ層上面で、溝跡2条、ピット12基、性格不明遺構1基が検出された。

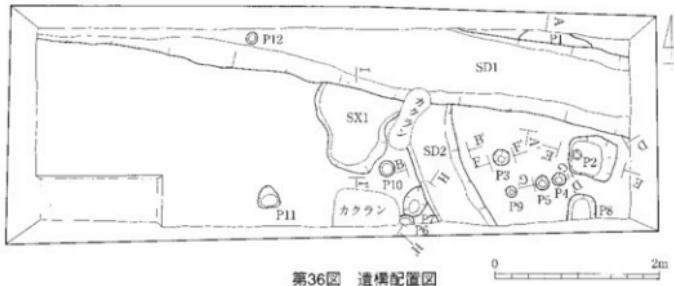
1) 溝跡

SD1溝跡 調査区北側で、北西から東方向に横断する溝跡である。検出面での幅は約1m、深さ30～50cm、底面幅約60cmで、断面形は扁平なU字形、底面は平坦である。堆積土は1層で暗褐色のシルト質粘土層である。堆積土中より、長胴形の土師器片を含む土師器片が10点出土した。

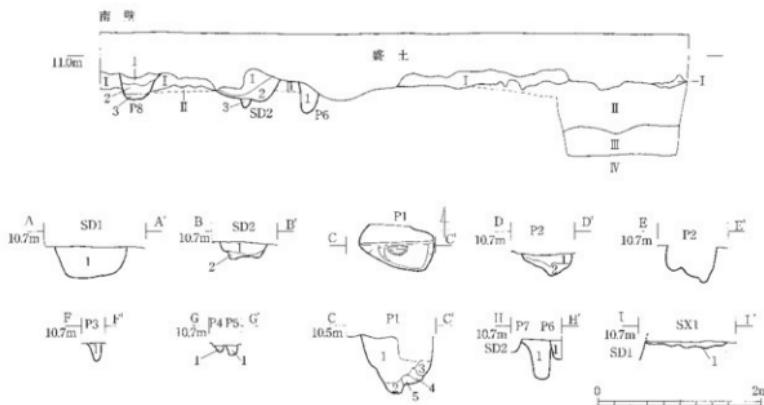
SD2溝跡 調査区東部で検出され、北西から南



第35図 調査区配図



第36図 遺構配置図



基層型	土	土 性	標	考
I	10YR8/4	暗褐色	粘土質シルト	鐵化鉄。マンガン鉱を多量に含む。軸子。(10YR6/1) ブロックを軸多量に含む。
II	10YR4/4	褐色	粘土	シルト。(10YR4/4) を少量含む。鐵化鉄。マンガン鉱。軸子。(10YR6/1) ブロックを多量に含む。
III	10YR4/2	褐色	粘土	マンガン鉱。軸子。(10YR6/1) ブロックを多量に含む。鐵化鉄。鐵化物鉱を少量含む。
IV	10YR2/3	黒褐色	粘土	鐵化物鉱を多量に含む。
層 厚	土	土 性	標	考
S09-1	10YR8/4	暗褐色	シート質粘土。軸子。(10YR6/1)	ブロックを多量に含む。
SD2-1	10YR2/3	褐褐色	粘土。(10YR6/1)	ブロックを多量に含む。粘土質シルト。(10YR5-6) をまだら状に多量に含む。
2	10YR2/6	褐褐色	シート質粘土	粘土質シルトを多量に含む。
3	10YR2/4	暗褐色	シート質粘土	シート質粘土。(10YR2/6) ブロックを多量に含む。
P1-1	10YR3/4	暗褐色	粘土	マンガニ鉱を多量に含む。
2	25Y/3	灰い黄褐色	粘土	柱状節理。鐵化鉄を多量に含む。神に輪郭に向って帶状に沈殿する。
3	10YR3/3	暗褐色	粘土	塊り方塊土。マンガニ鉱を多量に含む。直角ブロックを多量含む。
4	10YR4/3	灰い黄褐色	粘土	塊り方塊土。鐵化鉄を少量含む。P1-1層ブロックを微細に含む。
5	10YR4/4	褐色	粘土	塊り方塊土。P1-1層ブロックを微細を少量含む。
P2-1	10YR2/3	黒褐色	粘土	粘土質シルト。(10YR4/4) をまだら状に少量含む。
2	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	軸子。(10YR2/3) をまだら状に少量含む。
P3-1	10YR5/1	灰褐色	シート質粘土	粘土質シルト。(10YR4/4) をまだら状に少量に含む。
P4-1	10YR2/3	暗褐色	粘土	粘土質シルト。(10YR5/1) をまだら状に多量に含む。
P5-1	10YR2/3	暗褐色	粘土	粘土質シルト。(10YR4/4) をまだら状に少量含む。
P6-1	10YR6/1	灰褐色	鐵化物鉱を多量に含む。民衆用瓦を少量含む。	
P7-1	10YR6/1	暗灰色	シート質粘土	軸子。(10YR4/4) をまだら状に多量に含む。
P8-1	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	直角ブロックを多量に含む。マンガニ鉱を多量に含む。
2	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	直角ブロックをやや多量に含む。マンガニ鉱を多量に含む。
3	10YR5/1	褐色	粘土質シルト	直角ブロックを多量に含む。マンガニ鉱を多量に含む。
SX1-1	10YR2/3	黒褐色	粘土	軸子。(10YR5/1) ブロックを多量に含む。粘土質シルト。(10YR5/6) をまだら状に多量に含む。

第37図 調査区・遺構平・断面図

東方向へ延びる溝跡である。北側はSD 1溝跡に切られている。検出面での幅は約60cm、深さ10~20cm、底面幅40~45cmで、断面形は逆台形に近いが、底面には凹凸が目立つ。堆積土は黒褐色粘土層と黄褐色シルト質粘土層の2層が確認された。出土遺物は土師器片が1点である。

2) ピット

調査区全体で12基のピットが検出された。P 1、2は柱痕跡が確認されており、他と比較して規模も大きい。いずれもⅡ層上面で検出された。

P 1 調査区北東隅で検出され、柱痕跡が確認される柱穴である。南半分はSD 1溝跡に切られており、北部は調査区北壁に接する。平面形状は隅丸長方形を基調とし、掘り方は検出面で長軸（東西）90cm、短軸（南北）50cmである。深さは約70cm、底面幅は東西50cmである。また、底面近くまで柱抜取穴が確認されることから、柱全体が抜き取られたと考えられる。底面中央には柱痕跡が確認され、直径約25cmの円形である。堆積土については、3~5層の粘土層が掘り方理士として確認され、柱抜き取り後の堆積土として粘土層の1、2層が確認された。

P 2 調査区東部、SD 1溝跡の南側で検出された、柱痕跡が確認される柱穴である。平面形状は隅丸方形で、掘り方は検出面で一辺約50cmである。深さは約50cm、底面幅は一辺約40cmであり、底面は凹凸が激しい。また柱痕跡は直径約10cmで、掘り方西部で確認された。検出面では柱痕跡が確認されず、柱は抜き取り、又は切り取られた可能性が考えられる。

上記以外のピットでは、P 8がⅠ層から掘り込まれているほか、P12がSD 1溝跡の底面で確認された。それ以外のピットはすべてⅡ層上面から掘り込まれている。平面形は直径10~30cmの円形または梢円形で、深さは2~50cmである。P 3から土師器片が2点出土した。

3) 性格不明遺構

SX 1 性格不明遺構 Ⅱ層上面で検出され、不整形を呈する。北部はSD 1溝跡に切られており、残存部最大長は東西、南北とも各1mである。深さは5~8cmと浅い。

6 まとめ

- ① Ⅰ層上面からピット1基、Ⅱ層上面で溝跡2条、ピット11基（SD 1溝跡底面の1基を含む）、性格不明遺構1基が検出された。
- ② SD 1溝跡については、堆積土より7世紀後葉から8世紀前葉の遺物が出土したが、時期比定の根拠としては不十分であり、遺構の時期は不明である。
- ③ Ⅱ層上面検出のSD 2溝跡、P 1、SX 1性格不明遺構はSD 1溝跡よりも古い遺構であることが確認されるが、出土遺物は小片であり、詳細な時期は不明である。



1 造構検出状況
(東から)

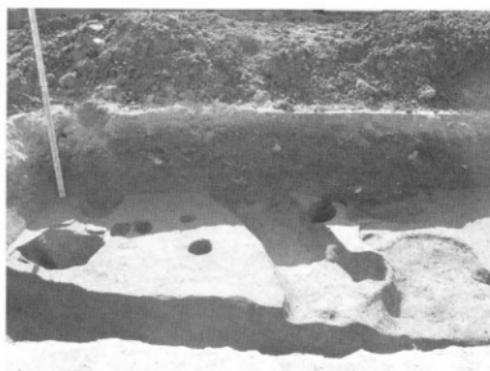


2 造構完掘状況
(東から)



3 基本層序
(南壁西端)

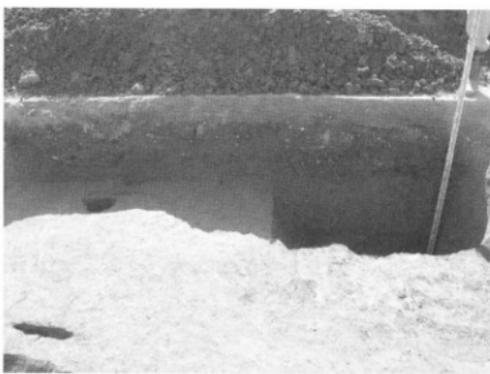
図版30 調査区全景・基本層序



1 南壁断面
(東部)



2 西壁断面
(中央)

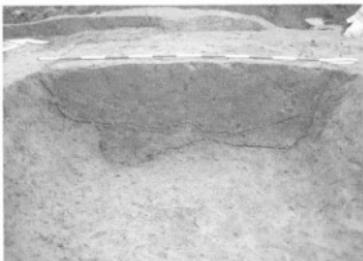


3 南壁断面
(西部)

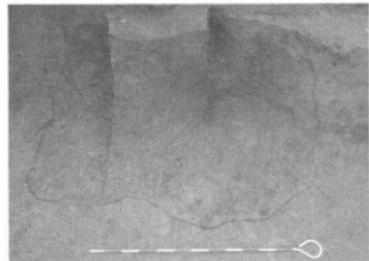
図版31 基本層序



1 SD 1溝跡断面 (東から)



2 SD 2溝跡断面 (南から)



3 P 1検出状況 (南から)



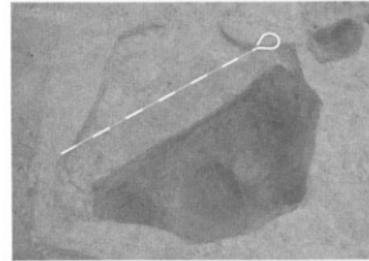
4 P 1柱痕検出状況 (南から)



5 P 1柱痕半裁状況 (南から)



6 P 1完掘状況 (東から)



7 P 2柱痕検出状況 (北東から)



8 P 2・4・5断面 (北西から)

図版32 溝跡・柱穴

VII 今泉遺跡第5次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	今泉遺跡（宮城県遺跡番号01235）
調査地點	仙台市若林区今泉二丁目82番4、82番8
調査期間	平成19年2月13日
調査対象面積	77m ²
調査面積	21m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤 哲司 文化財教諭 早川 潤・藤田 雄介

2 調査に至る経過と調査方法

平成19年2月1日付で、地権者松岡達也氏より、柱状改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。建設予定地に東西4m×南北8mのトレンチを設定して調査を行ったところ、溝跡を検出したため、引き続き本調査を実施した。表土および旧耕作土が80cm前後確認された時点で、排土場を確保するために東西幅を3mに縮小した。溝跡については、調査区西側を約1m幅で掘り下げて、規格、土層観察を実施した。溝跡からの出土遺物は少なく、また地盤の軟弱化を避けるため、検出部の全握は行わなかった。

3 遺跡の位置と環境

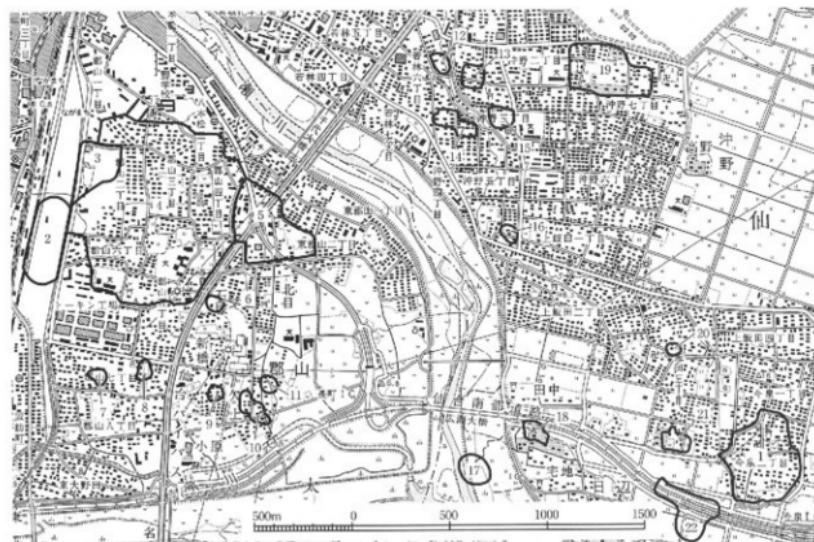
本遺跡は、J.R仙台駅の南東約6.5km、仙台南部道路今泉インターの北西約500mに位置する。標高2~3mの自然堤防に立地している。本遺跡周辺には、西部に高田A遺跡、南西部に高田B遺跡、北西部に上屋敷遺跡などが所在している。本遺跡は文献などにより、須田玄蕃が居住した中世の城館として古くから知られていたが、昭和54年、同56年、平成5年、同6年の調査で、縄文時代後期から近世にかけての広い時代幅をもつことが明らかにされた。

なかでも、中世の城館である今泉城跡に関する遺構群を中心とする。城館の構造は不明確であるが、南辺の外堀の一部が発見されている。その内部には掘立柱建物跡や井戸、溝跡などの遺構が数多く見つかっており、12世紀代に屋敷が成立し、南北朝時代に城館として改変、整備され、17世紀前半ごろまで使われていたものと推定されている。12~17世紀の出土遺物は多彩で、常滑窯や瀬戸窯の陶器、中国産の青磁や白磁、漆器、木簡、箸、曲物容器、下駄、大足、草履、茶臼、砥石、銅鏡、中国錢、鎌、鐵鏃などがあり、ここに居住した武士の生活の様子を垣間見ることができる。

他の時代に関してみると、昭和56年の調査で縄文時代後期の土器が出土し、海岸線に近い低地においても、この時期の遺跡が存在する可能性を示した点で注目される。弥生時代中期に墓域が形成されており、土器棺墓5基が見されている。調査区内からは、弥生土器とともに、石包丁や大型蛤刀石斧などの弥生時代を特徴づける石器も出土しており、周間に居住域、生産域の存在が推定される。また、古墳時代前期と中期の土坑、平安時代の堅穴住跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、近世の溝跡などの遺構も見つかっている。

今回の調査地点は本遺跡のはば中央部に位置し、外堀推定ラインの内側にある。西側約50mの地点で、昭和54年

度に宅地造成に伴う第1次調査が実施され、弥生時代から近世にまたがる時期で、掘立柱建物跡、堅穴造構、井戸跡、土坑、溝跡、柱穴を含むピット約1200個が検出された。遺物は土師器片、近世陶磁器片、木製品などが出土している。また、当該地から南西約30mの地点では、昭和56年度に宅地造成に伴う第2次調査が実施され、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土坑、橋跡、柱穴を含むピット800基の遺構が検出された。遺物は、土師器、須恵器のほか、陶磁器、瓦、木簡5点を含む木製品などが数多く出土している。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	今里遺跡	自然地帯、城郭跡、生活跡	自然地帯	縄文～平安	12	御門下遺跡	散布地	自然地帯	古墳～平安
2	長司式城遺跡	山岳跡	自然地帯	石室、古墳未、曲良物	13	御前遺跡	遺物地、包含地	自然地帯	奈良、平安
3	西台船跡	包含地、更津原	自然地帯	圓玄、御手巾、山垣	14	御門上遺跡	散布地	自然地帯	古墳～平安
4	豊山遺跡	包含地、奈良原、豊山原	自然地帯	稻文、後、近世、吉備川、豊長原	15	中村西遺跡	包含地	自然地帯	弥生～平成
5	北日坂跡	城郭跡、生活跡、第三段	自然地帯	御文後、御牛～丘陵	16	河原地遺跡	散布地	自然地帯	古墳～平安
6	矢沢遺跡	自然地帯	自然地帯	古墳～平安	17	日引遺跡	散布地	河原敷	古墳
7	的場遺跡	自然地帯	自然地帯	奈良、平安	18	日方遺跡	城跡	自然地帯	中世
8	猪ノ頭遺跡	自然地帯	山崩～平安		19	舟行遺跡	城跡	自然地帯	中世
9	久ノ上工遺跡	水田跡	幾ヶ原地	古墳～中世	20	上野遺跡	散布地	自然地帯	三船～平安
10	久ノ上工遺跡	自然地帯	古墳～中世		21	高田八幡跡	散布地	自然地帯	奈良、平安
11	久ノ上目遺跡	散布地	自然地帯	古墳～平安	22	高田耕造跡	散跡、走跡、水田、河原	遺跡、田畠	縄文～古墳、平安～近世

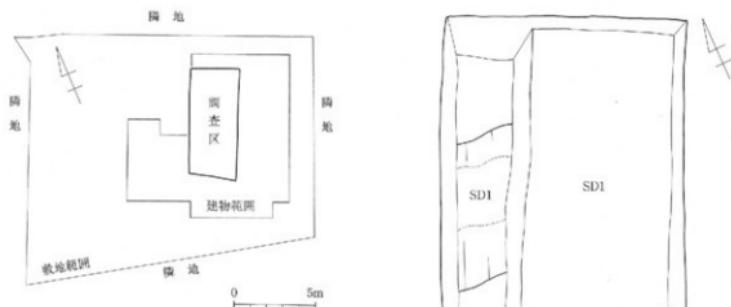
第38図 遺跡の位置と周辺の遺跡

4 基本層序

調査地点の盛土は山砂で、約10~20cmの厚さがある。土色、土性により、基本層は大別2層、細別3層に分けた。I層は、表土および旧耕作土のIa層と旧耕作土のIb層に分けた。層厚はIa層が28~50cm、Ib層は30~50cm、II層が140cm以上である。SD1溝跡の5層以下はオリーブ灰色に変化する。



第39図 調査地点の位置



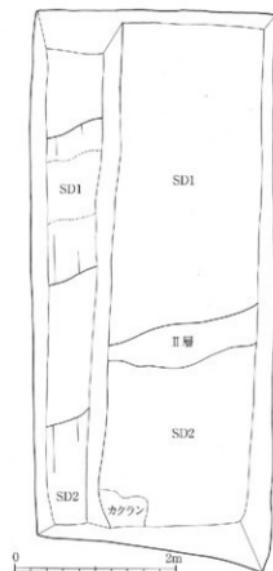
第40図 調査区配置図

5 発見遺構と出土遺物

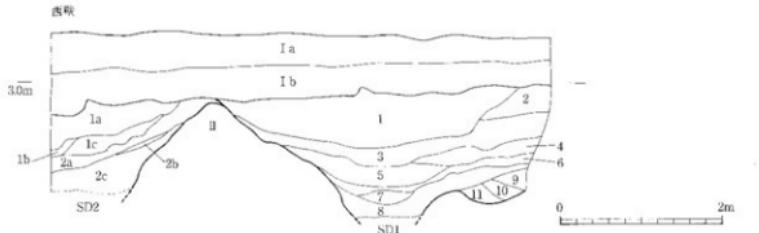
II層上面で、溝跡2条を検出した。

1) 溝跡

SD 1 溝跡 調査区北壁からほぼ中央部にかけて検出し、北側は調査区外である。おおむね東西方向に延びており、SD 2 溝跡を切っている。検出部分の規模は上端幅約4.2m、下端幅約80cm、深さ約1.5m以上である。湧水のため底面は検出していないが、ボーリングでは10cm前後で底面となる。断面形は舟底形と推定される。堆積土は11層に分けられる。土層断面の



第41図 遺構配置図



層位	土色	土性	特		考
			面	底	
I a	10YR4/3 赤褐色	シルト質粘土	透達および田作土。	土は10~20cm。	
I b	10YR4/3 に赤い黄褐色	砂質シルト	旧耕作土。黄褐色粘土ブロックおよび軟化帶、炭化物を含む。		
II	10YR6/3 に赤い黄褐色	粘土	基盤部。軟化帶をまばらに含む。SD1.5mより下部がグライ化。		
III					
SD1-1	10YR4/3 に赤い黄褐色	シルト質粘土	黄褐色。に赤い黄褐色。	砂質シルトを硬質に含む。	
2	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土質シルト	褐色土を硬質に含む。		
3	10YR4/2 広葉樹色	シルト質粘土	軟化帶を薄葉樹色に含む。		
4	10YR4/2 広葉樹色	粘土	に赤い黄褐色粘土ブロックを下部に含む。炭化物を含む。		
5	7.5YR4/1 オリーブ墨色	粘土	板物遺跡(木片)を少量に含む。		
6	5Y3/1 オリーブ墨色	粘土	鉛を溝中に含む。炭化物を含む。		
7	5Y3/2 オリーブ墨色	粘土	鉛を含む。		
8	10Y3/1 オリーブ墨色	粘土	炭化物をブロックを多量に含む。		
9	5GY5/1 オリーブ灰褐色	砂質シルト	墨色粘土ブロックをまばらに含む。		
10	10Y3/1 オリーブ墨色	粘土	炭化物をブロックを多量に含む。		
11	10Y3/1 灰色	粘土質粘土	オリーブ墨色粘土を無量に含む。		
SD2-1a	10YR6/3 に赤い黄褐色	砂質粘土	下部に軟化帶をまばらに少量含む。		
1b	10YR5/3 広葉樹色	粘土	軟化帶を薄葉樹色に少量含む。に赤い黄褐色粘土ブロックをまばらに少量含む。		
1c	10YR6/3 に赤い黄褐色	砂質粘土	軟化帶を無量に少量含む。広葉樹色粘土ブロックをまばらに少量含む。		
2a	10YR4/2 広葉樹色	砂質シルト	軟化帶を無量に少量含む。炭化物粘土を微量に含む。に赤い黄褐色粘土ブロックをまばらに少量含む。		
2b	10YR2/1 黒色	粘土	木片を含む。		
2c	10YR4/2 広葉樹色	砂質シルト	炭化物粘土をまばらに少量含む。軟化帶を薄葉樹色に少量含む。下部はオリーブ墨色粘土ブロックや灰色粘土を無量に含む。		

第42図 調査区断面図

状況から掘り直しが行われ、9~11層が古期の堆積土の可能性がある。遺物は5層から剥片1点、弥生土器と思われる土器片2点が出土した。

SD 2溝跡 調査区の南寄りで検出し、南側は調査区外である。おおむね東西方向に延びている。規模は上端幅約2.1m以上、下端幅約1m、深さは1m以上であり、底面は検出していない。壁はゆるやかに立ち上がる。堆積土は大別2層、細別6層からなる。遺物は2a層からロクロ上師器壺の腹部の破片1点、2b層からヒヨウタンの一部が出土した。

6 まとめ

- II層上面で溝跡2条を検出した。建物範囲の大部分が溝跡に含まれるものと考えられる。
- SD 1溝跡の規模は幅6m前後、深さ1.5m以上、SD 2溝跡は幅4m前後、深さ1m以上と推定される。
- SD 1溝跡がSD 2溝跡よりも古く、ともに推定される外堀よりも内堀に位置している。今泉城跡の内堀もしくは匠敷地を画する溝の可能性も考えられる。

<参考文献>

渡部弘美1994「今泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第185集

渡部弘美1995「今泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第201集



1 遺構検出状況
(北から)



2 西壁断面
(北西から)



3 SD 1溝跡北部断面
(東から)

図版33 調査区全景・西壁・遺構断面

1 SD 1 溝跡中央部断面
(東から)



2 SD 1 溝跡・SD 2 溝跡断面
(東から)



3 SD 2 溝跡断面
(北東から)



図版34 SD 1 + SD 2 溝跡断面

VIII 今泉遺跡第6次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	今泉遺跡（宮城県遺跡番号01235）
調査地点	仙台市若林区今泉二丁目4799
調査期間	平成19年7月2日～6日
調査対象面積	64.45m ²
調査面積	24m ²
調査原因	個人住宅建設
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 鈴木 隆 文化財教諭 工藤 康次郎

2 調査に至る経過と調査方法

平成19年4月27日付けで、伊東弘貴氏より、柱状土壤改良を行う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を行い、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。建設予定地に東西7m×南北3mのトレーニングを設定して調査を行ったところ、溝や土坑・ピットなどの遺構を検出したため、引き続き本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

詳しくは、本報告書掲載の今泉遺跡第5次発掘調査報告書を参照されたい。なお今回の調査地点は、本遺跡の北東部に位置する。

4 基本層序

基本層序は、約50cmの盛土下に、次の7層を確認した。

I層は現代の耕作土で、層厚は8～16cmである。

II・III層はともに耕作土である。II層の層厚は8～20cmで、近世の陶磁器を含んでいた。III層は層厚が6～20cmで、南側にはほとんど分層しない。直径1～3mmの炭化物粒をやや多く含んでいた。

IV層は鉄分をやや多く含み、水田土壤の可能性がある。層厚は2～18cmである。

V層は鉄分を多量に含む。下面に著しい凹凸が見られ、水田土壤である。層厚は2～12cmで、調査区南半分でのみ検出された。

VI層は部分的に鉄分を多く含む。下部に一部細砂が集積し、下面には凹凸が見られる。層厚は2～32cmである。

VII層は基盤層で、層厚は2～20cmである。

5 発見遺構と出土遺物

II・III層上面からは溝跡3条・土坑3基・ピット4基を、VI層からは畦畔状の高まりを検出した。また、近世の陶磁器片、馬のものと見られる齒、木製品が出土した。

1) 溝跡

SD 1 溝跡 調査区西側で検出した南北方向に延びる溝跡である。検出面はⅢ層上面である。西側の立ち上がりについては、調査区を拡張したものとの確認できなかった。上幅は3m以上、深さは50~60cmである。堆積土は1層で一度に埋められたものと考えられる。

SD 2 溝跡 南北方向に延びる溝跡で、西側のはほとんどをSD 1に切られる形で部分的に検出した。正確な規模は不明であるが、上幅1m以上、深さ50cm程度と考えられる。

SD 3 溝跡 調査区北側で検出した東西方向に延びる溝跡である。SD 1・2に切られる。プランは南側のみ部分的に検出した。上幅1.5m以上、深さ40cm以上である。また、馬のものと見られる歯が1点出土した。



第43図 調査区配置図

2) 土坑

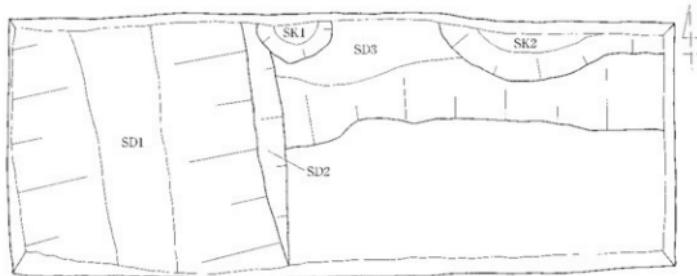
SK 1 土坑 調査区中央の北壁寄りで南半部のみ検出した。掘り込み面はⅢ層上面である。規模は東西94cm・南北48cm以上で、深さ24cmである。

SK 2 土坑 調査区北東部で部分的に検出した。規模は東西280cm以上・南北30cm以上で、深さ20cm以上である。上部をⅢ層に覆われるため、SK 1より古い遺構と考えられる。

SK 3 土坑 調査区北西角で部分的に検出した。規模は東西80cm以上・南北135cm以上で、深さ60cmである。VI層を切り、IV層に上部を覆われる。

3) ピット

ピットは4基検出したが、そのうちP 2~4は北壁断面でのみ確認した。P 1はSK 3 土坑の南側で検出し、径10cmの円形である。埋土は黒褐色の粘質土で、杭跡の可能性も考えられる。またP 2~4の規模は幅25~50cmで、深さ25~50cmである。掘り込み面はⅢ層上面である。



第44図 溝跡・土坑平面図

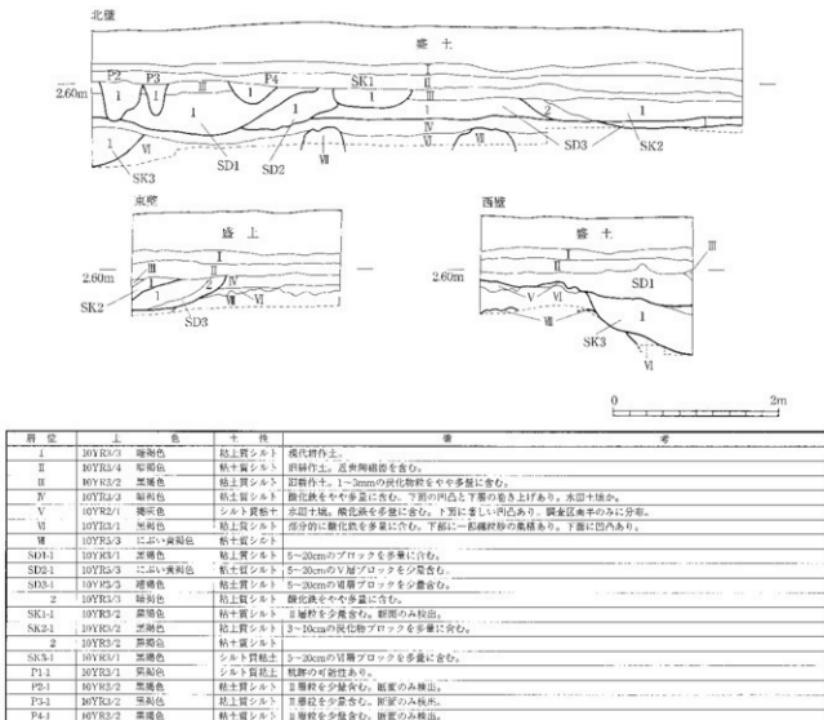
4) 畦畔状造構

調査区西側で、VI層の畦畔状の高まりを検出した。当初、溝跡底面の凹凸と判断し、土橋など溝の構造を示すものと考えた。しかし、調査区北壁沿いに設定した排水側溝を掘り下げる過程で、擬似畦畔B（斎野1987）と思われるVII層の高まりが確認されたため、VI層の高まり部分3か所にサブトレンチを設定し、VI層の掘り下げを行った。その結果、VI層の高まりに対応する形で直下にVII層の高まりが認められた。VI層下部でVII層の巻き上げも確認されたことから、VI層を水田層と判断した。畦畔の規模は、東西方向に延びる部分で幅約1.7m、高さ15~25cmである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

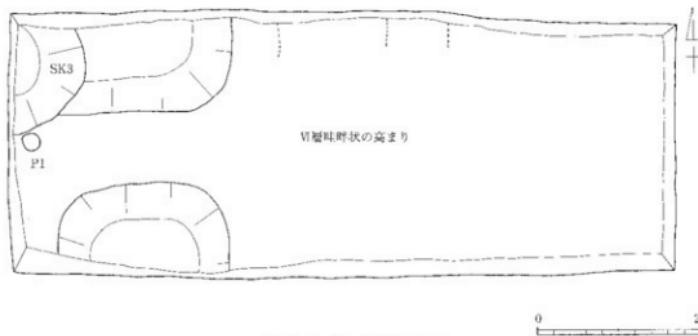
5) 出土遺物

II層からは17世紀~19世紀前半の陶磁器片が5点、VI層からは木製品が1点それぞれ出土した。

磁器片は4点出土した。肥前産の染付皿片は、丁寧に模様が描かれている。17世紀のものと見られる。同じく肥前産の染付草花文片は、渋曲の具合が比較的急なことから猪口で、時期は18世紀と考えられる。その他、19世紀前半のものと見られる瀬戸美濃産の染付碗、年代不明の肥前産染付碗が出土している。



第145図 調査区断面図



第46図 VI層造構平面図

陶器片は1点で、大堀相馬窯の土瓶又は徳利の破片と見られる。鉄絵が見られ、釉は外側にのみ施されている。19世紀前半のものと思われる。

木製品は、長軸約6.5cm、短軸約5.5cm、厚さ約2.3cmの薄い六角柱に似た形をしている。用途や時期などは不明である。

6まとめ

- ① SD1・2・3の年代については、出土遺物がないため不明である。しかし、これらを覆う基本層のII層から近世の陶磁器片が出土していることから、近世以前の造構であると考えられる。
- ② VI層の水田跡から微小な土器片が出土しており、古代まで遡る可能性も考えられるが、正確な時期は不明である。

<参考文献>

- 斎野裕彦1987『宮沢』仙台市文化財調査報告書第98集
 仙台市史編さん委員会2006『仙台市史・特別編7・城館』仙台市
 渡部弘美1994『今泉遺跡第3次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第185集
 渡部弘美1995『今泉遺跡第4次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第201集



1 遺構検出状況
(東から)



2 調査区西壁断面
(東から)



3 SD1 検出状況
(北から)

図版35 遺構検出・断面状況



1 SD 1・2 完掘状況
(東から)



2 蛙畝状の高まり検出状況
(東から)



3 蛙畝状の高まり断面状況
(北西から)

図版36 溝跡・蛙畝状の高まり

IX 大野田古墳群第12次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	大野田古墳群（宮城県遺跡番号01361）
調査地點	仙台市太白区大野田字王ノ塙20、25-1、25-10、水路、堤の各一部
調査期間	平成19年2月26日～3月2日
調査対象面積	70.47m ²
調査面積	45m ² （1トレンチ：27m ² 、2トレンチ：18m ² ）
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤 哲司 文化財教諭 早川 潤一 藤田 雄介 佐伯 修一 佐々木 匠

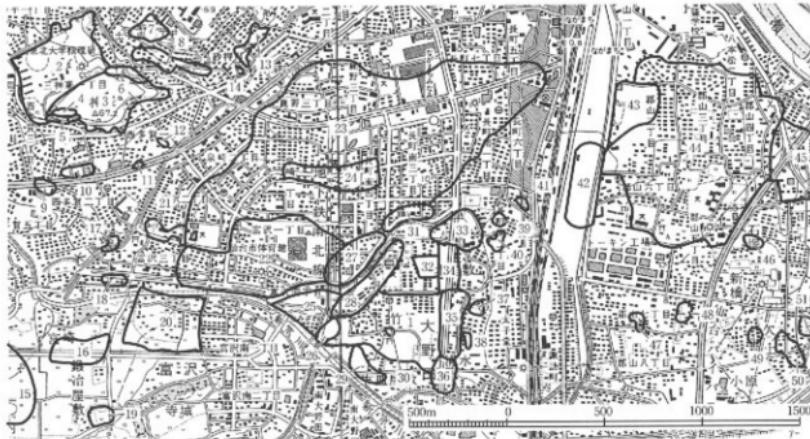
2 調査に至る経過と調査方法

平成19年2月7日付けで、地権者渡辺ゆみ子氏より深さ2.5mの柱状土壤改良を伴う個人住宅建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施しその上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成19年2月26日に着手し、建物建築予定部分に東西9m×南北4mのトレンチを設定して調査を行った。盛土が厚く堆土場を確保するため、調査区の幅を南北3mに縮小した。重機により碎石および盛土、I、II層を除去した後に、III層ならびにV層上面を人力で精査して遺構の検出作業を実施した。V層上面を精査したところ、大野田26号墳の周溝が検出されたため、引き続き本調査を実施した。当初設定した調査区（1トレンチ）を埋め戻した後に、南側に東西6m×南北約3mの調査区（2トレンチ）を設定し、1トレンチと同様III層ならびにV層上面で遺構の検出作業を行った。検出された遺構を掘削し、さらに2トレンチ北西部で下層調査を実施した。平面図および断面図は1/20で作成した。

3 遺跡の位置と環境

大野田古墳群は地下鉄宮沢駅の東側に接し、標高10～12m前後の名取川下流域左岸の自然堤防上の微高地に立地している。绳文時代および古墳時代から中世にかけての複合遺跡であり、これまで個人住宅や共同住宅建築に伴う調査のほか、「宮沢駅周辺地区画整理事業」の道路建設等に伴った調査が平成6年度以降継続的に実施されている。また遺跡の主体となる古墳時代中期から後期においては古墳群が形成され、平成19年末までに発見された古墳は大野田38号墳まで達し、春日社古墳、王ノ塙遺跡、六反田遺跡を含めて総数41基を数える。古墳の大部分は墳丘が削平されており、周溝のみが残存している。古墳の形状は、鳥居塚古墳が主軸長37mの前方後円墳であるほかは、ほとんどが円墳である。古墳からの出土遺物には土師器、円筒埴輪、形象埴輪等がある。古墳時代以降の遺構としては、古代の水田跡、河川跡、畑の耕作痕である小溝状遺構群などが検出されているほか、中世の道路跡、掘立柱建物跡、馬跡、柱列、土坑、小溝状遺構群が確認されている。

今回調査地点の西側では、平成9年度に宮沢駅周辺地区画整理事業に伴う調査が実施されており、III層上面では溝跡・ビット、V層上面で大野田26号墳周溝の西端部分や小溝状遺構群などが検出されている。

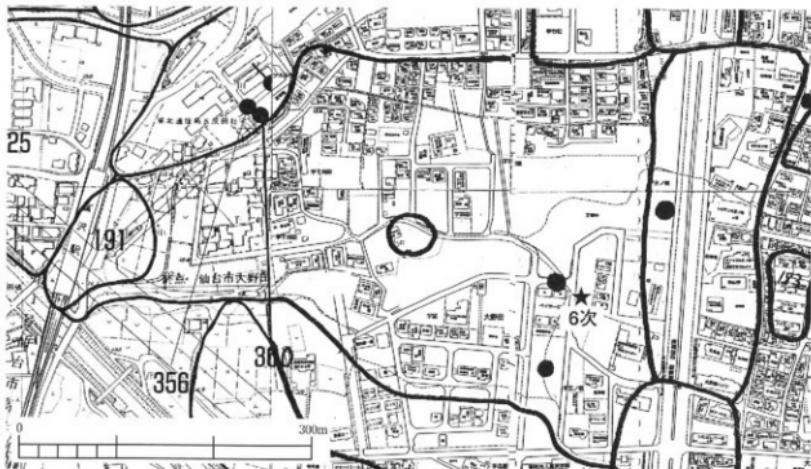


番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	大野田古墳群	円墳	自然地帯	古墳	27	下ノ内田遺跡	集落跡	水野町	自然地帯
2	芦ノ内道跡	施設跡	丘陵	調文平・篠山、平安	28	六反田遺跡	施設跡	自然地帯	建物跡・井戸、篠山～平安、五重
3	三神古墓群	集団古墳	丘陵	調文平・印、平安	29	伊古田遺跡	施設跡	自然地帯	古墳、奈良、平安
4	三神古墳群	円墳	丘陵	古墳時代	30	春日田古墳	円墳	自然地帯	古墳中
5	富川遺跡	施設跡	丘陵の谷筋	古墳、奈良、平安	31	安東遺跡	散布地	自然地帯	古墳、宇治、奈良
6	土手内田古墳地帯	丘陵の谷筋	丘陵の谷	自然地帯	32	安度遺跡	集落跡	自然地帯	施設、文政、平安
7	土手内田跡	施設跡	丘陵	調文平・寺山、奈良	33	元佐遺跡	集落跡	水口集落	自然地帯
8	土手内田跡	空跡	丘陵の谷筋	寺山、奈良	34	人原田遺跡	祭祀跡	藤原、集落跡	生糸、奈良～近世
9	西台遺跡	空跡	丘陵地	奈良、平安	35	下ノ内田遺跡	集落跡、居住跡	自然地帯	施設後、翁牛て～中世
10	足走跡	空跡	丘陵地	奈良、古墳、平安	36	坂原駒形古墳	馬蹄形古墳	自然地帯	奈良～平安
11	道原遺跡	散在地	丘陵地	古墳、平安	37	北原駒形古墳	馬蹄形古墳	自然地帯	奈良、平安
12	光明寺跡	散在地	丘陵地	平安	38	長野原古墳跡	散在地	自然地帯	古墳
13	伊泽原遺跡	散在地	丘陵地	奈良、平安	39	野町内田遺跡	散在地	自然地帯	奈良、平安
14	伊泽原	引廻	丘陵地	山崩	40	新田遺跡	説事跡	自然地帯	奈良、平安
15	南ノ内田跡	散在地	自然地帯	奈良、平安	41	野町六丁目遺跡	説事跡	自然地帯	奈良、平安
16	宿泊駒形古墳群	散在地	自然地帯	調文平・寺山、平安	42	野町浜原遺跡	散在地	自然地帯	奈良、古墳
17	笠置山二丁目遺跡	散在地	丘陵地	調文平・平安	43	引合津遺跡	包合地・愛宕堀	自然地帯	魂文、奈良寺、古墳
18	高ノ内田跡	散在地	自然地帯	古墳、奈良、平安	44	若山遺跡	散在地、寺山、佐倉身	自然地帯	純文、施設、奈良寺
19	政治官僚遺跡	自然地帯	調文	奈良、平安	45	北口城跡	遺跡、割溝、水田跡	自然地帯	純文後、奈良～近世
20	武田遺跡	散在地	自然地帯	半耕	46	木来遺跡	半耕地	自然地帯	西条～中安
21	雷雲寺水跡	散在地	自然地帯	奈良、平安	47	御塚跡	散布地	自然地帯	奈良、中安
22	山口遺跡	散在地	自然地帯	調文平・寺山、奈良～中安	48	御塚跡	散布地	自然地帯	古墳～平安
23	御前遺跡	丘陵地	水田跡	説事跡	49	久ノ上ノ遺跡	水田跡	複数地盤	古墳～中世
24	豊岡遺跡	散在地、水田跡、寺跡	自然地帯	調文平・平安、近世	50	久ノ上ノ遺跡	散布地	自然地帯	古墳～中世
25	下ノ内田跡	散在地	自然地帯	調文平・寺山、奈良～中世	51	久ノ上ノ遺跡	散布地	自然地帯	古墳～平安
26	伊古田遺跡	空跡	自然地帯	調文平・寺山					

第47図 遺跡の位置と周辺の遺跡

4 基本層序

調査地点の盛土は最近の土地整理事業の碎石で、西部から東部にかけて傾斜しており、西部から中央部では65～80cm、東部にいたっては130cmあり、西部より東部が厚い。土色、土性から基本層を大別9層、細別10層に分けた。Ia層が層厚4～20cm、Ib層は旧水田耕作土で層厚6～18cmである。II層は部分的に検出され、層厚4～15cm、III層は層厚4～20cm、IV層は層厚8～15cmであり、II層、III層、IV層とも下面に乱れが見られることから、旧耕作土と考えられる。遺構確認作業はIII層およびV層上面で行った。これまでの周辺の調査成果から、III層上面は中世、V層上面は古墳時代～古代に相当するものである。また下層調査ではVI～IX層を確認した。V層以下の層厚は、V層は8～22cm、VI層は16～22cm、VII層は10～25cm、VIII層は10～24cm、IX層は10cm以上である。



第48図 調査地点の位置

5 発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面では掘立柱建物跡 1 棟、溝跡 2 条、土坑 1 基、掘立柱建物跡 1 棟を組む可能性があるものを含むピット 19基が、V層上面では大野田26号墳周溝、溝跡 2 条、ピット 6 基が発見された。

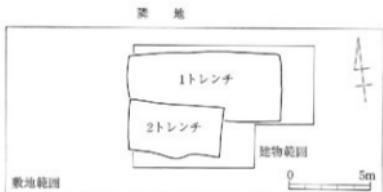
① Ⅲ層上面検出遺構

1) 掘立柱建物跡

SB 1 掘立柱建物跡 底面において柱痕跡が確認されたP2、P5、P23、P22、P13で掘立柱建物跡の一部を形成するものと考えられる。P2、P23、P22がほぼ一直線に並んで南辺をなしているものと推定され、P2-P23の間隔が約1.8m、P23-P22の間隔が約3mである。東辺はP2、P5を通る延長線上と考えられ、2基の間隔は約2mである。西辺はP22、P13を通る延長線からなり、2つの間隔は約4.2mであることから、1トレンチと2トレンチ間の未調査部分に柱穴が存在している可能性がある。掘立柱建物跡の東辺と西辺の方向が真北方向よりやや西に傾いており、規模は東西4.8m、南北4.2m以上の2間×3間以上からなるものと思われる。柱穴の平面形は円形もしくは梢円形を呈し、径30~40cmである。検出面からの深さは17~34cmである。柱穴の埋土は暗褐色もしくは黒褐色の粘土で、黄褐色あるいは灰黄褐色上のブロックを含んでいる。

2) 溝跡

SD 1 溝跡 1トレンチの東壁中央部から北壁中央西寄りにおいて検出された。P4、P5、P12に切られている。東側は調査区外である。方向は1トレンチ東部ではN-68°-Wで、1トレンチ西部に入るとN-56°-Wに屈曲する。検出部分は長さ約5.8m、上端幅30~50cm、下端幅15~20cm、深さ10~20cmで、断面形は舟底形である。遺物は埴輪片がわずかに出土した。



第49図 調査区配置図

SD 2 溝跡 1トレンチの北壁西隅あたりから2トレンチ南壁の中央部にかけて、おおむね南北方向に延びる形で検出された。P22に切られている。両端は調査区外に延びる。方向は1トレンチではN-2°-W、2トレンチではN-5°-6°-Eである。検出部の長さ約6m、上端幅60~80cm、下端幅20~40cmを測る。深さ約30cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は2層に分けられる。遺物は板状の石材片1点が出土している。

3) 土坑

SK 1 土坑 1トレンチの南東縁で検出し、南側と東側は調査区外である。掘り込み面はⅢ層上面であり、検出部分の規模は上端幅1.1m、下端幅約0.5mを測る。深さ約50cmで、断面形は舟底形を呈するものと推定される。堆積土は2層に分けられる。遺物は出土していない。

4) ピット

1トレンチで15基、2トレンチで4基の計19基検出された。P25は北壁断面で確認し、ピットと認定した。底面で柱痕跡と思われるものを確認できたものはP1、P2、P4、P5、P13、P20、P21、P22、P23の9基である。P23はV層上面で検出されたが、堆積土の様相からⅢ層上面で検出されるピットと考えた。堆積土はおおむね暗褐色の粘土もしくはシルト質粘土である。平面形はおおむね円形もしくは梢円形を呈し、径20~30cmを測る。検出面からの深さは11~47cmである。遺物はP10、P18、P21から埴輪片がわずかに出土しただけである。

②V層上面検出遺構

1) 大野田26号墳周溝

1トレンチの北壁西隅から南壁中央部付近を通り、2トレンチの南壁東隅にかけて弧を描く形で検出された。両端は調査区外である。SD 4 溝跡、P10、P12、P18、P23に切られている。掘り込み面はV層上面で、上端幅約1.8~2.2m、下端幅0.5~1m、深さ42~50cmを測り、断面形は舟底形を呈している。堆積土は1トレンチで5層に分けられる。遺物は1トレンチの2層中と、2トレンチの2ヶ所からは1層中の計3ヶ所で埴輪片がまとまって出土したほか、堆積土中に埴輪片が多く出土した。

2) 小溝状遺構群

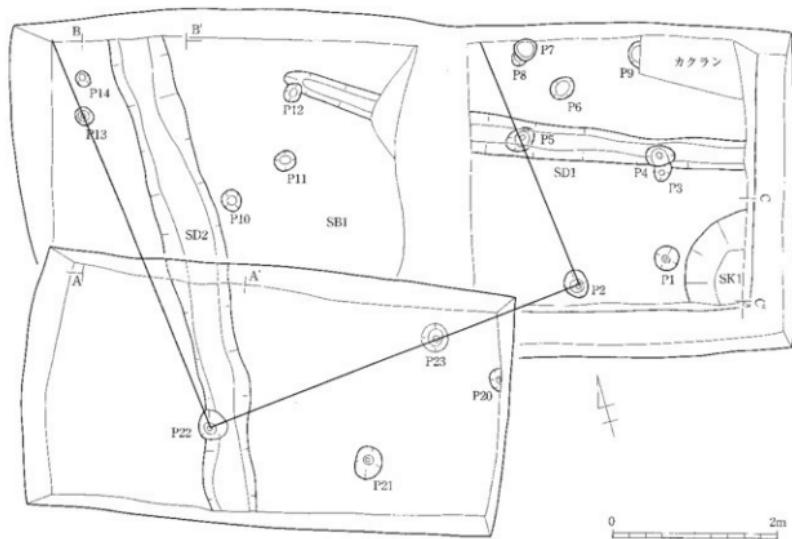
SD 3 溝跡およびSD 4 溝跡で小溝状遺構群1群をなすものと考えられる。

SD 3 溝跡 1トレンチの北壁東部から南壁東隅付近にかけて、ほぼ南北方向に延びる形で検出された。北側は調査区外である。方向はN-3°-Wで、掘り込み面はV層上面である。検出部の規模は長さ約2.2m、上端幅30cm、下端幅約15cmを測る。深さ約20cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は1層であり、出土遺物はない。

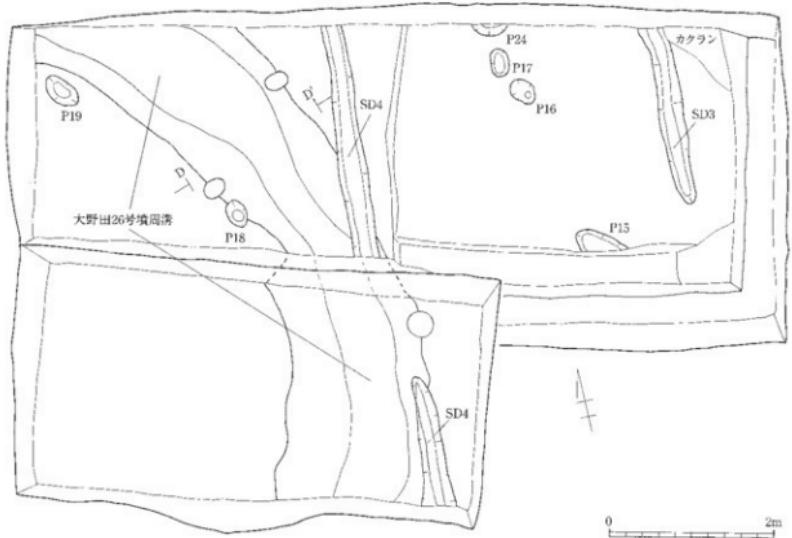
SD 4 溝跡 1トレンチの北壁中央部から南壁中央部にかけて、約5.8mにわたって26号墳周溝を切る形で検出された。方向は1トレンチではN-6°-E、2トレンチではN-7°-Eとほぼ南北方向に延びており、両端は調査区外に延びる。また、2トレンチの南壁東隅付近から調査区中央部東壁付近においても、約1.6mにわたって26号墳周溝の堆積土を切る形で検出された。南側は調査区外に延びる。上端幅30~50cm、下端幅15~20cm、深さ10~20cmで、断面形はU字形を呈する。堆積土は1層であり、出土遺物はない。

3) ピット

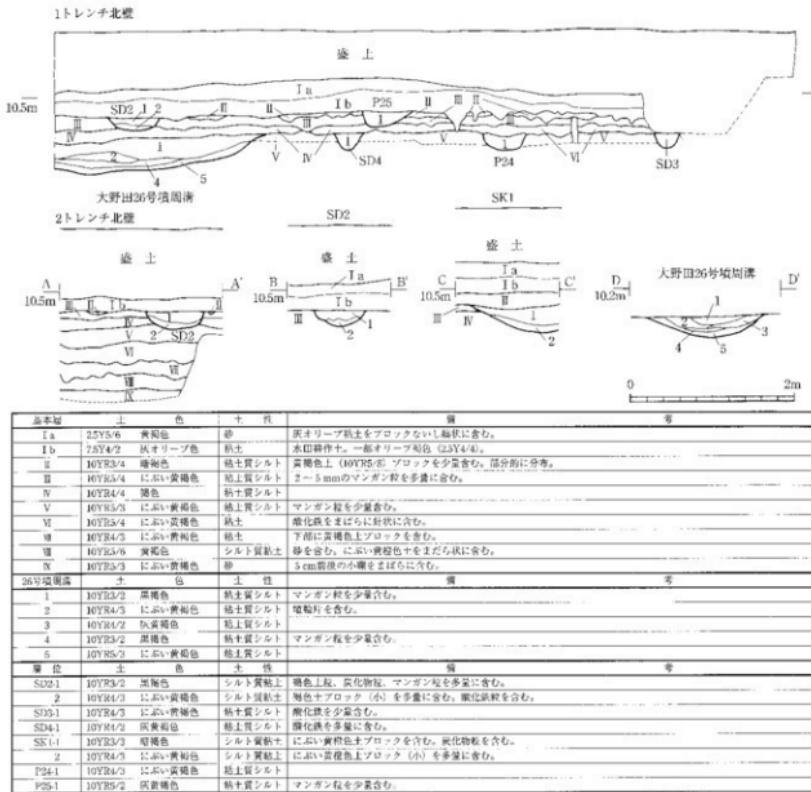
1トレンチで6基検出され、柱痕跡を確認できたものはなかった。堆積土はおおむね酸化鉄を少量含んだ、にぶい黄褐色の粘土もしくは粘土質シルトである。平面形は長径30~40cmの梢円形もしくは不整形を呈している。検



第50図 III層上面造構配置図



第51図 V層上面造構配置図

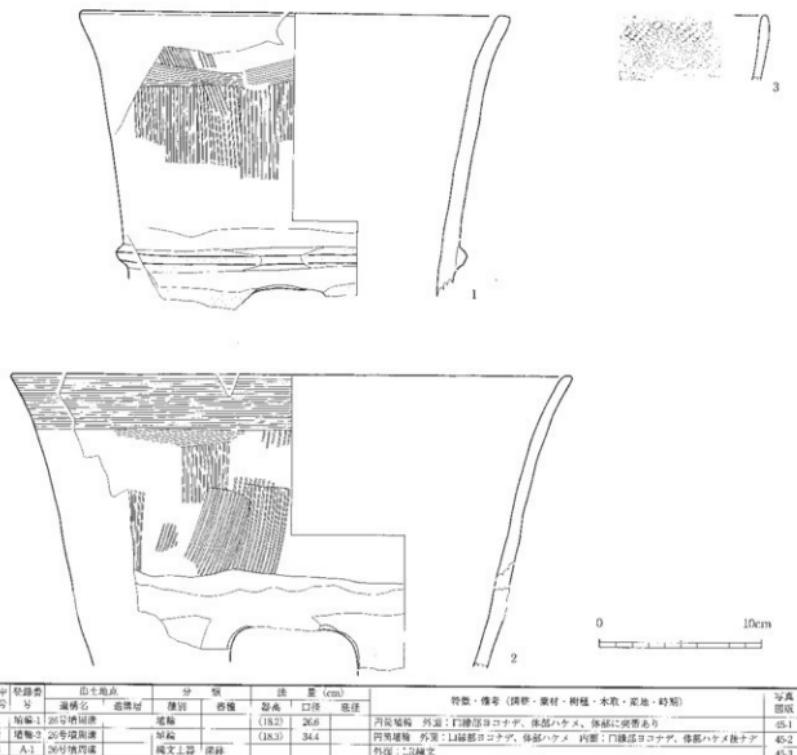


第52図 調査区・遺構断面図

出面からの深さは7~20cmである。P15、P16、P17、P24は小溝状構造の底面が部分的に現れた可能性も考えられる。

4) 出土遺物

遺物は基本層 II・III・IV・V層から多数の埴輪片、IV層から板状の大形石材（図版45-4）、大野田26号墳周溝から繩文土器の深鉢口縁部片1点（図版45-3）と多数の埴輪片が出土し、合わせてコンテナ1箱ほどであった。図版45-4の板状石材は、厚さ0.7~2.1cm、最大長51cmで、SD2跡溝出土遺物とともに組合式石棺の部材の可能性が考えられる。図化したのは、大野田26号墳出土の埴輪（第53図1・2）のみであり、ともに円筒埴輪の口縁部から部材上部が残存している。第53図1は、体部は直立気味で立ち上がり、口縁部がわずかに外傾し、端部はほぼ平坦である。突帯が体部にわずかに残っているが、大部分は剥離している。突帯の上幅7mm、下幅15mm、高さ7~8mmで、断面形は台形を呈し、やや下方に垂れる。突帯の下方には円形のスカシ孔が施されているように見受けられる。



第53図 出土遺物

けられる。外面調整は口縁部が斜め方向のハケが施された後ヨコナデ、体部がタテハケで、突帯の上下はヨコナデである。鳥居塚古墳、大野田2号墳・10号墳出土の円筒埴輪に類似している。

第53図2は第53図1より大型で、体部から口縁部にかけてゆるやかに外反して立ち上がり、端部はほぼ平坦である。突帯は残存しておらず、剥離痕跡が認められる。口縁部から突帯の痕跡までは13.5cmであり、突帯のやや下方には歪んだ円形と見られるスカシ孔が施されている。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部がタテハケのちナナメハケで、内面調整は口縁部がヨコハケのちナデである。大野田10号墳・24号墳の出土埴輪に類似が見られる。円筒埴輪の形態や調整方法から、第53図1・2とも藤沢耀年の富沢窯跡系列2a段階（結城・藤沢1987）に位置づけられるものである。

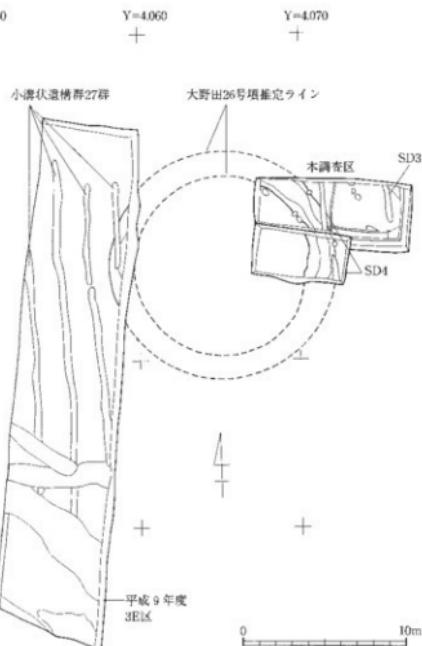
6.まとめ

III層上面からは掘立柱建物跡1棟、
 X= -198.610 Y=4.050
 溝跡2条、土坑1基、ピット19基が発見された。周辺の調査成果から、時期は中世以降のものと考えられるが、出土物がないか、時期を特定できる遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

V層上面からは平成9年度に発見された大野田26号墳周溝の一部分、溝跡2条からなる小溝状遺構群1群、ピット6基が検出された。平成9年度の調査区(3E区)と今回の調査地点を合わせた第54図で検討すると、次のように考えられる。

今回検出されたSD3溝跡とSD4溝跡は、平成9年度に発見された小溝状遺構群27群の方向とほぼ平行で、同じ群に属するものと考えられる。出土遺物がないため詳細な時期は不明だが、周辺の調査から、古墳時代中期以降平安時代前半までの時期と考えられる。

今回検出された周溝は、平成9年度検出された大野田26号墳の北東部分にあたる。墳丘は1トレンチ、2トレンチともに残存しておらず、IV層が堆積した時期には削平されていたものと考えられる。周辺の調査成果からも大野田26号墳が円墳である可能性が高く、周溝内縄径12m前後、周溝外縄径14m前後の規模と推定され、5世紀末～6世紀初め墳の円筒埴輪を伴う古墳である。



第54図 大野田26号墳推定図（渡邊・竹田2000を一部改変）

<参考・引用文献>

小川淳・高橋綾子2000『王ノ塚遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡－発掘調査報告書I』

仙台市文化財調査報告書第249集

工藤哲司2003『大野田古墳群第6次発掘調査報告書』『国分寺東遺跡他発掘調査報告書』

仙台市文化財調査報告書266集pp.203-P211

篠原信彦・根本光2002『原遺跡第4次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書257集

結城慎一・藤沢敦1987『大野田古墳群 春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書』

仙台市文化財調査報告書108集

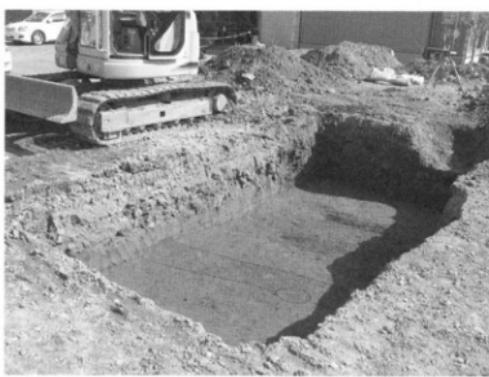
渡邊誠・竹田幸司2000『大野田古墳群・王ノ塚遺跡・六反田遺跡－仙台市富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書I－』仙台市文化財調査報告書243集



1 1 トレンチ東部
(南西から)



2 1 トレンチ西部
(西から)

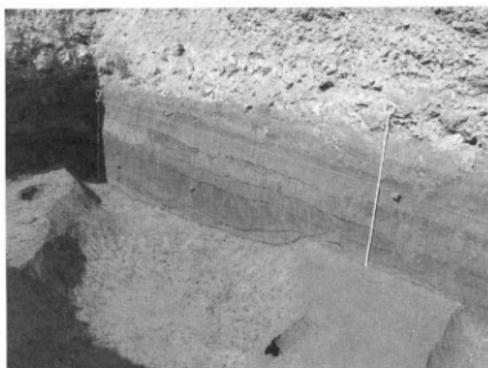


3 2 トレンチ
(南西から)

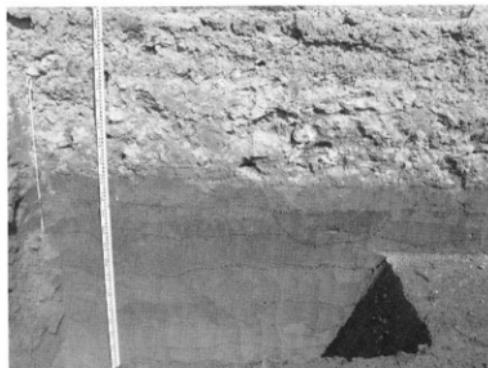
図版37 III層上面遺構検出状況



1 1 トレンチ北壁
(南東から)



2 1 トレンチ北壁西部
(南東から)



3 2 トレンチ北壁西端
(南から)

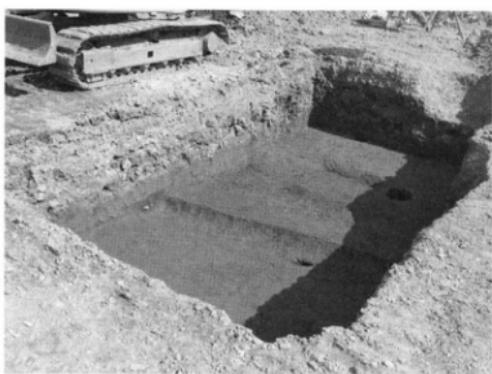
図版38 基本層序



1 1 トレンチ東部
(北西から)



2 1 トレンチ西部
(南東から)



3 2 トレンチ
(南西から)

図版39 III層上面造構完掘状況



1 1トレンチSD 1溝跡完掘（西から）



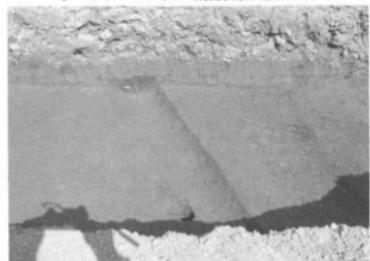
2 1トレンチSD 1検出状況（北から）



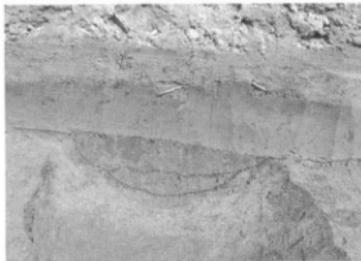
3 1トレンチSD 1溝跡完掘（南から）



4 1トレンチSD 2溝跡完掘（南から）



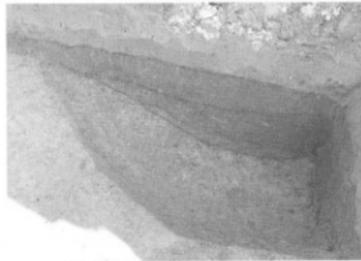
5 2トレンチSD 2溝跡完掘（南から）



6 1トレンチSD 2溝跡断面（南から）



7 1トレンチSK 1土坑完掘（北西から）



8 1トレンチSK 1土坑断面（東壁）

図版40 III層上面遺構検出状況



1 1 トレンチ
(東から)

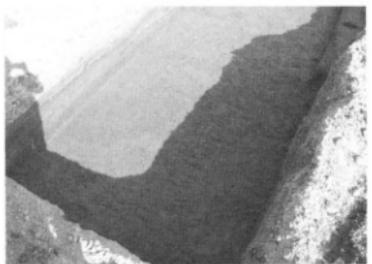


2 1 トレンチ
(南西から)



3 2 トレンチ
(南西から)

図版41 V層上面遺構検出状況



1 1 トレンチ周溝検出状況（南西から）



2 2 トレンチ周溝検出状況（南西から）



3 1 トレンチ周溝完掘状況（南西から）



4 2 トレンチ周溝完掘状況（南から）



5 1 トレンチ26号周溝断面（南西から）



6 1 トレンチ埴輪出土状況（西から）

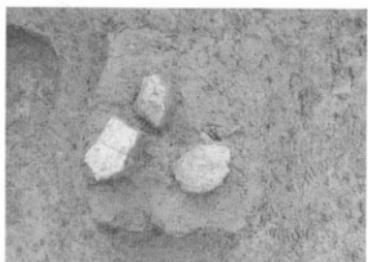


7 1 トレンチ埴輪出土状況（南から）



8 2 トレンチ埴輪出土状況（北東から）

図版42 大野田26号墳周溝



1 2 レンチ埴輪出土状況（南東から）



2 2 レンチ埴輪出土状況（北から）



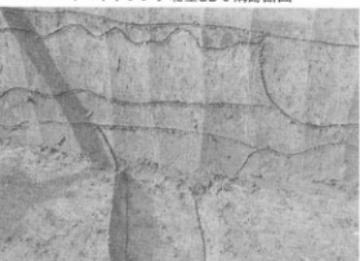
3 1 レンチSD 3 溝跡完掘（南から）



4 1 レンチ北壁SD 3 溝跡断面



5 1 レンチSD 4 溝跡完掘（西から）



6 1 レンチ北壁SD 4 溝跡断面



7 2 レンチSD 4 溝跡完掘（北西から）



8 2 レンチ南壁SD 4 溝跡断面

図版43 V層上面検出遺構

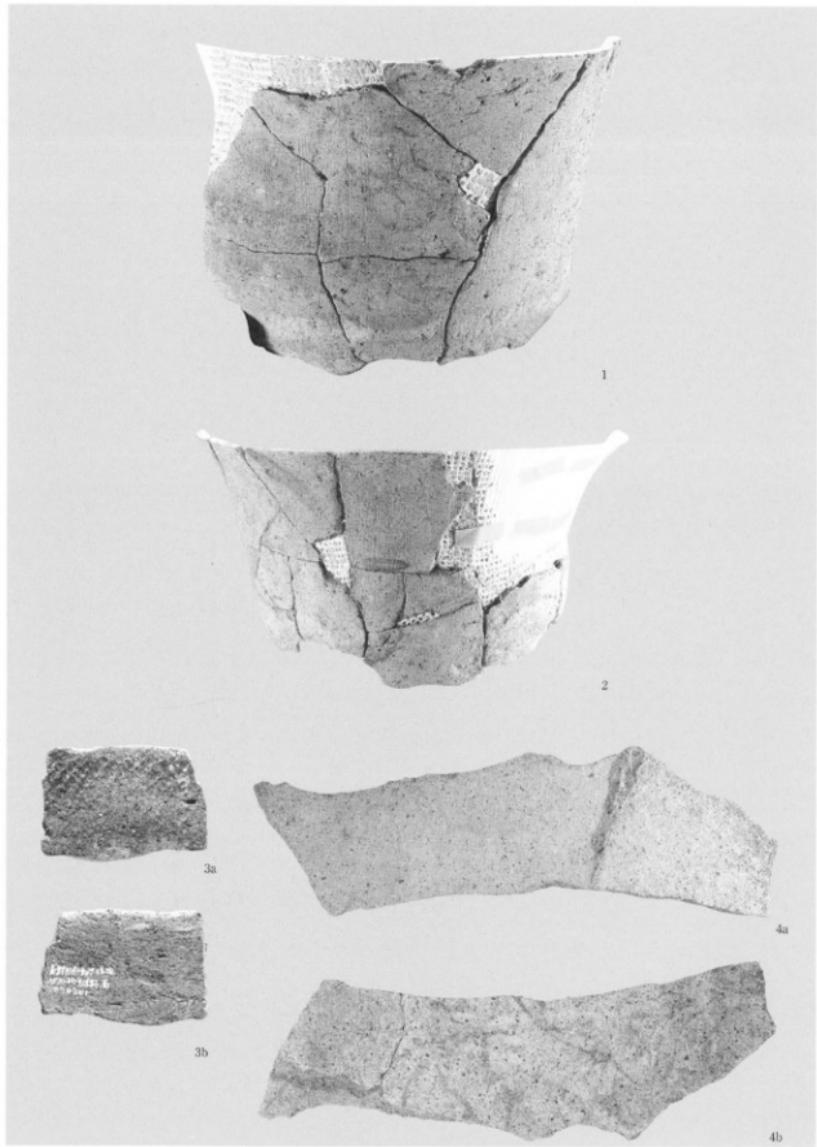


1 1 トレンチ (東から)



2 2 トレンチ (西から)

図版44 V層上面遺構完掘状況



図版45 大野田古墳群12次出土遺物

X 西台畠遺跡第6次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	西台畠遺跡（宮城県遺跡番号01005）
調査地点	仙台市長町副都心地区西整理事業区域内20街区1番地
調査期間	平成19年3月13日～3月20日
調査面積	74.64m ²
調査面積	52m ²
調査原因	個人住宅建設
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主査 工藤哲司 主任 平間亮輔 文化財教諭 早川潤一 藤田雄介 斎藤義彦

2 調査に至る経過と調査方法

平成19年2月2日付で、地権者相澤よね子氏より深さ6mのパイレ打ちを伴う個人住宅の建築に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施しその上で必要な場合は本調査を実施することとした。確認調査は3月13日に着手



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	西台畠遺跡	集合地・農場	自然開拓地	縄文・弥生・古墳	14	長町南遺跡	散在地	自然環境	奈良・平安
2	寶具遺跡	集合地・水田跡	後削開拓地	後削開拓地・茎葉遺物	15	長町六丁目遺跡	散在地	自然環境	奈良・平安
3	豊崎前遺跡	集落地・水田跡・墓地	自然・野原	縄文・古墳・平安・近世	16	長町駒込遺跡	散在地	自然環境	佐生・古墳・平安若
4	下ノ内山遺跡	集落地・水田跡	自然開拓地	縄文・平安・前・後、弥生～中世	17	桜山遺跡	散在地	自然・古墳・陪塚・散在地	自然環境
5	六反田遺跡	集落地	自然開拓地	縄文～中世、弥生～中世、後半・平安・近世	18	大木若狭	散在地	自然環境	古墳・平安
6	金乗遺跡	散布地	自然開拓地	古墳・平安、奈良	19	北上城跡	遺伝地・散在地・水田跡	自然環境	続文政・平安
7	大門庄古墳群	円墳	自然開拓地	古墳	20	静野丁遺跡	散在地	自然環境	古墳・平安
8	津波遺跡	集落地	自然開拓地	縄文・奈良・平安	21	静野丁遺跡	散在地	自然環境	古墳・平安
9	元新道跡	集落地・水田跡	自然開拓地	佐世・奈良～近世	22	舟形遺跡	近郊地・散在地	自然環境	奈良・平安
10	大野庄遺跡	祭祀・集落地	自然開拓地	縄文後・平安中・古墳～平安	23	牛形西遺跡	散在地	自然環境	鶴三・平安
11	三ノ坂遺跡	集落地・知散地	自然開拓地	縄文後・奈良～中世	24	河原城跡	散在地	自然環境	古墳・平安
12	北里根遺跡	散布地	自然開拓地	奈良、平安	25	洋野城跡	散在地	自然環境	中世
13	唐田遺跡	散布地	自然開拓地	奈良、平安					

第55図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第56図 調査地点の位置

し、建物建築予定地に東西9.5m×南北6mの調査区を設定して調査を行った。重機により盛土、I層を掘り下げたところ、II層上面から竪穴住居跡、溝跡、土坑などが検出されたため、引き続き本調査を実施した。調査区内に任意の国家座標2点④、⑩を設定し、測量の基準点とした。平面図・断面図は1/20で作成した。

3 遺跡の位置と環境

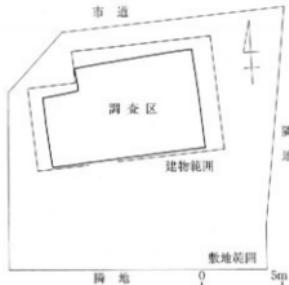
JR長町駅から東方約100mの所にあり、東西220m、南北350mの範囲に広がっている。北を広瀬川、南を名取川が流れ、標高約11mの自然堤防上に立地している。調査地点は西台畠遺跡の北東隅に位置し、郡山遺跡の西に隣接している。

昭和32年、レンガ用の粘土採掘作業中に弥生時代中期の土器や埋設された合口土器棺墓が発見され、その後の調査で人骨片を伴った土坑墓も確認され、弥生時代の墓地であることが確認された。弥生時代中期の墓制と葬法を知る上で貴重な遺跡である。これまでに個人住宅建築や「あすと長町地区画整理事業」に伴った発掘調査が実施されており、7世紀前半～8世紀初め頃の竪穴住居跡約140軒、古代の溝跡、土坑、掘立柱建物跡、中世の堀跡や井戸跡などが発見されている。出土遺物は7世紀中頃～8世紀初め頃の土師器・須恵器を中心に、弥生土器や関東系の土師器などが出上している。

近年の調査によって、西台畠遺跡は、長町駅東遺跡とともに、東に隣接する郡山遺跡の官衙や付属する寺院の造営や運営に関わった人々の集落であったことが明らかになってきている。

4 基本土層

調査地点の盛土は調査区東部にのみ分布し、東部での厚さは平均20cmあまりで、北側に向かって大きく傾斜し、調査区北東部では最大60cmを測る。基本層は土色、土性により大別2層、細別3層に分けた。I層はIa層、Ib層に細分でき、調査区全体に見られるIa層は下面に凹凸が見られることから旧耕作土と考えられる。Ib層は調査区西部に

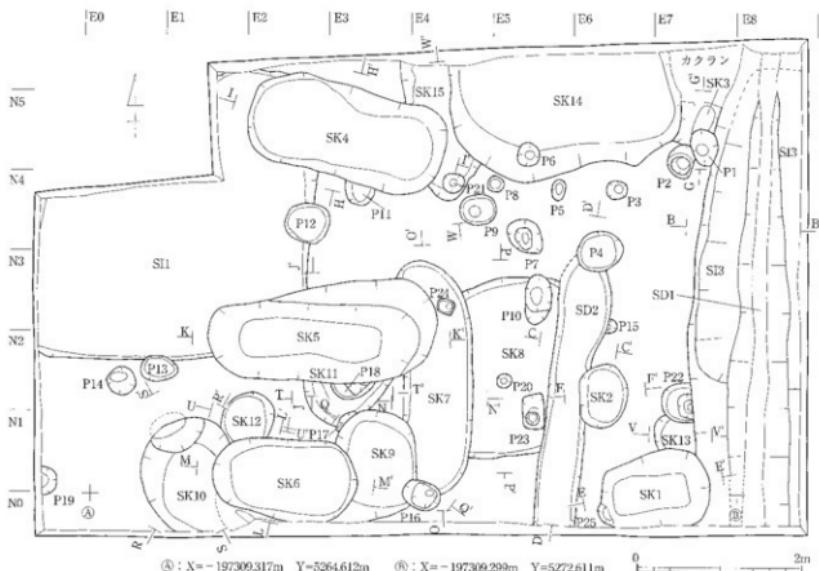


第57図 調査区配置図

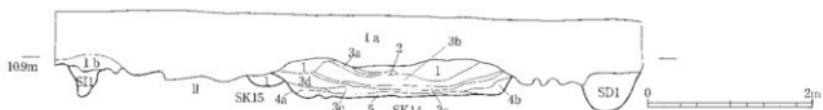
のみ見られた。遺構確認作業はⅡ層上面で行い、周辺の調査状況からこの面は古代の時期に相当する。

5 発見遺構と出土遺物

基本層Ⅱ層上面で、堅穴住居跡2軒、溝跡2条、土坑15基、ピット25基が発見された。

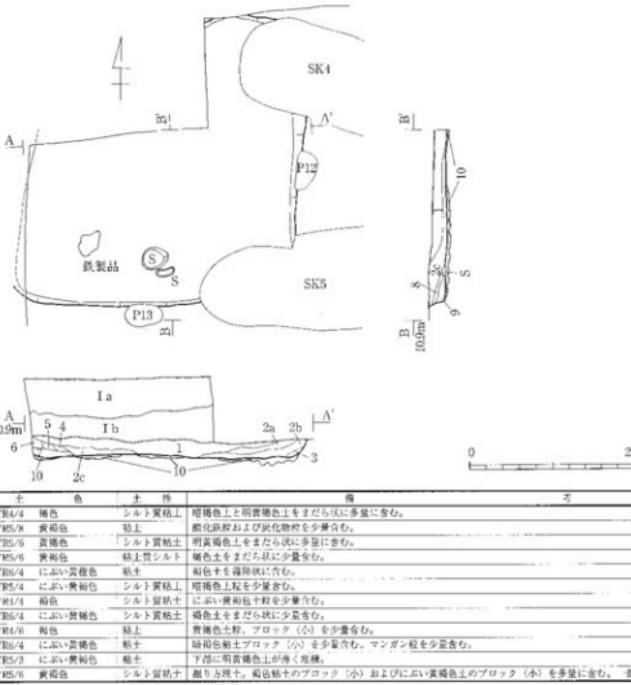


第58図 遺構配置図



層	年	土色	土性	特	備	考
I a	10YR5/4	赤い黄褐色	粘土質シルト	小礫を多量に含む。褐色ナップロック(小)を多量に含む。		
I b	10YR5/3	赤い黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土をまだら状に多量に含む。炭化物粒を少量含む。		
II	10YNS-6	黄褐色	粘土	細粒状粘土。炭化物粒を多量含む。		
層位	年	土色	土性	特	備	考
SK14-4	10YR5/3	黄褐色	シルト	東側に移行するにしたがって暗褐色土粒を多量に含み、両色に混化。		
2	10YK3/2	黒褐色	シルト質粘土上	炭化物粒、燒土粒を多量含む。		
3a	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒、焼土粒を多量に含む。		
3b	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土上	炭化物粒、黄褐色ナップロック(小)をまばらに含む。		
4c	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒、土塊上、上端部、礫を多量に含む。		
4d	10YR3/3	黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒をまばらに含む。		
5e	10YR3/3	黒褐色	シルト質粘土上	赤い黄褐色土および暗褐色土を混在状に含む。		
4e	10YR3/6	黒褐色	シルト	暗褐色土をブロック状に含む。		
4f	10YR5/6	黄褐色	シルト	暗褐色土を斑状に多量に含む。		
5	10YR5/6	赤い黄褐色	シルト質粘土	シルト質粘土		
SK15-1	10YR5/3	暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土とのプロック(小)を多量に含む。		

第59図 調査区北壁断面図



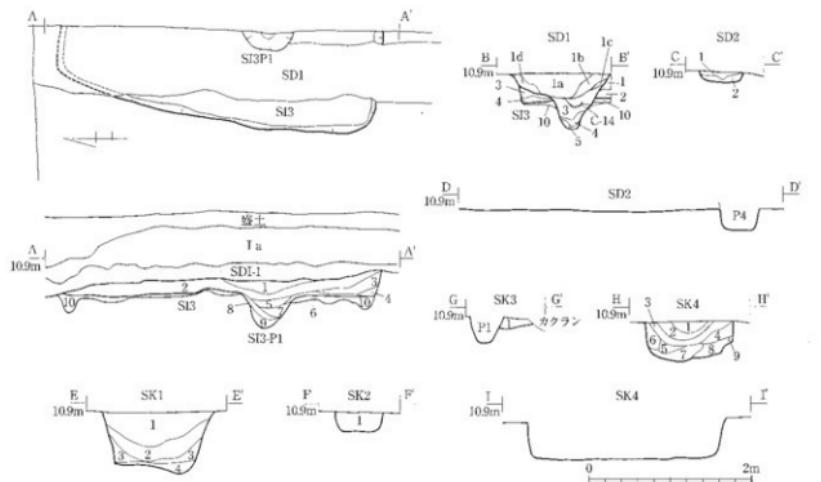
第60図 SK1 穫穴住居跡平・断面図

1) 穫穴住居跡

SI1 穫穴住居跡 調査区北西部で検出された。遺構の北辺と北西部は調査区外に延びている。SK4土坑、SK5土坑およびP12、P13に切られている。検出部の最大長は南北約350cm、東西約340cmで、平面形は方形を呈するものと推察される。住居跡の南北軸は、東辺を基準としてN-5°～Wである。

堆積土は10層に分けられた。1層は人為的な埋め土、2～9層が自然堆積層、10層は掘り方の埋土であると考えられる。検出面から床面までは残りの良いところで20cm前後である。床面はほぼ平坦で、立ち上がりは直角に近い。床面で柱穴およびピット等は検出されなかった。カマドも検出されなかったが、北壁際の床面で焼土粒を多く含む部分が確認されていることから、調査区外の北辺中央付近にカマドが設置されていた可能性がある。掘り方の深さは3～10cmで、底面に大小の凹凸がある。出土遺物には、床面から出土したロクロ不使用の土師器窓（第64図1）がある。これは平底に近い丸底で、体部から口縁部にかけて内窓気味に立ち上がる。外面調整は削減しており、内面にはヘラミガキ、黒色処理が施された後に火熱を受け再酸化している。床面からはほかに須恵器、鉄製品などが出土し、堆積土中からも多数の土師器片や少數の須恵器片が出土している。

SI3 穫穴住居跡 調査区東部で検出された。遺構の東半部は調査区外に延びている。検出部のほぼ全面がSD1溝跡に切られている。検出部の最大長は南北約300cm、東西約140cmである。SD1溝跡の断面観察によって溝跡に切られる遺構であることが判明した。残存部から平面形は隅丸長方形を呈するものと推察される。



層 号	土 色	特 性	備 考	
			上	下
SI3-1	10YR5/3 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土をまだら状および縦状に含む。	
2	10YR4/4 黒色	シルト質粘土	黄褐色土を多量に含む。	
3	10YR5/3 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土を縦状に含む。黒化物を含む。	
4	10YR5/4 黄褐色	シルト質粘土	黄褐色土をまだら状や不規則なブロック状に含む。	
5	10YR4/4 黑色	粘土質シルト	黄褐色土ブロック(小)・薄褐色土を多量に含む。	
6	10YR5/4 褐褐色	シルト質粘土	黄褐色土を縦状に含む。	
7	10YR4/4 黑色	粘土質シルト	黄褐色土ブロック(小)・薄褐色土を多量に含む。	
8	10YR5/3 黄褐色	シルト質粘土	黄褐色土ブロック(小)・薄褐色土を少量に含む。	
9	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土を微細に含む。	
10	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	掘り方埋土、薄褐色土ブロックを多量に含む。	
SD1-1a	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	明黄色土を上部に微量に含む。	
1b	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	褐色土を、薄褐色土ブロック(小)を多量に含む。	
1c	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	薄褐色土が厚く堆積。	
1d	10YR4/4 黄褐色	粘土質シルト	薄褐色土を多量に含む。	
2	10YR5/6 黄褐色	シルト	黄褐色土を縦状に含む。下部に薄褐色土を多量に含む。上部露西出土。	
3	10YR5/3 に赤い黄褐色	粘土質シルト	薄褐色土をまだら状に含む。	
4	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	薄褐色土をまだら状に含む。	
5	10YR5/3 黄褐色	砂質シルト	薄褐色土ブロック(小)を少量含む。	
SD2-1	10YR5/4 黄褐色	シルト質粘土	薄褐色土ブロックを含む。	
2	10YR4/6 黄褐色	シルト	薄褐色土ブロックを含む。	
SK1-1	10YR5/4 黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土を縦状に含む。	
2	10YR4/3 に赤い黄褐色	粘土質シルト	に赤い黄褐色土を上部に含む。	
3	10YR5/6 に赤い黄褐色	粘土質シルト	薄褐色土を縦状に含む。	
4	10YR5/3 黄褐色	粘土	に赤い黄褐色土ブロックを含む。	
SK2-1	10YR5/4 黄褐色	粘土質シルト	大小の赤褐色土ブロックを多量に含む。	
SK3-1	10YR5/3 黄褐色	シルト質粘土	黄褐色土を縦状に含む。	
SK4-1	10YR5/4 黄褐色	粘土質シルト	薄褐色土を縦状に含む。	
2	10YR5/4 に赤い黄褐色	シルト質粘土	赤褐色土を縦状に含む。に赤い黄褐色土ブロックを含む。	
3	10YR4/6 黄褐色	粘土	に赤い黄褐色土を縦状に含む。	
4	10YR4/3 に赤い黄褐色	シルト質粘土	に赤い黄褐色土ブロック(小)を縦状に含む。	
5	10YR4/3 に赤い黄褐色	シルト質粘土	に赤い黄褐色土を縦状に含む。	
6	10YR5/3 に赤い黄褐色	シルト質粘土	に赤い黄褐色土ブロックを少量含む。	
7	10YR4/2 黄褐色	粘土	に赤い黄褐色土ブロックを含む。	
8	10YR4/2 黄褐色	粘土	に赤い黄褐色土ブロックを少量含む。	
9	10YR4/3 に赤い黄褐色	シルト質粘土	に赤い黄褐色土ブロックを縦状に含む。	

第61図 遺構半・断面図

床面で柱穴およびカマド、ピット等は検出されなかったが、調査区東壁を観察したところ、中央部にピット状の落ち込みが見られたため、SI3-P1とした。

調査区東壁での観察から、堆積土は11層に分けられた。そのうち1～5層が自然堆積層、6～8層はSI3-P1の堆積土で、11層は掘り方の埋土であると考えられる。床面はほぼ平坦で、立ち上がりは直角に近い。掘り方の深

さは3~10cmで、底面に大小の凹凸がある。SD1溝跡にはほとんど切られていたため、遺物は確認されなかった。

2) 溝跡

SD1溝跡 調査区東壁際で調査区を南北方向に横断するよう検出され、方向はおおむねN-3~4°-Eである。SI3堅穴住居跡を切り、SK1土坑に切られている。検出部での規模は上端幅70~135cm、下端幅15~25cm、深さは70cm前後で、断面形はおおむねV字形を呈している。堆積土は大別5層に分けられ、褐色もしくは黄褐色の粘土質シルトが主体である。遺物は、内面が黒色処理された体部外面に段を有する土師器壺（第64図5・6）、内面・外面ともにヘラケズリしてある瓶底部片（第64図7）、口縁部内外に波状文のある須恵器壺片（第64図8）が堆積土の上層で出土したほか、多数の土師器片や須恵器片が出土した。

SD2溝跡 調査区中央やや東寄りでは南北方向で検出された。南側は調査区外に延びている。方向はおおむねN-5~6°-Eである。SK2土坑、SK8土坑、P15を切り、P4に切られている。検出部での規模・形態は上端幅50~65cm、下端幅40~50cm、深さは7cm前後で、断面形は浅いU字形を呈している。堆積土は2層に分けられる。堆積土1層からは、口縁部が外反し、口縁部の内外面がヨコナデ、体部の外面はヘラケズリされているロクロ不使用の土師器高环片（第64図3）が出土した。他に口縁部が短く直立し、口縁部内外面がヨコナデ、外面体部がヘラケズリ、体部内面がヘラミガキしてあるロクロ不使用の土師器壺片（第64図2）も出土した。

3) 土坑

調査区内で15基検出された。平面形は楕円形や不整な隅丸方形などである。検出部での規模は、長軸40~290cm、短軸20~140cm、深さは16~68cmと、規模は多様である。堆積土は暗褐色ならびに黄褐色系の粘土質シルトおよびシルト質粘土が主体である。

SK1土坑 調査区南東部の南壁際で検出された。南側は調査区外に延びている。SD1溝跡、SK13土坑を切っている。平面形は不整な隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出部の最大長は東西約150cm、南北約80cmである。最深部の深さは76cmで、断面形は逆台形である。堆積土は大別4層に分けられる。遺物は土師器片が1点出土したのみである。

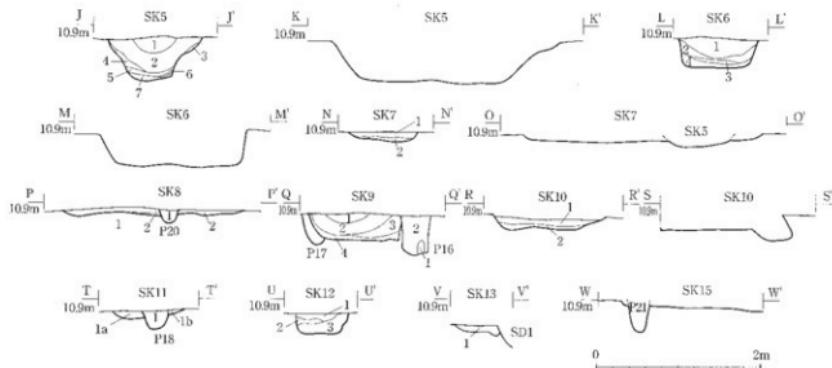
SK2土坑 調査区南東部で検出された。平面形は楕円形を呈している。SD2溝跡に切られている。検出部の最大長は南北約78cm、東西約58cmである。深さは24cmで、断面形はU字形を呈している。堆積土は大小の黄褐色土ブロックを多く含んだ暗褐色粘土質シルトである。遺物は土師器片が2点のみ出土した。

SK3土坑 調査区北東部で検出された。SD1溝跡、P1、P2に切られている。平面形は楕円形を呈するもの、と考えられる。検出部の最大長は南北約30cm、東西約20cmである。深さは24cmで、断面形は舟底形を呈するものと推察される。堆積土は1層である。遺物は土師器片が2点出土したのみである。

SK4土坑 調査区北西部で検出された。SI1堅穴住居跡、SK14土坑、P11を切っている。平面形は隅丸長方形を呈している。検出部の規模は南北約2.4m、東西約1.1m、深さは53cmで断面形はU字形を呈する。堆積土は大別8層に分けられた。遺物は土師器片9点や須恵器片1点が出土した。

SK5土坑 調査区中央部で検出された。SI1堅穴住居跡、SK7土坑、SK11土坑、P18を切っている。平面形は不整な楕円形を呈している。検出部の規模は東西約2.8m、東西約1.2m、深さは53cmで、断面形はおおむね舟底形を呈する。堆積土は大別7層に分けられた。遺物は土師器小片が20点余り出土した。

SK6土坑 調査区中央の南壁際で検出された。遺構の南東部分は調査区外に延びている。SK9土坑、SK10土坑、SK12土坑を切っている。平面形は不整な楕円形ないしは隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出部の規模は南北約1.8m、東西約95cm、深さは37cmである。断面形は逆台形を呈している。堆積土は大別4層に分けられた。



層	土	色	土性	備
SK5-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	泥化鉄鉱・黄褐色土粒を微量に含む。
2	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	灰青褐色土上ブロックをまばらに含む。灰青褐色土上粘土を微量に含む。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰青褐色土上ブロック（小）を多量含む。灰青褐色土を少量含む。
4	10YR6/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰青褐色土上ブロック（小）を多量含む。灰青褐色土を微量に含む。
5	10YR5/2	深褐色	シルト質粘土	灰青褐色土上ブロック（小）を多量含む。灰青褐色土を微量に含む。
6	10YR4/2	灰黃褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土を少量含む。
7	10YR6/2	にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰青褐色土上ブロック（小）を多量含む。下部に灰青褐色土（シルト）をまだら状に少量含む。
SK6-1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	灰青褐色土上ブロック（小）を多量含む。下部に灰青褐色土を斑状にまばらに含む。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	灰青褐色土上ブロック（小）を多量含む。灰青褐色土を微量に含む。
3	10YR3/1	墨褐色	シルト	灰青褐色土上ブロック（小）を多量含む。灰青褐色土を微量に含む。
4	10YR4/2	灰黃褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土ブロックを少量含む。
SK7-1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	上堅土、炭化物類、陶片等をまばらに含む。
2	10YR3/6	暗褐色	粘土	暗褐色土ブロックを含む。
SK8-1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	泥化鉄鉱・土器片等を多量に含む。土器片を含む。
2	10YR2/2	深褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土ブロック（小）を多量に含む。土器片を含む。
SK9-1	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土ブロック（小）を多量に含む。灰青褐色土を微量に含む。
2	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土	灰青褐色土ブロック（小）を多量に含む。灰青褐色土を微量に含む。
3	10YR3/2	深褐色	粘土	灰青褐色土ブロック（小）を多量に含む。灰青褐色土を微量に含む。
4	10YR6/4	にぶい黄褐色	粘土	灰青褐色土上ブロック（小）を多量に含む。灰青褐色土を微量に含む。
SK10-1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	粘土・炭化物類を多量に含む。
2	10YR5/6	深褐色	粘土質シルト	土器片・陶片等を多量に含む。土器片を含む。
P16-1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	土器片・陶片等を多量に含む。土器片を含む。
2	10YR3/3	暗褐色	粘土	土器片（直径約3mm）。
P17-1	10YR3/7	深褐色	粘土	陶片等を多量に含む。
P18-1	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	泥化鉄鉱・黄褐色土ブロック（小）を多量に含む。灰青褐色土を含む。
P20-1	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	泥化鉄鉱・黄褐色土ブロック（小）を多量に含む。灰青褐色土を含む。

第62図 土坑断面・エレベーション図

遺物は土師器片が20点ほど出土した。

SK 7 土坑 調査区中央南部で検出された。SK 9 土坑を切り、SK 5 土坑、P16、P24に切られる。平面形は梢円形を呈する。検出部の規模は南北約2.9m、東西約85cm、深さ10cmで、断面形は浅い舟底形である。堆積土は大別2層に分けられた。出土遺物は、口縁部と体部に段を持ち、口縁部が短く屈曲する土師器坏片（第63図3）のほか、土師器片が20点ほどである。

SK 8 土坑 調査区中央南部で検出された。SD 2溝跡、SK 7 土坑、P10、P20、P23に切られる。平面形は不整な円形もしくは梢円形を呈するものと考えられる。検出部の最大長は南北約2.2m、深さは10cmで、断面形は浅い舟底形を呈する。堆積土は2層に分けられた。出土遺物には、須恵器壺片のはか内面ナデ調整で口縁部が屈曲する土師

器坏（第63図1）と内面黑色处理された土師器坏（第63図2）などがある。

SK9土坑 調査区中央南部で検出された。SK12土坑を切り、SK9土坑、SK10土坑に切られる。平面形は不整な隅丸方形を呈している。検出部の最大長は南北約135cm、東西約95cmである。深さ35cmで、断面形は舟底形もしくは逆台形を呈している。堆積土は大別4層に分けられた。土師器片が約10点出土した。

SK10土坑 調査区南西部の南壁際で検出され、遺構の南側部分は調査区外に延びる。SK6土坑に切られている。平面形は不整な隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出部の規模は南北約14m、東西約1.1m、深さは15cmである。断面形は扁平な舟底形で、中央部に凹みが見られる。堆積土は大別2層に分けられた。遺物は土師器小片がわずかに出土した。

SK11土坑 調査区中央西部で検出された。平面形は不明である。SK5土坑、P18に切られている。検出部の最大長は東西約90cm、南北約50cmである。深さ10cmで、断面形は扁平なU字形である。堆積土は大別2層に分けられた。遺物は出土していない。

SK12土坑 調査区南西部で検出された。SK6土坑に切られている。平面形はほぼ円形を呈するものと考えられる。検出部の規模は東西約67cm、深さは25cmで、断面形は壁がほぼ直角に立つU字形である。堆積土は3層に分けられた。遺物は土師器片や須恵器片が出土した。

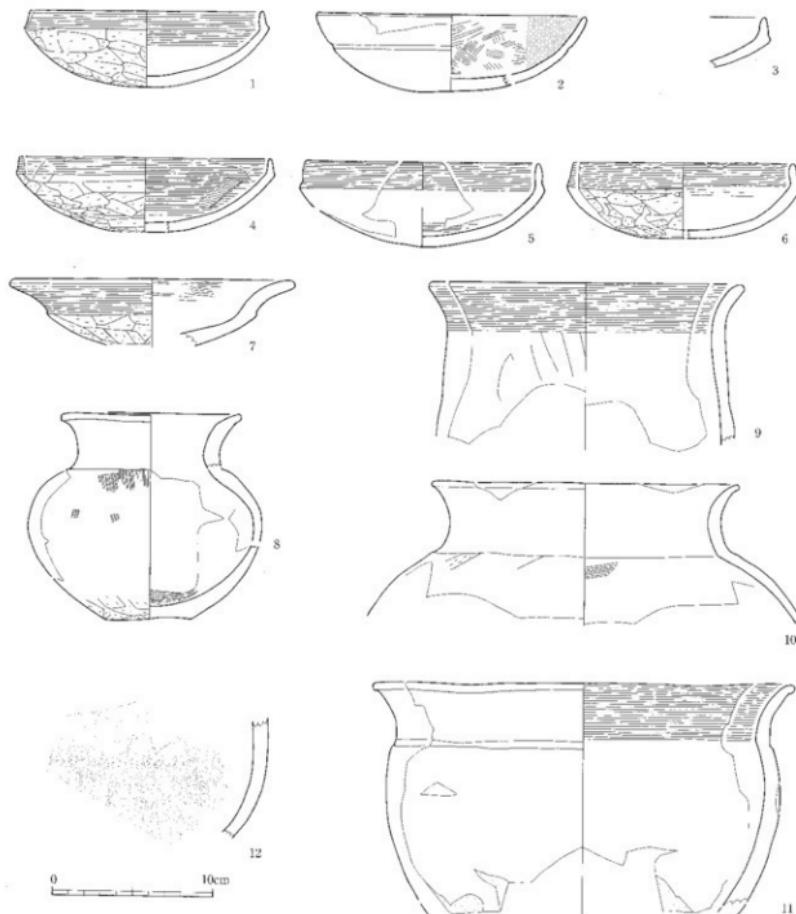
SK13土坑 調査区南東部で検出された。SD1溝跡、SK1土坑、P22に切られている。平面形は不明である。検出部の最大長は東西約12cmである。断面はSD1溝跡と接する側の東部のみくほんでいるが、おむね扁平な舟底形と推定でき、深さ7cm、最深部では12cmである。堆積土は1層である。遺物は土師器片が出土した。

SK14土坑 調査区北壁際やや東寄りで検出された。北側部分は調査区外に延びている。平面形は不整な隅丸方形ないしは隅丸長方形を呈するものと考えられる。検出部の最大長は南北約1.5m、東西約2.7mで、断面形は舟底形、最も深い部分は約50cmである。調査区北壁での観察から、堆積土は大別5層に分けられた。遺物は高环脚部を含む多数の土師器小片、須恵器片や大小の砾が多数出土した。口縁部内外面がヨコナデで、口縁部が屈曲する土師器坏3点（第63図4～6）、口縁部と体部の外面に段を持ち、口縁部が外傾しており、内面はヘラミガキのみで、SD2溝跡から出土した同一個体と思われる、脚部がない土師器高环片1点（第63図7）、体部と口縁部がくびれ、口縁部が外反する土師器壺2点（第63図10・11）、体部と口縁部にくびれがなく、口縁部がゆるやかに外傾している土師器壺1点（第63図9）、小形の土師器壺1点（第63図8）といったロクロ不使用の土師器と、体部の内外面にタタキ目のある須恵器壺の体部片（第63図12）は図化した。

SK15土坑 調査区中央北壁際で検出された。北側部分は調査区外に延びている。SK4土坑、SK14土坑、P21に切られている。平面形は不明で、検出部分は南北約1.7mである。最も深い部分は15cmで、断面形は扁平な舟底形と考えられる。出土遺物はない。

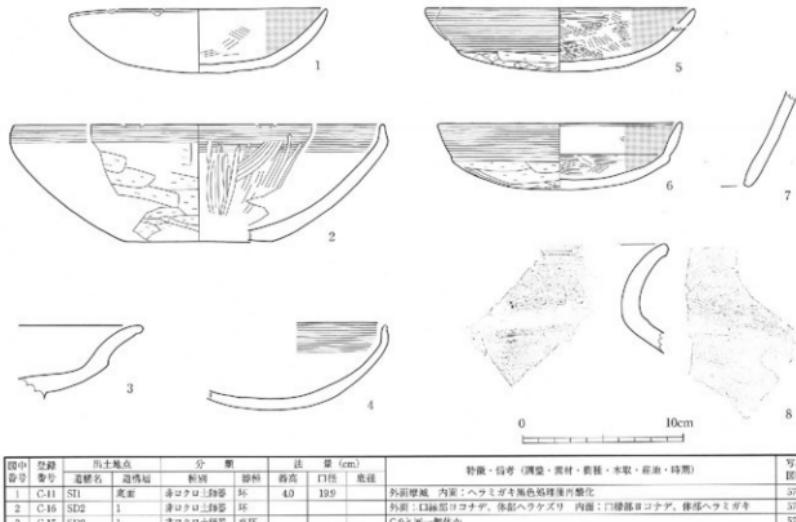
4) ピット

調査区内で25基検出された。P23、P24の平面形が隅丸方形以外は、円形ないし横円形を基調とする平面形で、規模は長径20～55cm、短径20～50cm、深さは7～54cmである。柱痕跡はP16、P22、P23、P24の4基検出されたが、建物や塙など一連の遺構となるものはない。堆積土の多くは褐色ならびに暗褐色、にぶい黄褐色のシルト質粘土で、黄褐色ならびに褐色の小ブロックを含んでいる。遺物は、P4からは外面ヘラケズリ、内面ヨコナデで、口縁部と体部の境にわずかに段を有する土師器坏片が、P18からは内面ナデ調整され、口縁部が屈曲する土師器坏片（第64図4）が出土したほか、P5、P6、P11、P12、P15、P16、P24をのぞくピットの堆積土中から土師器片がそれぞれわずかに出土した。



箇号	登録番号	出土地点	分類	法 長(cm)	参考	等級	
番号		遺構名	基盤地	種別	基盤 断面	口徑 底径	底径
1	C-18 SK8		漆器	漆器	漆器	漆器	漆器
2	C-19 SK8	1	漆器	漆器	漆器	4.9	16.8
3	C-17 SK7	1	漆器	漆器	漆器	16	—
4	C-8 SK14		漆器	漆器	漆器	5.3	14.6
5	C-1 SK14		漆器	漆器	漆器	4.7	15.7
6	C-6 SK14		漆器	漆器	漆器	4.7	13.6
7	C-9 SK14		漆器	漆器	漆器	(4.1)	17.4
8	C-4 SK14		漆器	漆器	漆器	12.9	11.1
9	C-8 SK14		漆器	漆器	漆器	—	9.7
10	C-6 SK14		漆器	漆器	漆器	(13.5)	26.0
11	C-5 SK14		漆器	漆器	漆器	(13.5)	26.0
12	E-1 SK14	3	漆器	漆器	漆器	—	—

第63図 出土遺物1



第64図 出土遺物

5) 出土遺物

基本層Ⅰ・Ⅱ層から土師器片や少量の須恵器片が出土し、調査区全体からテンバコ4箱ほどの遺物が出土した。ロクロ不使用の土師器18点、須恵器2点を掲載した。

ロクロ不使用の土師器の甕や高環、須恵器は、破片資料のため器形・器高が明らかではなく、時期を特定するには不十分と考え、形態や調整技法がわりと明瞭な土師器の环と小形壺の時期を検討した。

出土した土師器环は、東北地方南部における古墳時代後期の土師器型式である栗田式期の土師器と関東系土師器に分けられる。栗田式期の环は、外面の口縁部と体部に段や稜を有した丸底で、内面にはヘラミガキが施され、黒色処理されることが特徴的である。口縁部が外傾しているもの（第64図6）、口縁部が内弯気味に立ち上がるもの（第64図5）、口縁部がゆるやかに外傾しているもの（第63図2）の他に、平底に近い丸底で体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がるもの（第64図1）などがある。それぞれ郡山Ⅰ期官衙期からⅡ期官衙期にかけて類例が見られる。

関東系土師器は、関東地方における古墳時代後期の土師器型式である鬼高式や貞間式と呼ばれる土師器と同様か、類似している土師器のことをいい、過去に西台畠遺跡や郡山遺跡、長町駅東遺跡でも多く出土している。そのうち鬼高式土師器に近いものは、ヘラケズリを施される体部外面とヨコナデで仕上げられる口縁部が直立しない内傾して立ち上がり、内面調整はヨコナデであることが特徴とされる。第63図4、5は口縁部と体部の外面に稜を有し、口縁部は短くほぼ直立し、内外面とも漆で仕上げられている。これと同様に内外面とも漆で仕上げのものが、プレⅠ～A期にあたる郡山遺跡の官衙以前の堅穴住居跡で出土している。口縁部は短く直立もしくは内弯し、内面は口

縁部のみか体部上部にかけてヨコナデされている坏（第63図1・6、第64図4）は、郡山ブレI-B期の遺物に類似例がある。口縁部が短く直立し、口縁部内外面がヨコナデ、外面部がヘラケズリ、体部内面がヘラミガキしてある平底の坏（第64図2）は、郡山ブレI-A期の堅穴住居跡出土のものに類似している。

口縁部内外面はヨコナデ、体部上部はハケメ、体部下部はヘラケズリ、体部内面はヘラケズリで、最大径が球形の体部にある平底の小型壺（第63図8）は、郡山施寺の井戸跡から形状や調整技法が類似しているものが出土しており、8世紀初頭の郡山II-B期にあたる。

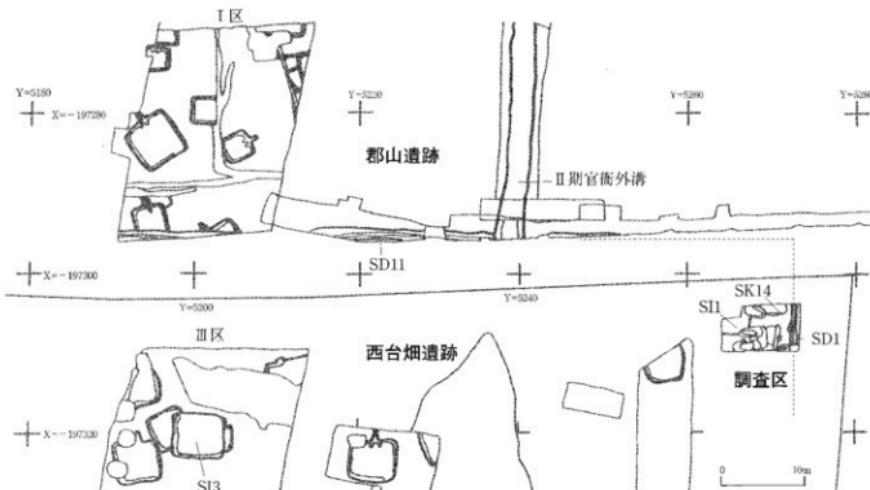
6まとめ

基本層II層上面で、堅穴住居跡2軒、溝跡2条、土坑15基、ピット25基が発見され、遺物はロクロ不使用の土師器、関東系土師器、須恵器などが出土した。

出土遺物の検討と過去の周辺の調査成果をふまえた結果、遺構の時期や性格は次のように考えられる。

- ① SD1溝跡は、出土遺物の堆積状況から7世紀中頃～後半にかけての郡山I期官衙期中頃から末期までには埋まっている可能性がある。本調査区から北東に位置する郡山遺跡I区で発見されたSD11溝跡と本調査区のSD1溝跡は連続する遺構で、郡山ブレI-B期の区画溝との指摘がある（註1）が、限られた範囲の調査のため、今後も周辺の調査成果を取り入れながら検討を要する。
- ② SD1溝跡に切られているSI3堅穴住居跡はSD1溝跡より古く、7世紀中頃以前にさかのほると考えられる。
- ③ SI1堅穴住居跡は、第65図の西台畠遺跡III区SI3堅穴住居跡とはほぼ方向が同じである。西台畠遺跡III区SI3堅穴住居跡は、郡山II期官衙期に相当する時期のものと考えられており、本調査区のSI1堅穴住居跡は郡山II期官衙期前半の7世紀末から8世紀初め頃に機能していたことが考えられる。
- ④ SK14土坑の堆積土からは、郡山ブレI-A期から郡山II-B期にかけての栗廻式土師器や関東系土師器の破片が混在しままって出土していることから、8世紀初頭以降に一括して廃棄された可能性がある。

（註1）「長町駅東遺跡・西台畠遺跡の調査から」（工藤信一郎2008）の中で指摘されている。本調査区から北東に位置する郡山遺跡I区で発見されたSD11溝跡（以下「SD11溝跡」と記す）は、ほぼ東西方向に伸びており、郡山遺跡方四町II期官衙の外溝に切られている。この溝跡と郡山遺跡方四町II期官衙大溝推定ラインの西辺とはほぼ並行している今回検出されたSD1溝跡は、規模、断面の形状および堆積土の状況から連続する遺構と考え、「SD11溝跡」がSD1溝跡の延長上の方四町II期官衙外郭大溝の北西隅近くで南に曲がることを想定している。「SD11溝跡」とSD1溝跡は郡山遺跡I期官衙が置かれる以前のブレI-B期に形成された区画溝の可能性を考えている。



第65図 周辺の調査成果（工藤信一郎2008を一部改変）

＜引用・参考文献＞

- 工藤信一郎2007『長町駅東遺跡第4次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第315集
- 工藤信一郎2008『長町駅東遺跡・西台窯遺跡の調査から』『第34回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.75-98
- 工藤哲司2004『非ロクロ土師器の変遷』『鴻ノ巣遺跡第7次発掘調査報告書』
- 仙台市文化財調査報告書第280集pp.246-276
- 長島栄一2005『都山遺跡発掘調査報告書』総括編1 仙台市文化財調査報告書第283集
- 村田晃一1998『栗廻式土器の成立と展開』『東北大学文学部考古学研究会会報』2 pp.36-41
- 村田晃一2000『飛鳥・奈良時代の陸奥北辺』『宮城考古学』2 pp.45-80
- 村田晃一2007『宮城県中部から南部』『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』
東北学院大学文学部pp.119-163



1 調査区全景
(南東から)



2 調査区西部
(南から)



3 調査区東部
(南から)

図版46 遺構検出状況

1 調査区全景
(南東から)



2 調査区西部
(南から)



3 調査区東部
(南から)



図版47 遺構完掘状況



1 北壁



2 北壁中央

図版48 基本層序



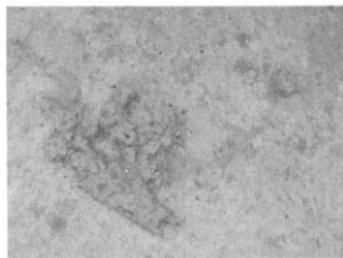
1 完掘状況（東から）



2 南北ベルト（西から）



3 東西ベルト（南から）



4 鉄製品出土状況（東から）



5 遺物出土状況（南東から）

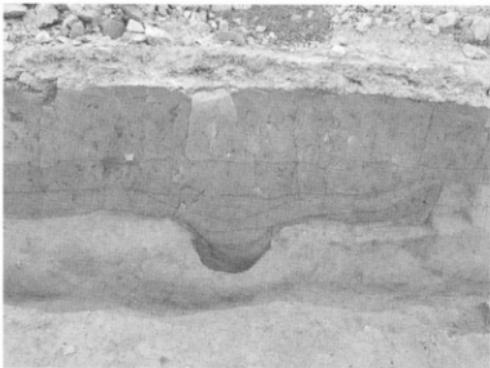
図版49 SI 1 竪穴住居跡



1 完掘状況
(南から)



2 東壁北部断面



3 東壁南部断面

図版50 SI 3 竪穴住居跡



1 完掘状況
(南から)



2 SD 1 溝跡断面
(南から)



3 坎 (第64図 6) 出土状況
(南から)

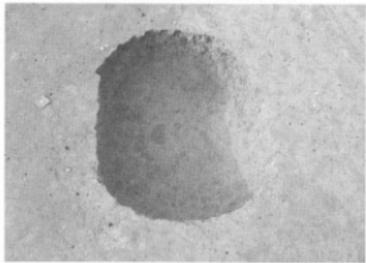
図版51 SD 1 溝跡



1 SK 1 土坑完掘状況 (東から)



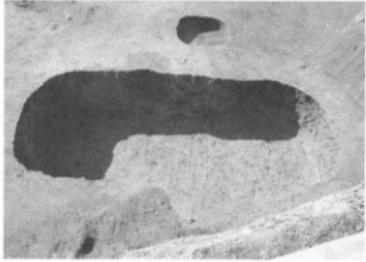
2 SK 1 土坑断面 (南東から)



3 SK 2 土坑完掘状況 (南から)



4 SK 2 土坑断面 (南から)



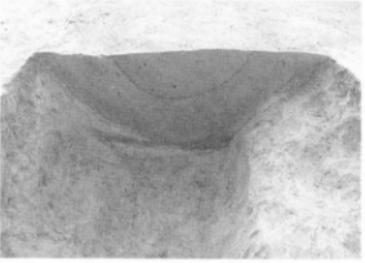
5 SK 4 土坑完掘状況 (北から)



6 SK 4 土坑断面 (東から)



7 SK 5 土坑完掘状況 (南東から)



8 SK 5 土坑断面 (東から)

図版52 土坑 1



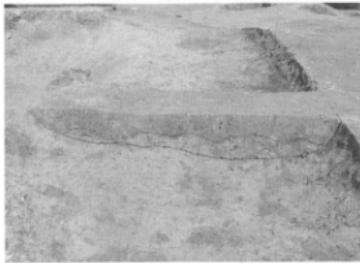
1 SK 6 土坑完掘状況（東から）



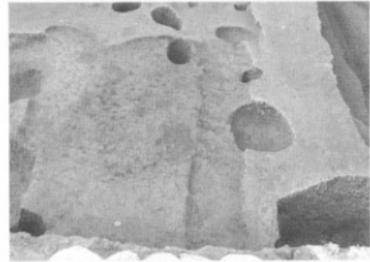
2 SK 6 土坑断面（東から）



3 SK 7 土坑完掘状況（南西から）



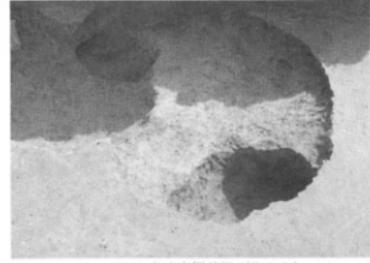
4 SK 7 土坑断面（南から）



5 SK 8 土坑完掘状況（南から）



6 SK 8 土坑断面（西から）



7 SK10 土坑完掘状況（北から）



8 SK10 土坑断面（東から）

図版53 土坑 2



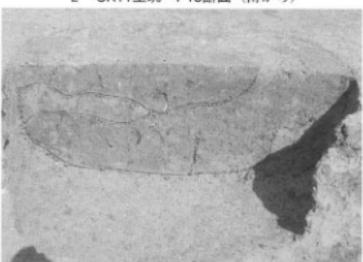
1 SK11土坑・P18完掘状況 (西から)



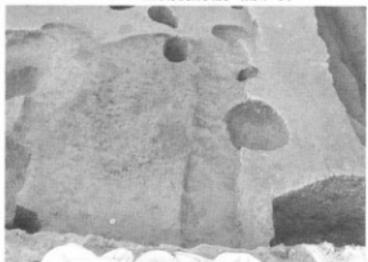
2 SK11土坑・P18断面 (南から)



3 SK12土坑完掘状況 (南から)



4 SK12土坑断面 (南から)



5 SK13土坑・P22完掘状況 (南東から)



6 SK13土坑断面 (南から)



7 P16完掘状況 (南から)



8 P16断面 (南西から)

図版54 土坑・ピット

1 SK14土坑遺物出土状況
(南から)



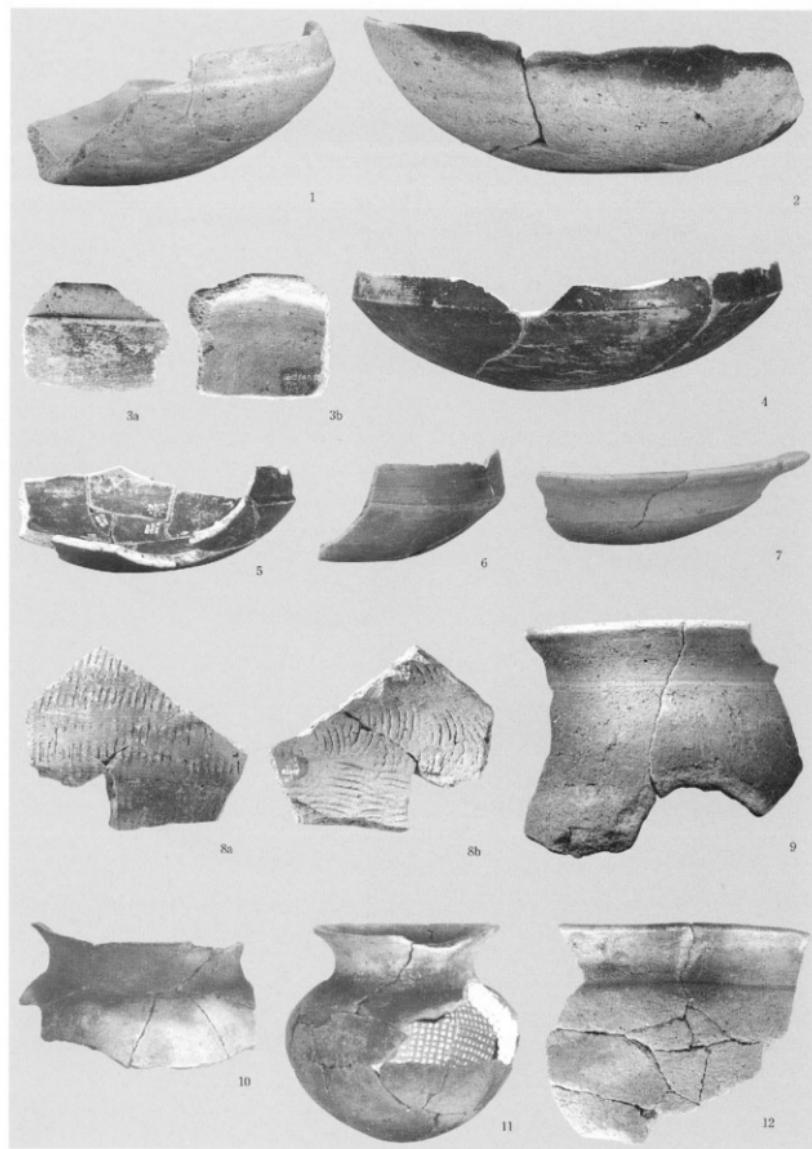
2 SK14・15土坑完掘状況
(南から)



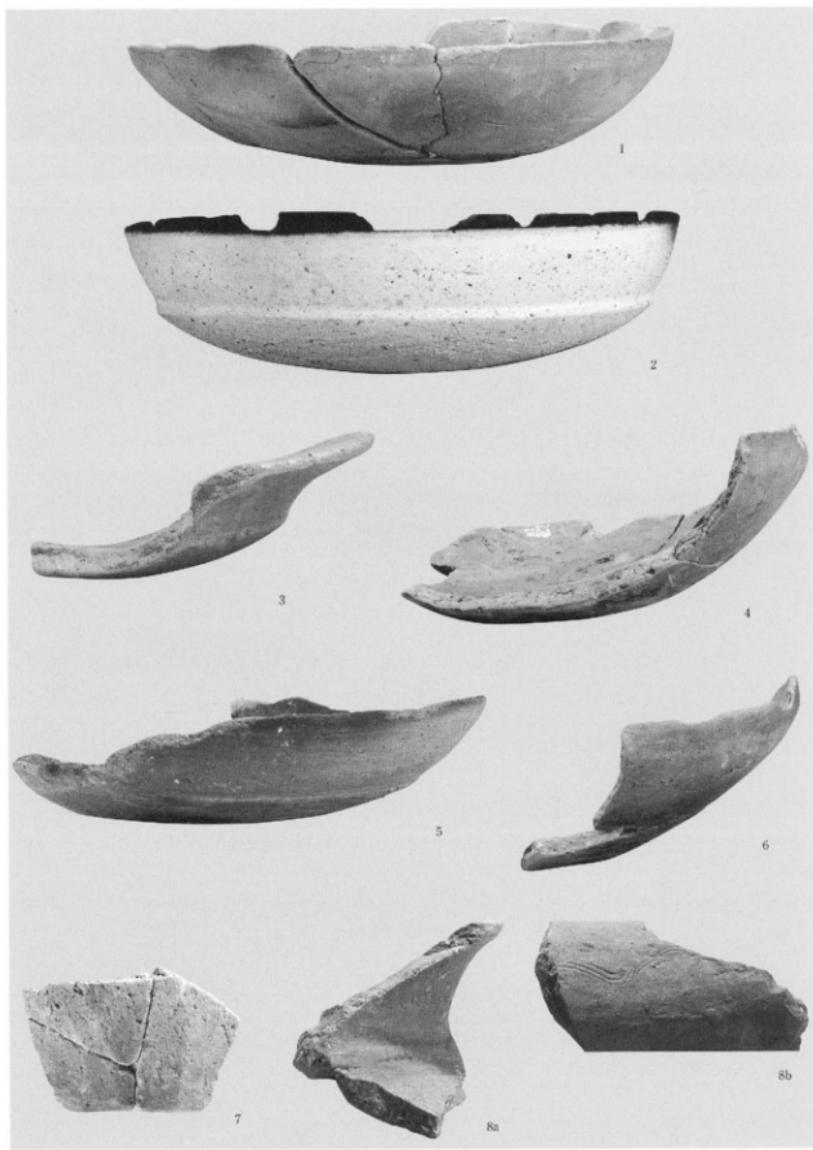
3 SK14・15土坑断面
(南から)



図版55 SK14・15土坑



図版56 西台煙道跡 6次出土遺物 1



图版56 西台烟遗址6次出土遗物2

XI 中田南遺跡第4次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	中田南遺跡（宮城県遺跡番号01272）
調査地点	仙台市太白区中田7丁目216-1、216-2
調査期間	平成19年4月25日～4月27日
調査対象面積	101m ²
調査面積	36m ²
調査原因	個人住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 長島 桂一 主事 加藤 隆則 文化財教諭 工藤 義次郎 志賀 雄一

2 調査に至る経過と調査方法

平成19年2月19日付で、鎌田光博氏より5.5～6.5mの湿式柱状改良を伴う木造2階建て個人住宅建設に伴う発掘届が提出されたため、まず確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は平成19年4月25日より着手し、建物建設予定地に東西12m×南北3mの調査区を設定して調査を行った。その結果、堅穴住居跡などの遺構が検出されたため、引き続き本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

中田南遺跡は、仙台市の南東部に位置し、南側は名取川が隣接している。遺跡はJR南仙台駅の南東約1kmに所在し、国道4号線の旧道付近から同バイパスにかけて、東西500m、南北200mの範囲に広がっている。名取川やその支流によって形成された標高7～8mの自然堤防に立地しており、調査地点の標高は7.3mである。

同遺跡は、これまでに3次の調査が実施され、绳文時代晩期中葉から近世の複合遺跡として知られている。遺跡は特に、古墳時代中期から平安時代前半の集落、鎌倉から室町時代の屋敷跡として理解される。遺跡範囲の北側中央に位置する今回調査地点では、古墳時代から古代のものと思われる堅穴住居跡1軒を検出した。

本遺跡の古墳時代から古代の集落について、第1次調査では「古代Ⅲ期」（＝8世紀前葉）の集落が、前時期とは断続しており、急激な拡大・発展を経て急激に衰退したこと、また、住居や建物方向が真北を指向するという特徴に加え、銅鑄造関連遺物や関東系土器の存在などから一定の規定のもとに形成された計画集落、とりわけ「地方官衙の組織の中で、主として銅製品の生産に関わる役割を果たしていた」集落と理解している。

同時期頃の栗遺跡（2）や清水遺跡（17）、塙腰遺跡（6）は集落遺跡であり、特に前二者は規模が大きくかついわゆる「関東系土器」を伴うことに特徴がある。また安久源訪古墳（18）の横穴式石室（胸張り河原石小口積み、ハの字に広がる前庭部）は、埼玉県北西部から群馬県地域に見られる技術が用いられており、中田南遺跡を含めた名取川右岸地域一帯に、関東地方からの人やモノ、技術や思想などが入り込んだ様相が伺える。

また第1次調査で見られた「古代Ⅲ期」集落の拡大・発展、建物方向の真北への指向性は、清水遺跡でも確認され、条里制地割との関連で提えられている。

奈良・平安時代になると、本遺跡西側で清水遺跡、安久遺跡（3）、安久東遺跡（7）、塙腰遺跡など、また本遺跡や中田北遺跡（8）の東側で後河原遺跡（9）や中田畠中遺跡（13）、戸ノ内遺跡（14）や四郎丸館跡（15）な



番号	遺跡名	種類	立地	時代	番号	遺跡名	種類	立地	時代
1	中田北遺跡	自然遺跡	緩文苑、先生寺、吉塚～中世	自然遺跡	10	白幡中北遺跡	自然遺跡	吉塚～平安	
2	泉池跡	自然遺跡	泉池	自然遺跡	11	白幡北遺跡	自然遺跡	吉塚～平安	
3	安久遺跡	自然遺跡	泉池	自然遺跡	12	白子遺跡	自然遺跡	吉塚～平安	
4	安久東遺跡	自然遺跡	泉池	自然遺跡	13	中田北中北遺跡	自然遺跡	吉良、平安	
5	中田井社遺跡	自然遺跡	古墳、平安	自然遺跡	14	御所遺跡	自然遺跡	古墳～平安	
6	菅原船跡	自然遺跡	菅原	自然遺跡	15	ノノ内遺跡	集落跡、方形周溝墓	自然遺跡	古墳～中世
7	須磨遺跡	自然遺跡	須磨	自然遺跡	16	白丸船跡	古墳墓、水田跡、範跡	自然遺跡	吉崎、平安、中世
8	仁道跡	自然遺跡	仁長	自然遺跡	17	白木遺跡	東馬跡	自然遺跡	穢文苑
9	後岡田遺跡	水田跡	後岡田、野瀬	生、空負～近世	18	安久武跡六塚	古墳	自然遺跡	古墳時代終末

第66図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第67図 調査地点の位置

などが展開している。本遺跡第1次調査では、「古代Ⅳ期」の集落を、鉄製品の生産が行われていること、9世紀代で消滅する集落であること、また円面鏡や石帯などの出土から、居住者は地方官衙と関わりをもった地方有力者であるとしている。また、同調査では遺跡南側で河川跡を検出し、第2次調査では遺跡北東部で小溝状遺構群を検出した。北側に隣接する中田北遺跡でも同時期の竪穴住居跡を検出し、「古代Ⅳ期」集落の河川と居住域、生産域の関係が明らかになりつつある。

4 基本層序

基本層は4層確認した。I層は現代の畠耕作土で、黒褐色粘土質シルトである。層厚は40~60cmあり、SI 1 竪穴住居跡を大きく壊している。II層は明黄褐色、III層はにぶい黄橙色の粘土層で、

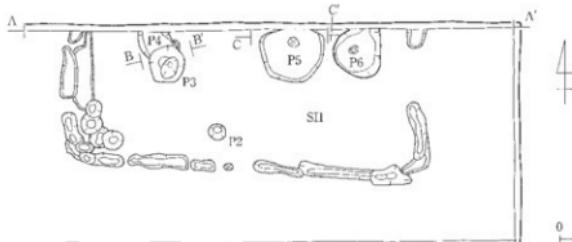
ともに層厚10~15cm。遺構確認面はII層上面である。

5 発見遺構と出土遺物

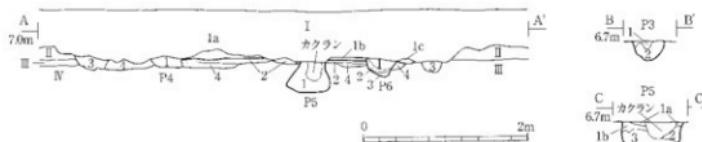
今回の調査では、II層上面で、竪穴住居跡1軒、ピット5基を検出した。



第68図 調査区配置図



第69図 遺構平面図



基本層	上	色	土性	断面		考
				Ⅰ	Ⅱ	
I	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	耕作土上(人骨遺しあり)		
II	10YR6/6	明黄褐色	粘土			
III	10YR7/1	にぶい黄褐色	粘土			
IV	10YR4/6	黒色	シルト	砂を少含む		
層	空	上	色	土性	断面	考
SI 1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	黄色粘土質シルトブロックを含む。		
1b	10YR7/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト			
1c	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト			
2	10YR7/3	にぶい黄褐色	粘土	褐色底、黑色、黄色粘土質シルトを帯状に含む。		
3	10YR2/1	黒褐色	シルト質粘土	褐色地盤上、シルト質粘土(10YR7/3)ブロックを多量に含む。		
4	10YR5/6	明黄褐色	シルト質粘土	加り力灰土、白色粘土ブロックを含む。		
P5-1	10YR3/2	黒褐色	粘土			
2	10YR5/4	にぶい黄褐色	粘土質シルト			
P4-1	10YR2/2	黒褐色	粘土			
P5-1	10YR4/6	灰青褐色	粘土質シルト	褐色ブロックを含む。		
1a	10YR7/6	明黄褐色	粘土質シルト	黑色粘土を少含む。		
1b	10YR7/6	明黄褐色	粘土質シルト	黑色粘土を多量に含む。		
2	10YR7/4	にぶい黄褐色	シルト			
3	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	土を少含む。		
P6-1	10YR2/1	黒褐色	粘土			
2	10YR2/1	黒色	粘土			
3	10YR5/6	青褐色	シルト	鉄化物ブロックを含む。		

第70図 遺構断面図

1) 壁穴住居跡

SI1 壁穴住居跡 調査区東側に位置し、北側は調査区域外に及んでいる。現代の耕作土により遺構上部を大きく壊されており、壁穴自体の掘り込みはほとんど確認できない。断面では遺構堆積土、貼り床を確認したが、平面的に検出できたのは壁溝および掘り方埋土のみである。規模は、検出範囲で東西3.5m、南北1.0mで、おおむね南北方向に主軸をもつ方形プランである。壁溝は幅10~30cmで、長さ30~100cm程度の小溝、あるいはピット状の掘り込みの連続として確認される。このほかにピットを5基検出した。P4~6は、本遺構の堆積土（1層）を掘り込んでおり、住居には伴わない。P2・3の所属は不明である。

遺構堆積土は大別4層である。1a~c層が壁穴住居床上の堆積層で、2層が貼り床である。3層は壁溝堆積土で、4層が掘り方埋土である。出土遺物はなく、時期は不明である。

2) ピット

SI1 壁穴住居跡内で5基検出した。P4~6は調査区域外に及んでいる。先述のように、P4~6はSI1 壁穴住居跡よりも新しく、P2・3は同遺構との新旧関係は不明である。また、P4はP3を切っている。P5は焼土ブロックを、またP6は炭化物ブロックを多く含んでいる。いずれも柱痕跡は見られない。それぞれのピット規模（長軸×短軸×深さ）は、P2=22×20×7cm、P3=45×40×41cm、P4=40×(34)×9cm、P5=80×65×39cm、P6=68×62×8cmである。

遺物は、P5で土師器甕の小破片3点、P6で土師器甕の小破片1点が出土したが、時期の特定はできなかった。

6まとめ

SI1 壁穴住居跡は、出土遺物がなく時期の特定はできなかった。しかしながら、「古代Ⅲ期」以降の建物配置や軸方向に強い規制が見られるというこれまでの成果を参照するなら、本遺構も同期以降の所産と捉えられよう。

また今回の調査により、「古代Ⅲ期」以降の遺構分布がさらに北側に拡大することが明らかとなった。北側に隣接する中田北遺跡や西側の埴腰遺跡でも9世紀代の壁穴住居跡を検出しているが、今後は周辺遺跡を含めた、時期ごとの集落の広がりを抑えていく必要がある。

参考文献

- 浅野克樹 2006「中田南遺跡第3次発掘調査報告書」「前田館跡他発掘調査報告書」
仙台市文化財調査報告書第301集pp.15-21
- 伊藤信雄 1975「仙台市中田町 安久遺跡発掘調査略報」仙台市中田第一土地区画整理組合
- 太田昭夫 1994「中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査－」仙台市文化財調査報告書第182集
- 工藤哲司 2006「中田北遺跡発掘調査報告書」「前田館跡他発掘調査報告書」
仙台市文化財調査報告書第301集pp.23-32
- 丹羽 茂 1981「清水遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書－V－」宮城県文化財調査報告書第77集pp.3-540
- 三塚 靖 1995「中田南遺跡第2次調査報告書」仙台市文化財調査報告書第206集
- 渡部弘美 2004「埴腰遺跡」仙台市文化財調査報告書第277集



1 遺構検出状況（東から）



2 遺構完掘状況（東から）

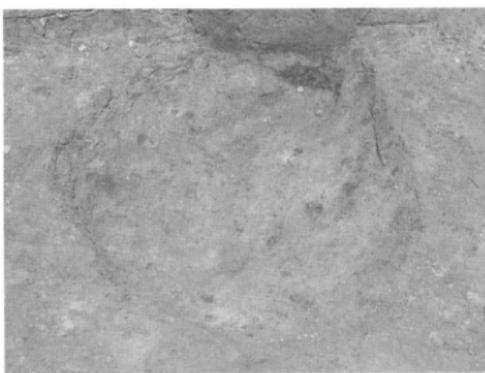
図版58 調査区全景



1 SI 1 積穴住居跡検出状況
(南から)



2 SI 1 積穴住居跡完掘状況
(南から)



3 P 5 完掘
(南から)

図版59 積穴住居跡・ピット

XII 茂ヶ崎城跡発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	茂ヶ崎城跡（宮城県遺跡番号01119）
調査地點	仙台市太白区茂ヶ崎2-1
調査期間	平成18年6月18日～6月21日、7月28日～31日
調査対象面積	400m ²
調査面積	72m ²
調査原因	野草館の改築、園路広場の整備、擁壁の設置に伴う切土など
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主任 長島 案一 文化財教諭 志賀 雄一

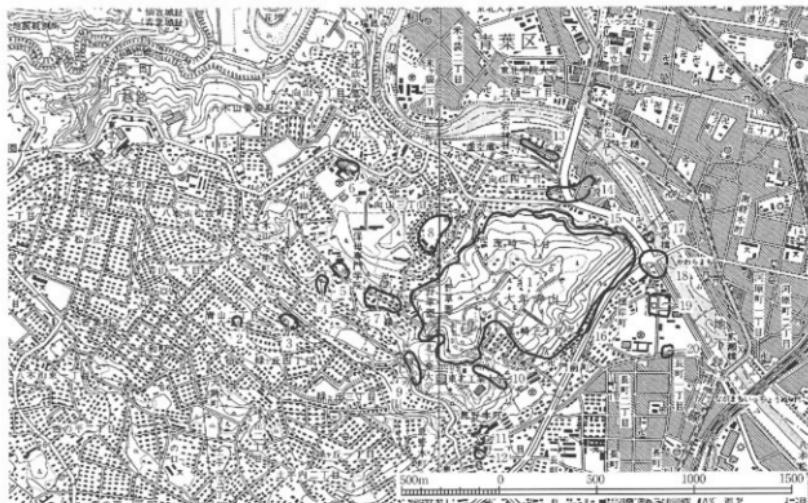
2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年4月20日付けで、仙台市長梅原克彦氏より野草館の改築、園路広場の整備、擁壁の設置に伴う切土などの工事に伴う発掘届が提出されたので、確認調査を実施した。確認調査は、平成19年6月18日から実施し、建物や擁壁の建設予定地にそれぞれ14箇所の調査区を設定して調査を行った。年代の新しい溝跡のみ検出されただけであった。これにより当初の建築計画の通り野草館、擁壁等の建築に着手することになった。

擁壁の工事が6割ほど進行した7月28日に、野草園長より文化財に該当するものの発見があった旨の連絡があり、佐藤調査係長、長島主任が現地に赴き確認した。工事業者が掘削中に板石がありそれを撤去したところ、人骨が出たし、中に人骨の一部が見られた。上に板石が3枚並べられていたとのことである。現地では近接する箇所まで擁壁のベースができあがった状況で、緊急に発掘調査を実施した。なお確認調査を実施した際には、工事用車両の出入口と職員駐車場となっていたため、調査を実施できなかった箇所である。

3 遺跡の位置と環境

当該地は、仙台駅の南方約3kmに位置にあり、仙台市街地東南部の大年寺山あるいは茂ヶ崎と称される丘陵上にある。大年寺山の名称は、元禄4年(1691)開基の仙台藩主伊達家の菩提寺である黄檗宗大年寺に由来する。大年寺は往時には広大な寺域を有していたが、明治に衰退し、伽藍のほとんどは失われ、寺域の中心部に土塁で囲まれた方形の区画(200m×150m)を残のみである。この区画のすぐ東側には、「茂ヶ崎城」の標柱が立つ。丘陵最頂部は仙台放送の敷地で、その北東側にはNHK大年寺テレビ放送局がある。丘陵北西側には仙台市野草園、南側は東北工業大学二ツ沢キャンパス、東側には茂ヶ崎町地があり、後世の変更が著しく、茂ヶ崎城の城域がどこまで広がるのかは不明である。これまで遺構の状況を明確に示した研究は無かったが、旧仙台放送南側、同敷地北東側(NHK大年寺テレビ放送局との境)に二つの空堀跡が残ることが確認されている。この二本の空堀で区画された旧仙台放送の敷地が最も標高が高く、茂ヶ崎城の主郭(本丸)であると考えられている。その他、旧仙台放送側の西側に二段にわたるテラス状の地形が観察される。また、現在「ロータリーの丘」と称する公園に南と東で接する道路は、緩くカーブを描く付近の他の道路とは異なり、直角に折れ曲がっている。本来は堀であったものを拡張あるいは掘り下げて道路とした可能性がある。この公園も一つの曲郭であった可能性がある。(「仙台市史特別編7城館」による)



番号	並海名	種別	立地	時代	番号	並海名	種別	立地	時代
1	瓦ヶ崎城跡	城跡	丘陵	平安	11	柳野堅城跡	城跡	丘陵斜面	平安～平安
2	曾山二丁目城跡	急斜坡	丘陵斜面	彌生、平安	12	柳野一丁目遺跡	遺跡	丘陵斜面	魂文、奈良、平安
3	曾山二丁目城跡	急斜坡	丘陵斜面	奈良、平安	13	曾山東部城跡	城跡	丘陵斜面	奈良～東朝日
4	二ツ沢城跡	急斜坡	丘陵斜面	魂文	14	曾山北側城跡・遺跡	城跡	丘陵斜面	古墳、奈良
5	八木沢城跡	急斜坡	丘陵	魂文、奈良、平安	15	大字山城跡・遺跡	城跡	丘陵北側斜面	古墳
6	河内西町城跡	敷石場	丘陵北側斜面	魂文	16	小字子（後生十字）	土手	丘陵、波丘	北晉
7	曾ヶ丘城跡	敷石場	丘陵斜面	魂文	17	曾山寺跡	城跡	段丘	古墳
8	曾ヶ丘城跡	敷石場	丘陵	魂文、奈良、平安	18	柳野城跡	城跡	段丘	魂文、平安
9	二ツ沢城跡	敷石場	丘陵西側斜面	古墳	19	曾家古墳	墓地	自然斜面	古墳の
10	深ヶ崎城跡	敷石場	丘陵斜面	古墳、奈良	20	小丸家古墳	古墳	自然地帯	古墳

第71図 遺跡の位置と周辺の遺跡

『古城書上』によれば、東西八六間、南北六一間で、本丸と二の丸の間が二八〇間で山廻きの平地とし、二の丸は東西三八間（八三間とする写本もある）・南北四〇間とするが、二の丸の規模を記さない写本もある。城主は名取郡北方三十三郷旗頭の栗野大膳とする。一方、「残月台本荒秋」は、城の名前を「野出口山城」と伝え、島津陸奥守が住んだとするが、詳細は不明である。『封内名蹟志』では、応永年中（1394～1428）に栗野大膳がいたとしている。

これまでの調査では、平成3年にNHK放送所の南隣接地点において共同住宅建設に伴う確認調査が実施されたが、遺構や遺物は検出されなかった。

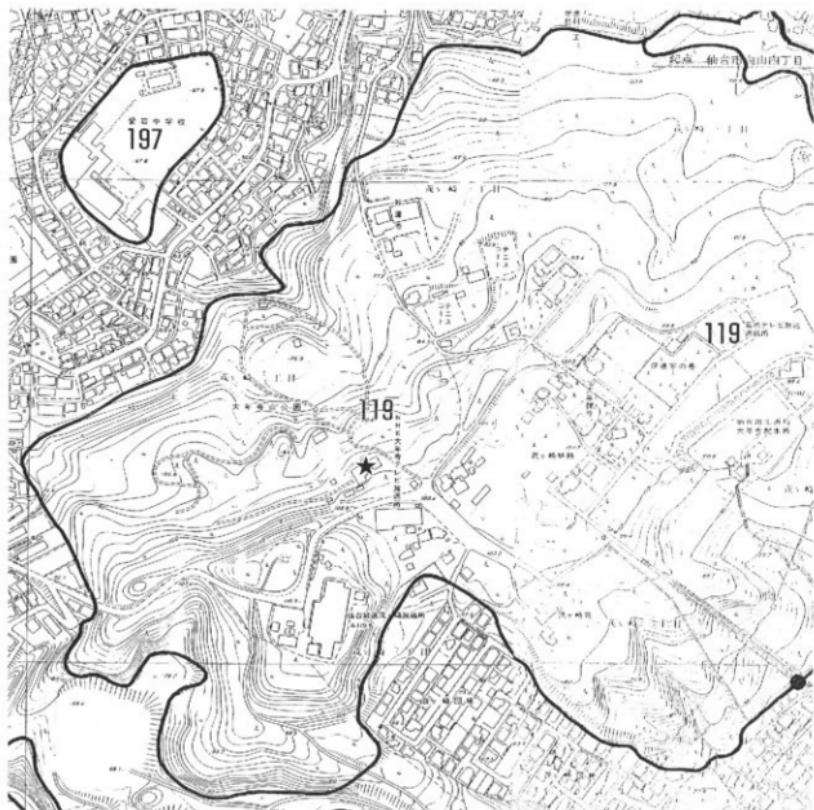
4 基本層序

調査地点は、中央部から北側が大きく削平されている。また、調査区北側は既存建物による影響を受け、I層とII層の大部分が削平されている。また、調査区南側は盛土が40cm前後あり、I層は樹木根が多く残存している。調査区の中央、削平部分の断面に沿って調査を行ったところ、基本層は5層に分けられた。

I層：10YR3/4暗褐色シルト。 層厚は約55cm。

II層：10YR5/6シルト質粘土。 層厚は約190cm。

III層：10YR8/3浅黄橙色粘土 層厚は約8cm。底面に酸化鉄を含む。



第72図 調査地点の位置

IV層：10YR7/6明黄褐色粘土 層厚は約35cm。

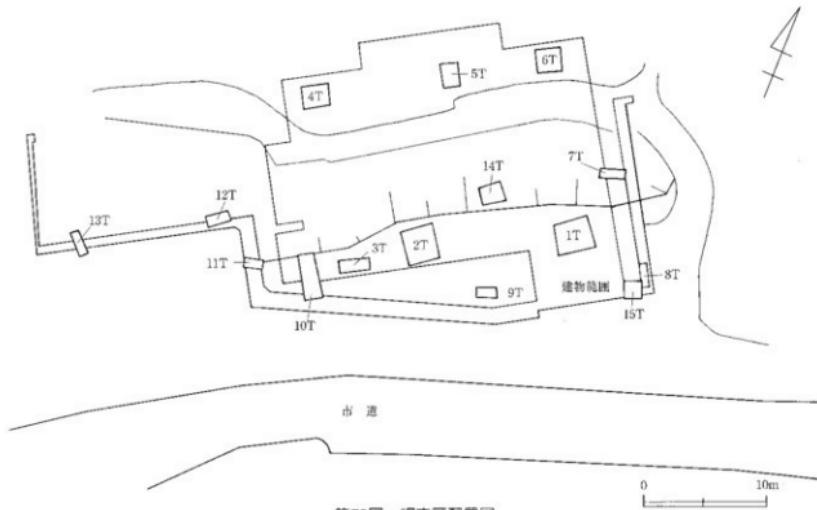
V層：10YR7/6明黄褐色粘土 層厚は1m以上。拳大から人頭大の礫を多く含む。

5 発見遺構と出土遺物

II層上面で壺棺1基、溝跡1条が検出された。

1) 溝跡

SD1溝跡 10トレンチの中央部、II層上面で検出された。南北に伸びる幅45cm～65cmの溝跡であり、南から北へ傾斜する斜面に沿って下りながら延びている。北側は旧野草館あるいは園路工事により削平され、消失している。溝の断面形はU字型を呈すが、堆積土は基本層位I層と同じで、年代のさかのほる遺構とは考えられない。遺物は



第73図 調査区配置図

出土しなかった。

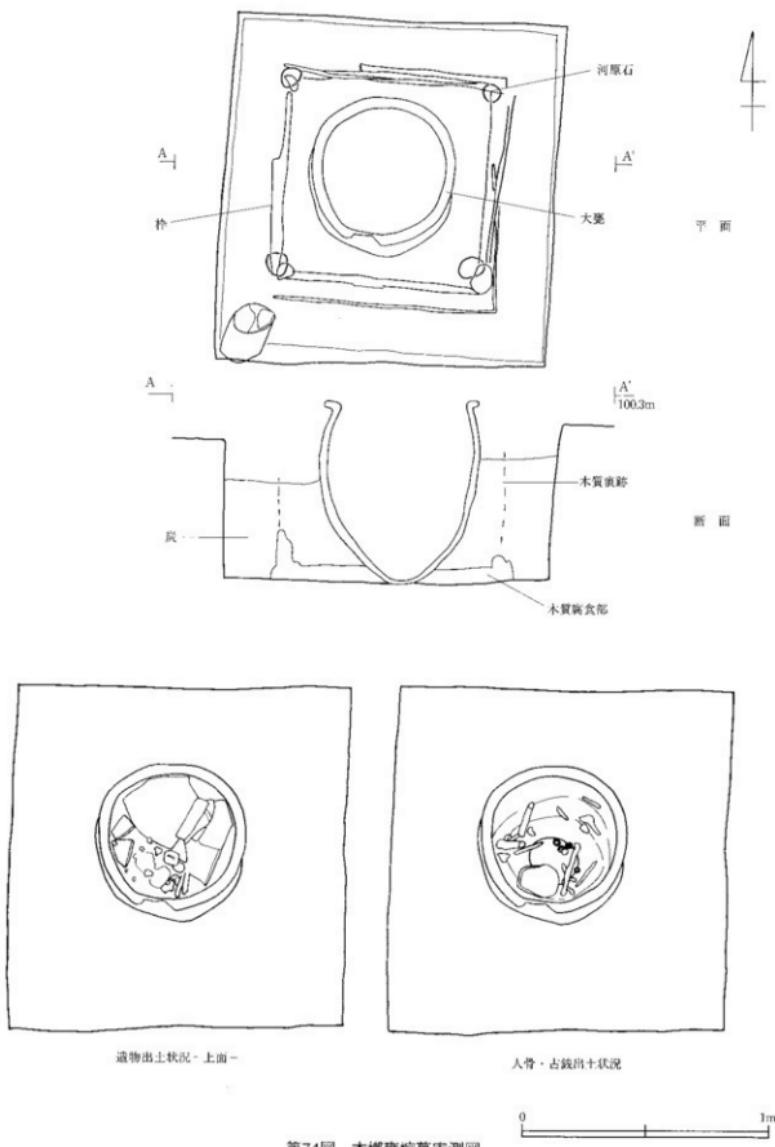
2) 木槧壺棺墓

15トレンチで検出された。基本層第II層が大きく削平され、現表土より既に2.3mほど低くなっていたが、本来は上方より掘り方が連続していたものと推定される。発見された段階では、陶器の蓋が割れて大甕内に落下していたが、本来は大甕の上に置かれていたものである。さらにその上方に粘板岩製の板石が3枚敷かれていた。

掘り方は検出した上面で135cm四方、深さ57cmで、大甕の高さが77cmであることから、それ以上の深さを有していたと推定される。この掘り方底面の四隅に直径8~10cm程の扁平な河原石が敷かれ、その上に一辺85cmの箱が置かれていた。箱は横方向の板材が組まれ、底面には棒が残っている。木質は脆弱で、原形を留めていない。この中に見焼きの大甕が入れられ、箱と掘り方の中には炭が充填されていた。大甕は口径62cm、器高77cmで、緑色の器面に白色の釉が大きく垂れている。内部には落下した蓋と少量の石灰が認められた。その下に成人男性と見られる人骨が南西方向を向いて入れられている。人骨は甕の底面から25cm程の厚さの中で、上方から崩れて重なる状況で重なっていた。人骨の右前に雲母片(図版63-3)が出土し、甕の底面には5枚の銅錢が敷かれていた。少量の白色粘土が堆積していたが、その中に木製の数珠玉が95個(図版63-5・6)含まれていた。(※人間の脂肪分の可能性があるという)

3) 出土遺物

甕棺から、数珠玉、人骨、古銭、不明金具が見つかった。出土した甕は施釉された陶器である。大型の甕で、器高76.0cm~77cm、口径60.5cm~62cm、胴径64.6cm、底部内径16.5cm~17cm、底径20cmである。口縁は平口に帯状に外に折れている。頸部の外面は直線的に屈曲し、内部はそれに対応するよう緩やかに折れ曲がる。肩部は丸味



を帯び、接合に伴う4段ほどの凹凸がある。内面には接合痕が釉の上からも2カ所観察される。底部は平坦で回転糸切り後、周縁部のみにヘラケズリによる調整が入れられている。釉は5Y6/4オリーブ黄から7.5Y2/1黒にかけての濃緑色を呈し、その上から白濁した7.5Y8/2灰白色の海鼠釉がかけられている。仙台市内北部の台原・小田原丘陵で生産された堤焼きの製品である。1830年代以降の製品と見られる。

出土した人骨は1体分であり、部位が特定できる骨は、頭骨（図版63-8a、8b、8c、8d）、下顎骨（図版63-9）、左上腕骨（図版63-12）、左大腿骨（図版63-13）などである。この個体は男性で、背骨のゆがみ等から50~60代以上と考えられる。また鎖骨の大きさや肩軸が広く大柄で、身長は160cm後半と推測される。外傷の跡等は確認できなかつたが、歯が折れた跡や手首の骨折又は脱臼の跡が確認された。

水晶玉が13個（図版63-5）、木製の玉（図版63-6）が完形80個の計93個、木製の玉の破片15個出土した。また、古銭が壺底部に5枚付着していた。いずれも保存状態が悪く、種類等は明らかでない。さらに、古銭の破片と指の骨と思われる骨片とが接着した状態（図版63-7a、7b）で出土した。遺物の全容は明らかでないが、埋葬に伴うものであると考えられる。

6まとめ

壺は江戸時代末頃の堤焼きと見られる。今回発見された木郭壺棺墓は19世紀中頃の墓である。この時期の壺で調査された例は少なく、当方では青葉区北根にあった新妻家墓地のみである。新妻家墓地でも堤焼きの壺が壺棺として用いられ、明和7年（1770）から慶応2年（1866）までの5基が存在した。それらはいずれも素焼きのもので、今回出土した施釉されたものとは大きく異なる。

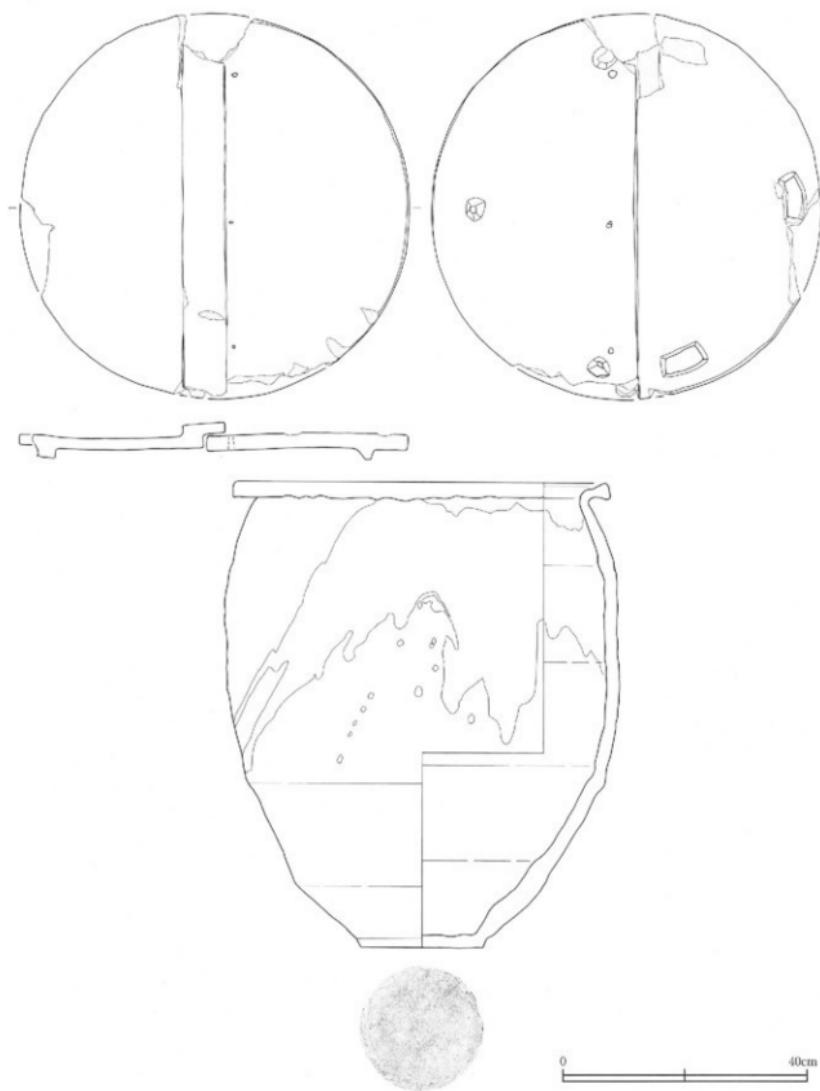
正徳元年（1711）7月に埋葬された伊達家4代藩主綱宗の墓所の善應殿からは、常滑焼の壺（口径63.4cm、器高80cm）が木製の箱（一边90cm四方、高さ110cm程）に入れられ石室内に納められていた。

今回の発見は江戸時代にこのような大壺を壺棺として用い、木箱に入れて埋葬する葬制（木郭壺棺墓－図説江戸考古学研究事典－）があり、幕末の19世紀中頃まで継続していたことを示す貴重な例である。

今回の被葬者については、施釉された壺は武士階級である新妻家の墓地からも出土しておらず、丁寧に掘り方を木炭で埋めていることからも、一定の身分を有した者と考えられる。野草園内には元文5年（1740）銘のある石塔があり、僧侶の墓であると言われている。その場所には大千院という大年寺の子院があったと伝えられている。江戸時代の大年寺の様子が描かれた「両足山志」（1734作成）－仙台市博物館蔵－によれば、今回の墓があった地点には「四天王院」という子院が所在していたようである。断定することは難しいが、周囲からは他に墓は発見されていないことから、単独で葬られた僧侶の墓の可能性を考えておきたい。

＜参考文献＞

- 古泉弘2001「Ⅳ江戸の墓と葬制 2 墓葬形式」『図説江戸考古学研究事典』江戸遺跡研究会編 pp.142-146
仙台市史編纂委員会2006『仙台市史 特別編7 城館』



出土地点								分類	法 則 (cm・g)	特徴、備考 (調整、素材、底地、文様等、時間)	写真 16版
鉢中	差級	番号	遺物名	遺物場	取上No.	種別	器種				
1	12	15T	漆桶	漆桶		瓦質土器	蓋	63.0	2.0	特徴、備考 (調整、素材、底地、文様等、時間)	63-2
2	1-1	15T	漆桶	漆桶		陶器	蓋	76.6	60.5	具さは直往の蓋 三箇所に斜穴あり	63-1

第75図 出土遺物



1 10トレンチ完掘状況
(南から)



2 14トレンチ基本層序
(北壁)

図版60 10・14トレンチ



1 掘り方検出状況（南から）



2 発見直後（東から）



3 蓋石



4 墓棺内部 1



5 墓棺内部 2

図版61 木桿塚墓 1



1 断面状況（北から）



2 塚棺 痕跡（北から）



3 木郭残存状況（南から）

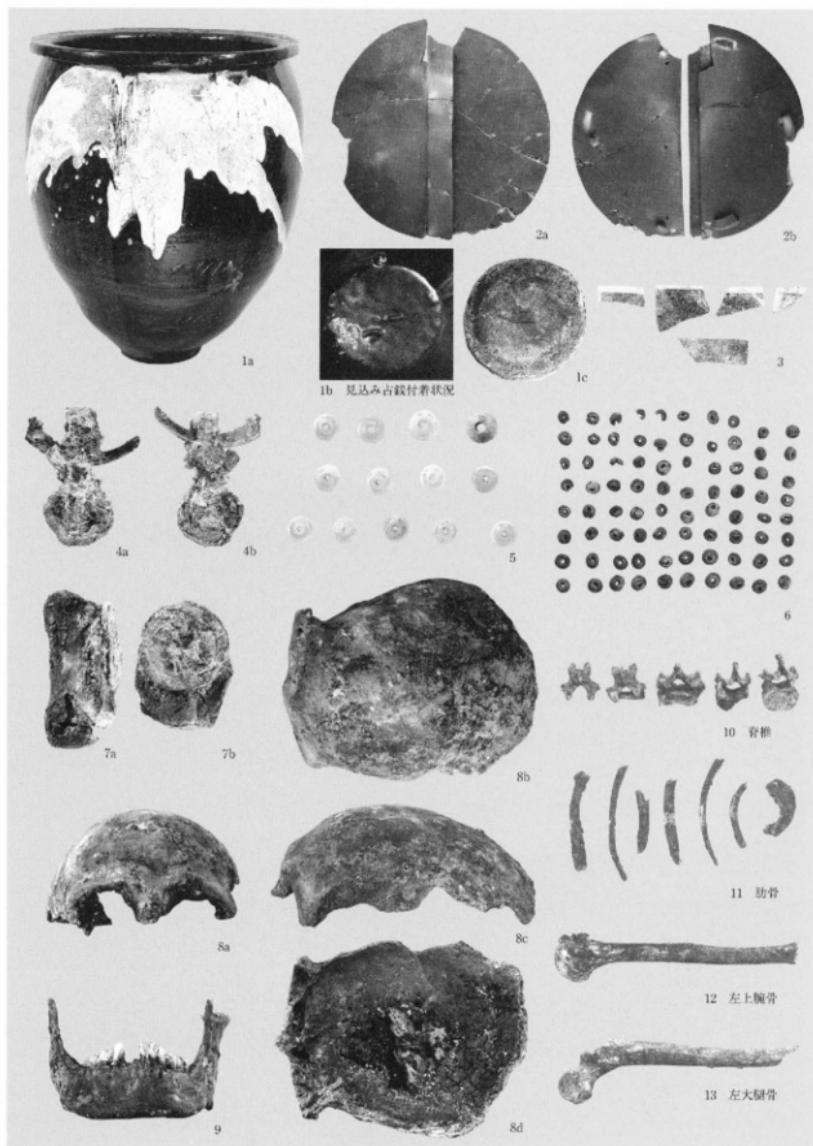


4 河原石設置状況（南から）



5 完掘状況（南から）

図版62 木柳塚墓2



図版63 出土遺物

XIII 伊古田B遺跡第2次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	伊古田B遺跡（宮城県遺跡番号01480）
調査地点	仙台市仙台市太白区大野田字イコタ（63ブロック4ロットの一部、5ロット）
調査期間	平成19年7月17日～8月10日
調査対象面積	390.44m ²
調査面積	250m ²
調査原因	共同住宅建築
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 鈴木 隆 文化財教諭 志賀 雄一 臨時職員 森田 賢司

2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成17年10月18日付けで、地権者森優氏より、深さ5mの柱状土壤改良を伴う鉄筋コンクリート造7階建共同住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出されたので、確認調査を実施し、その上で必要な場合は本調査を実施する旨を回答した。確認調査は、平成17年11月7日～8日に実施した。建物建築予定地の東端に東西13m×南北12mの調査区を設定して調査を行ったところ、調査区内から遺構が検出され、本調査が必要と判断されたため遺構の掘り込みは行わず、確認調査を終了した。この確認調査の結果を受けて、平成19年7月17日～8月10日に建物建築予定地に東西25m×南北10mの調査区を設定して、本調査を実施した。

3 遺跡の位置と環境

伊古田B遺跡は、仙台市南東部の地下鉄富沢駅から南東方向約200mにあり、名取川と笊川によって形成された自然堤防上に立地している。調査区付近の標高は12m前後である。周辺には自然堤防は古い時代に形成され、縄文時代以来多くの遺跡が密に存在している。

縄文時代早期では下ノ内遺跡で竪穴住居・落とし穴、中期では六反田遺跡、下ノ内遺跡で竪穴住居跡、後期では六反田遺跡で竪穴住居跡、大野田遺跡で環状配石遺構が発見されている。周辺の自然堤防上では縄文時代早期以来、活発な人間活動が行われていたことが窺われる。弥生時代では、自然堤防上のドノ内浦遺跡では後期の竪穴遺構や土塙墓・壺棺が、後背湿地の富沢遺跡では中期から後期の水田跡が重層的に発見されている。古墳時代では、前期、後期の竪穴住居跡が検出されている。大野田古墳群では中期から後期の前方後円墳や円墳があるほか、石棺墓、木棺墓なども発見されている。奈良・平安時代では、各遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。伊古田遺跡では、縄文時代後期中頃の遺物包含層と古墳時代・奈良時代・平安時代の集落跡が確認されている。縄文土器等の多量の遺物が確認されており、特に仙台市指定有形文化財指定の4点の上個が注目される。

また、古墳時代から平安時代のおもな遺構としては、18軒の竪穴住居跡と掘立柱建物跡1棟が発見されている。伊古田B遺跡では、平成16年度に第1次調査が行われ、溝跡、小溝状遺構、土坑、河岸跡等が検出されている。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	伊古山遺跡	教示地	自然埋蔵	吉備、奈良、平安	27	下ノ内須道跡	集落跡、水田跡	自然埋蔵	岡文早~前後、昭生~中丘陵
2	芦ノ内須道跡	集落跡	方墳	岡文早~、平安	28	六反庄道跡	生息跡	自然埋蔵	高尾~中~後、奈生~平安、近世
3	二神事道跡	集落跡	方墳	岡文早~中、平安	29	大寺原古墳群	円墳	自然埋蔵	古墳
4	三神古墳群	円墳	丘陵	古墳時代	30	春日古墳	自然埋蔵	古墳中	
5	宮代村跡	集落	丘陵地帯	古墳、奈良、平安	31	袋川遺跡	詔塗場	自然埋蔵	吉備、平安、奈良
6	手手内須道跡	集落跡	丘陵斜面	古墳木	32	宿前遺跡	先史跡	自然埋蔵	岡文、奈良、平安
7	土手内須道跡	集落跡	丘陵	岡文~平安	33	元治道跡	先史跡、本田跡	自然埋蔵	奈生、奈良~近世
8	芦手内須道跡	集落	丘陵南斜面	古墳後、奈良	34	大寺道跡	先史、集落跡	自然埋蔵	岡文後、宿中~中、吉備~平安
9	西台荒野跡	古跡	丘陵地	吉備慶	35	三ノ塚道跡	先史跡、里塚跡	自然埋蔵	岡文後、奈生~中丘陵
10	原庄道跡	教示地	丘陵地	吉備生、吉備、古墳、平安	36	星屋道跡	先史跡、正教跡	自然埋蔵	奈良~中世
11	原尻古墳	古墳	丘陵地	吉備慶	37	北屋根道跡	散居地	自然埋蔵	奈良、平安
12	原尻古道跡	教示地	丘陵	平安	38	長町原古道跡	散居地	自然埋蔵	古墳
13	御津原古道跡	散居地	丘陵風	奈良、平安	39	長町原古道跡	散居地	自然埋蔵	奈良、平安
14	御津原古道跡	円墳	丘陵風	吉備	40	嗣久道跡	散居地	自然埋蔵	奈良、平安
15	有ノ内須道跡	教示地	自然風	強生、平安	41	芦丸(今)古道跡	散居地	自然埋蔵	奈良、平安
16	綱石船入道跡	自然跡	自然風	岡文、奈良、平安	42	夷利氣(今)道跡	集落跡	自然埋蔵	強生、乙原末、奈良初
17	當穴(今)台造跡	教示地	自然風	岡文、平安	43	瓦子原道跡	住居跡、要松墓	自然埋蔵	岡文、那中、古墳
18	福ノ内須道跡	教示地	自然風	吉備慶	44	面山道跡	官道跡、寺宝院、後守寺	自然埋蔵	岡文~朝、那中~古墳
19	銘治船入道跡	教示地	自然風	岡文、奈良、平安	45	北日道跡	城跡、松原寺、水門跡	自然埋蔵	岡文、那中~近世
20	諸ノ内須道跡	自然風	自然風	平安	46	矢爭道跡	散居地	自然埋蔵	木造~平安
21	謀代水道跡	教示地	奈良、平安		47	時造道跡	散居地	自然埋蔵	奈良、平安
22	山口道跡	集落跡、水田薄	地形、削除	奈良、少希、当空~中世	48	匂ノ上ノ道跡	匂の跡	自然埋蔵	古墳~平安
23	琵琶道跡	集落跡	水田薄	散居地	49	久ノ上ノ道跡	水田跡	被覆地	古墳~中世
24	泉崎古道跡	集落跡、水田薄、墓地	岡文~古墳、平安、奈良	50	久ノ上ノ道跡	散居地	自然埋蔵	古墳~中丘陵	
25	下ノ内須道跡	集落跡	岡文~中頃、奈生~中世	51	久ノ上ノ道跡	散居地	自然埋蔵	古墳~平安	
26	伊古山道跡	自然風	岡文後、古墳~平安	52					

第76図 遺跡の位置と周辺の遺跡

4 基本層序

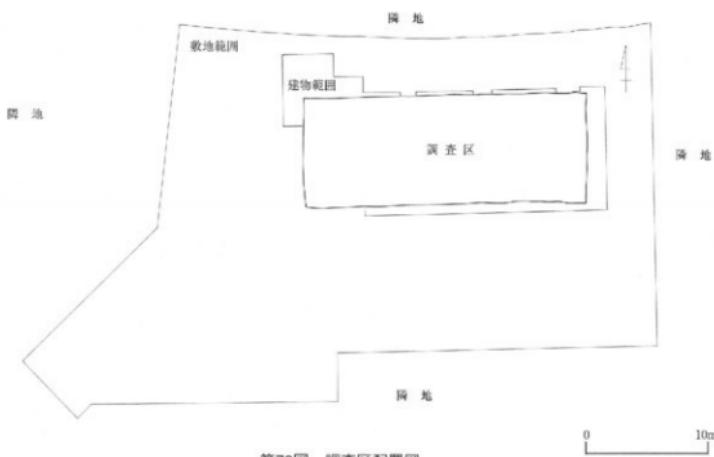
北壁の東端と中央部の2箇所で深掘を行い土層を観察した。I~V層は富沢駅周辺の調査での基本層に対応する。土色、土性の違いから、I層は3層に、V層は2層に細分した。Vb層より下の層については富沢駅周辺の調査での基本層に対応するものがないうため仮の名称をつけ、A~G層とした。SD1溝跡以外の遺構はすべてVa層上面で検出した。V層は、近隣の調査において古墳時代・古代の遺構が検出されている層である。

5 発見遺構と出土遺物

V層上面もしくはIV層上面で溝跡を1条 (SD1)、V層上面で、2時期の小溝状遺構 (小溝1群、小溝2群)、溝跡を1条、土坑を2基、竪穴住居跡を1基、ピットを40基、性格不明遺構1基 (SX1) を検出した。また、I



第77図 調査地点の位置

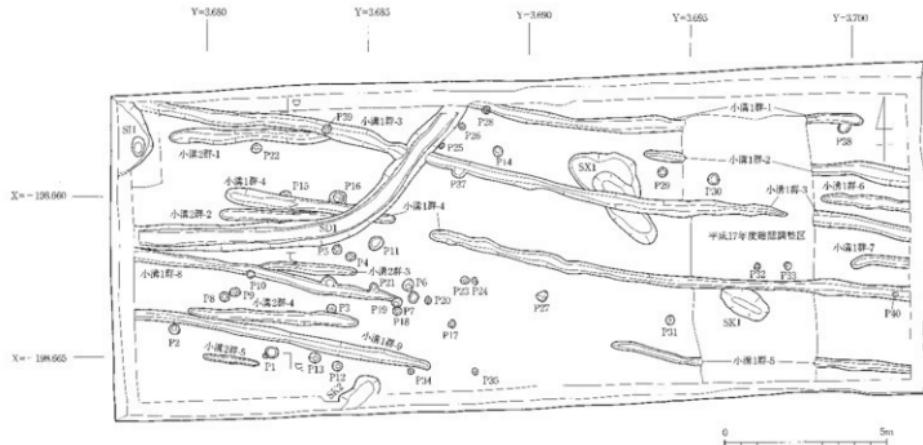


第78図 調査区配置図

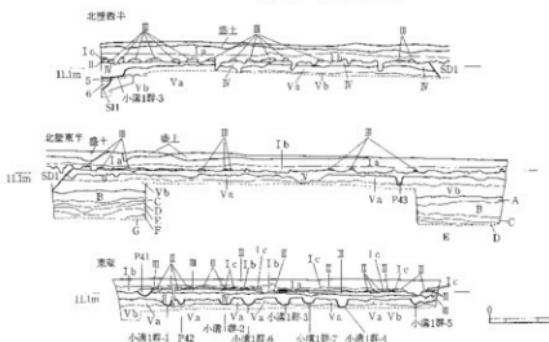
層上面から明治後半の磁器椀1点(図版64-2)、IV・V層上面、ピット、小溝跡等から土師器片が平箱1/2程度、砾石器(第84図-1)が1点出土した。

1) 壴穴住居跡

SI 1 壴穴住居跡 調査区北西部で検出され、西壁に接し調査区外に広がっている。住居の規模は不明だが、調査区内では北東側の辺が170cm、南東側の辺が140cm検出された。調査区西壁から遺構東端までの長さは約1mである。掘り込み面から底面までの深さは70cm~80cmである。掘り込み面はVa層上面だが小溝遺構1群に切られており、小溝遺構1群よりも古い時代の住居であると考えられる。遺構内にピットが1基(SI 1-P 1)検出された。堆積



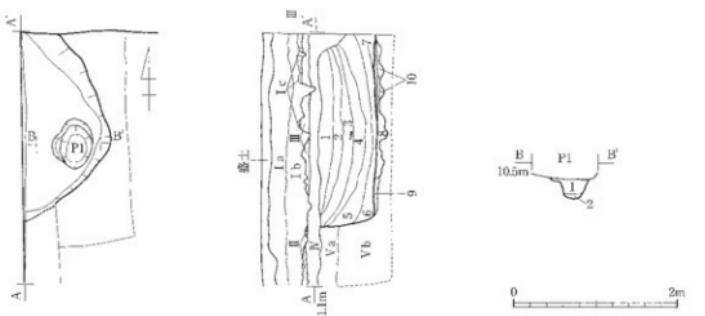
第79図 遺構配置図



地層番号	土色	土性	圖	考
I-a	10YR5/3	にじい・黄褐色	粘土質シルト	現代堆積土。
I-b	10YR5/4	にじい・青褐色	粘土質シルト	現代堆積土。調査区半分に分布。
I-c	10YR5/3	にじい・黄褐色	粘土質シルト	炭化物をやや量に含む。
II	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	炭化物をやや量に含む。
III	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	腐殖化度が歩留り含む。
IV	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	上部にマンガンが発達する。
V-a	10YR3/4	暗褐色	泥質シルト	
V-b	10YR4/4	褐色	シルト質砂	
A	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	
B	10YR4/4	褐色	シルト質砂	颗粒砂 (10YR4/2) をまだら状に含む。
C	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	
D	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	
E	10YR4/4	褐色	泥質シルト	
F	10YR3/4	暗褐色	泥質砂	1~3mmの円錐を少量含む。
G	10YR4/4	褐色	細粒砂	

第80図 調査区断面図

土は10層に分けられるが、床面は6層下面と考えられる。遺物は上層器片が数点検出された。住居が完全に埋没した後にIV層が堆積していることから、IV層堆積時に既に廃絶していたものと考えられる。



層位	土色	土性	備考
SI1-1	10YR3/4 鮎褐色	砂質シルト	炭化物を歩量含む。
2	10YR5/5 深褐色	粘土質シルト	炭化物をやや多量に含む。
3	10YR3/4 黒褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。
4	10YR2/3 黄褐色	粘土質シルト	炭化物をやや多量に含む。
5	10YR5/4 深褐色	砂質シルト	炭化物を少量化。
6	10YR2/3 深褐色	粘土質シルト	3~10cmのV形層アーチを少量含む。
7	10YR3/3 深褐色	粘土質シルト	シルト質シルト
8	10YR3/3 深褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む。
9	10YR4/6 黄褐色	砂質シルト	粘土質シルト (10YR4/6) をまだら状に少量化。
10	10YR3/3 深褐色	粘土質シルト	1~2cmの砂質シルト (10YR4/6) を歩量含む。
SI1-P1-1	10YR4/4 紫色	粘土質シルト	炭化物を含む。SI1-9層プロフを含む。
2	10YR3/4 深褐色	シルト質シルト	

第81図 SI1 穴住居跡平・断面図

2) 溝跡

SD 1溝跡 北壁と西壁に接し、西壁から約6mは東西方向に伸び、さらに4mほど北東方向に伸び北壁に接している。小溝状構造（1群、2群）を切っている。掘り込み面は、上部を天地返しにより搅乱されているため不明であるが、Ⅲ層上面もしくはⅣ層上面と考えられる。検出面での溝の幅は約80cm、深さは約50cmである。断面形は橢型を呈するが、底面近くでは壁が垂直に立ち上がる。底面は平坦である。堆積土は6層あり底に近づくほど細砂を含んでいるので、水路の跡であると考えられる。出土遺物は土師器が数点である。

3) 土坑

SK 1土坑 調査区東部で検出された。小溝1群-4を切っている。平面形は不整な楕円形であり、遺構検出面での大きさは、南北80cm、東西110cmである。深さは約80cmで、底面は東西に細長い楕円形である。堆積土は4層にわけられ、土師器片が数点出土している。

SK 2土坑 調査区南側で検出された。北東から南西方向に広がり南西側は南壁に接する。平面形は不整な楕円形で、検出面での規模は南北110cm、東西70cmである。深さは20cmである。堆積土は1層で、出土遺物はない。

4) 小溝状遺構群

調査区全面にわたって東西方向に伸びる小溝が14条検出された。方向と重複の状況から、以下のように2つの小溝状遺構群に分類した。

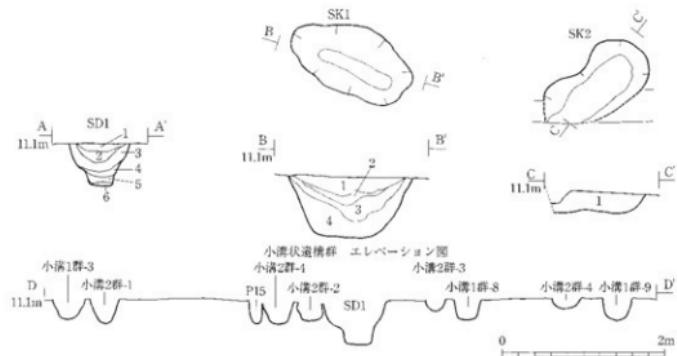
- ① 1群・・調査区全面をほぼ東西方向に横切り比較的規模の大きいもの、またそれらと同じ方向に延びるもの。
- ② 2群・・調査区西側1/3で検出され、1群よりもやや北東から南西方向に延びており、1群に切られるもの。

小溝状遺構1群 調査区全面にわたって9条検出された。そのうち比較的規模の大きい溝は5条あり、1m50cm～2mの間隔で検出された。検出面での幅は30cm～50cm、深さは約20cm～30cm、断面形は船底形を呈する。さらに調査区東側では、比較的小規模な溝が3条検出され、規模の大きいものを含めると30cm～50cmの間隔で検出された。検出面での幅は約30cm、深さは約10cm、断面形は船底形を呈す。いずれも堆積土は1層で、基本層のIV層に対応する。溝の堆積土からは、土師器片が合わせて平箱1/5程度検出された。ロクロ成形のものは確認できなかった。調整は外側、内面ともにハケメである。周辺調査では、小溝状遺構の時期は古墳時代から奈良時代とされており、今回検出の小溝群もこの範囲を超えるものではないと考えられる。

小溝状遺構2群 調査区西側に5条検出された。1群よりもや北東から南西方向に延びており、調査区の西側2/3あたりの位置で途切れている。1m～2mの間隔で検出された。検出面での幅は約30cm、深さは10cm～20cm、断面形は船底形を呈する。どの溝も小溝1群に切られており、1群よりも古い時代のものと考えられる。いずれも堆積土は1層で、基本層のIV層に対応する。溝の堆積土からは、非ロクロの土師器片が平箱1/5程度検出された。

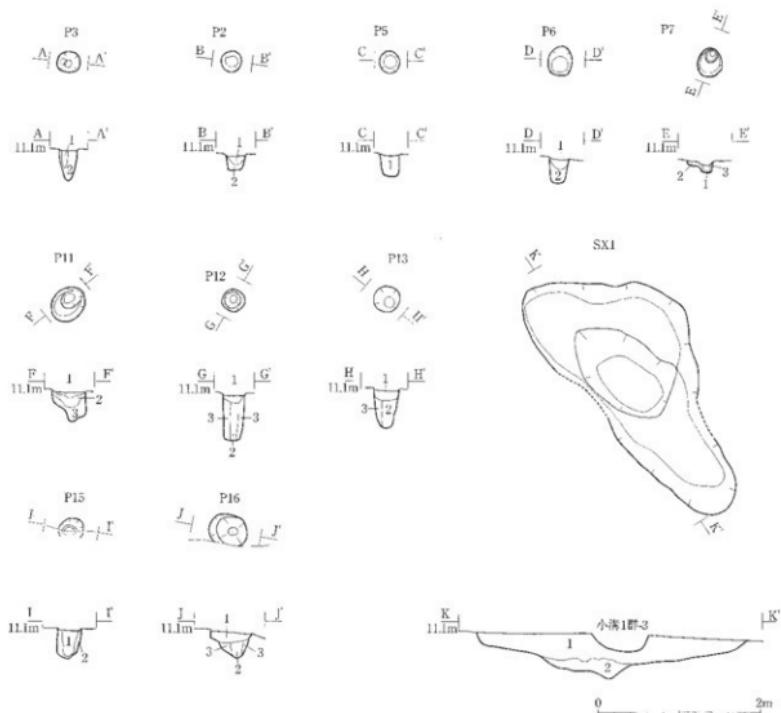
5) ピット

調査区全体でV層上面から40基検出された。このうち柱状痕が確認されたのはP3、P7、P12、P13、P15、P16の6基である。また多くのピットの堆積土は1層であり、基本層のIV層に相当する。遺物は、土師器片が全体で数点出土した。P10の堆積土1層から土師器甕または壺の破片（第84図-2）が出土した。全体の形状や成形は明らかでないが、調整は内外面ともにハケメである。



層	土色	土性	備考
SD1-1	10YR5/2	灰青褐色	粘土質シルト：細粒砂（10YR5/2）をまだら状に少量含む。無化鉄を多量に含む。
2	10YR5/2	灰青褐色	粘土質シルト：3～5cmの細粒砂（10YR4/3）ブロックを含む。無化鉄を多量に含む。
3	10YR5/2	灰青褐色	粘土質シルト：若干鐵シルト（10YR4/2）を含む。無化鉄を少や多量に含む。
4	10YR5/2	灰青褐色	粘土質シルト：無鉄砂（10YR4/2）をラミナ状に少量に含む。
5	10YR5/2	灰青褐色	粘土質シルト：無鉄砂（10YR4/2）、をまだら状に多量に含む。無化鉄を多量に含む。
6	10YR4/4	褐色	砂質シルト：砂質シルト（10YR4/2）を少量含む。無化鉄を少量含む。
7	10YR4/4	褐色	砂質シルト：砂質シルト（10YR4/2）を少量含む。無化鉄を少量含む。
8	10YR4/4	褐色	砂質シルト：3～5mmのV字型ブロックを少量含む。
9	10YR4/4	褐色	砂質シルト：3～5mmのV字型ブロックを少量含む。
SK2-1	10YR5/2	灰青褐色	シルト質粘土：無化鉄、マンガン鉄をやや多量に含む。

第82図 遺構平・断面図、エレベーション図



層	北	東	土性	備考
P3-1	10YR4/2	灰黃褐色	粘土質シルト	礦化鉄を少量含む。
2	10YR4/4	褐色	シルト	
P4-1	10YR4/4	褐色	シルト	礦化鉄を少量含む。
2	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	
P5-1	10YR3/4	暗褐色	シルト	
P6-1	10YR4/4	褐色	シルト	「礦化鉄をまだし状に含む。」
2	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	
P7-1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	
2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	「礦化鉄をまだし状に含む。」
P11-1	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	「礦化鉄をまだし状に含む。」
2	10YR4/3	褐色	シルト	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/2)ブロックを多量に含む。」
P12-1	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/2)ブロックを多量に含む。」
2	10YR4/3	褐色	シルト質粘土	「1~2cmのシルト質砂(10YR4/4)を少量含む。柱痕跡。」
P12-2	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	「1~2cmのシルト質砂(10YR4/4)を少量含む。柱痕跡。」
2	10YR4/3	褐色	シルト質粘土	柱痕跡。
3	10YR4/4	褐色	シルト質砂	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/3)ブロックを少量化。」
P13-1	10YR4/4	褐色	シルト質シルト	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/3)を少量化。」
2	10YR4/3	褐色	シルト質粘土	「1~2cmのシルト質砂(10YR4/4)を少量含む。柱痕跡。」
3	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/4)を少量化。」
P15-1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	柱痕跡。
2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/3)ブロックを少量化。」
P16-1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/3)ブロックを少量化。」
2	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/3)ブロックを少量化。」
SX1-1	10YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/3)ブロックを少量化。」
2	10YR4/4	褐色	シルト質砂	「1~2cmの粘土質シルト(10YR4/3)ブロックを少量化。」

第83図 遺構平・断面図

柱状痕が確認されたピット、堆積土が複数の層になるピットは以下の通りである。

P3 調査区東側、小溝2群-4の北側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径約20cmである。堆積土は2層に分かれ、深さは35cmである。1層は柱痕跡と見られる。

P4 調査区東側、小溝2群-3の東端付近で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径約20cmである。堆積土は2層に分かれ、深さは15cmである。

P5 調査区東側、SD1の南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径20cmである。堆積土は1層で、深さは25cmである。

P6 調査区中央部、小溝1群-8の東端付近で検出された。平面形は不整な円形で、遺構検出面での大きさは25cmである。堆積土は2層に分かれ、深さは30cmである。

P7 調査区中央部、小溝1群-8の東端付近で検出された。平面形は不整な楕円形で、遺構検出面での大きさは直径35cmである。堆積土は2層に分かれ、深さは15cmである。1層は柱痕跡と見られる。

P11 調査区中央部、SD1の南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径40cmである。堆積土は3層に分かれ、深さは40cmである。

P12 調査区中央部で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径25cmである。堆積土は3層に分かれ、深さは55cmである。2層は柱状痕と見られる。

P13 調査区西側、小溝1群-9の南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは直径30cmである。堆積土は3層に分かれ、深さは45cmである。2層は柱痕跡と見られる。

P15 調査区中央部、小溝1群の南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは、直径30cmである。堆積土は2層に分かれ、深さは35cmである。1層は柱痕跡と見られる。

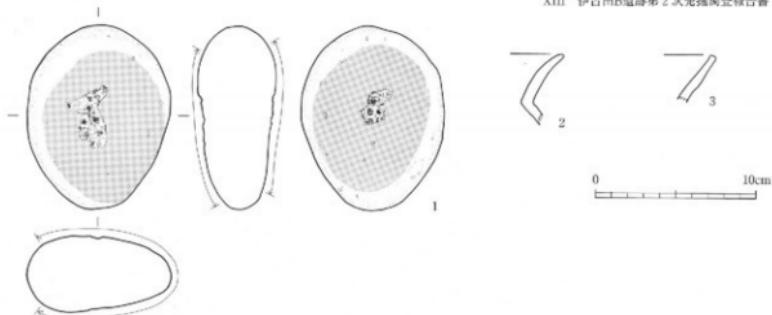
P16 調査区中央部南側で検出された。平面形は円形で、遺構検出面での大きさは50cmである。堆積土は3層に分かれ、深さは30cmである。2層は柱痕跡と見られる。

6) 性格不明遺構

SX1 調査区中央部で検出された。1小溝群-3を切っている。平面形は不整な三角形であり、遺構検出面での大きさは、南北約2m50cm、東西約2mである。深さは50cm~60cmで、底面は楕円形である。堆積土は2層に分けられ、土師器片が数点出土している。

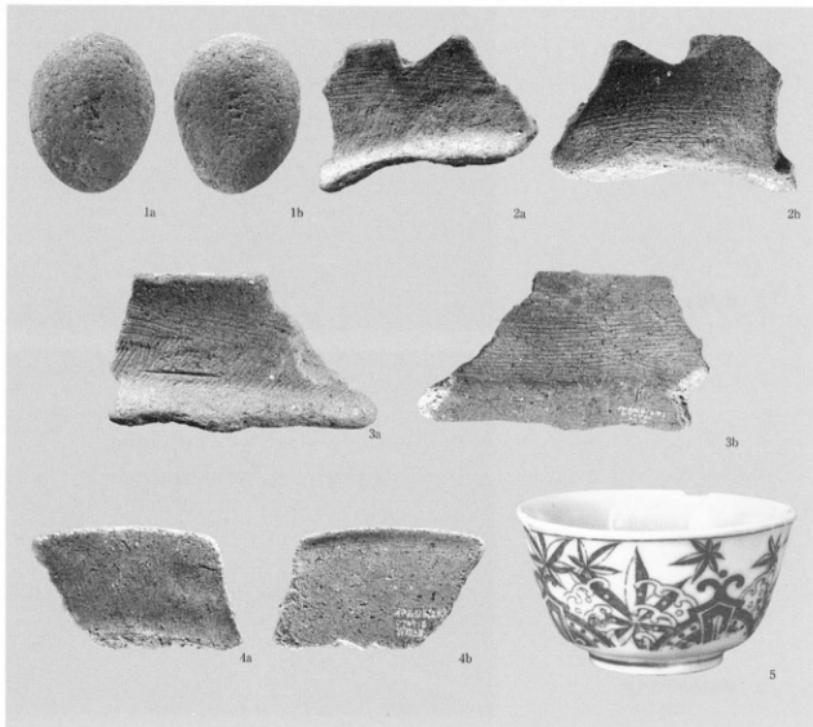
6.まとめ

- ① 今回の調査地点では、溝跡1条、竪穴住居跡1基、2時期の小溝状遺構（小溝1群、小溝2群）、土坑を2基、性格不明遺構1基（SX1）、ピットを40基を検出した。
- ② 小溝状遺構は小溝群によって時期は異なるものの、いずれも周辺調査の状況から古墳時代から奈良時代のものと考えられる。また竪穴住居跡は小溝状遺構よりも古い遺構であり、古墳時代に属する可能性が高いと考えられる。



出土 番号	遺跡 区分	品種名	遺跡名	出土場所	分類		計量 (cm. g)			特徴・備考 (洞空・蓋材・底盤・文様等・時期)	参考 図版
					種別	形態	基高	口径	幅		
1	E-1	石器	伊古田B	右西	磨光石	11.4	8.9	4.8	675	安古田 磨かせた表面の輪郭	64-1
2	C-2	P10	1	2010上層	漆器底					外葉：口縁部ハケメ 内面：口縁部ハケメ	64-3
3	C-3	II 上層		2010上層	漆？					外葉：口縁部ハケメ 底ヨコナメ 内葉：口縁部ヨコナメ	64-4
C-1		小袋1号	1	2010上層	漆器					外葉：口縁部ハケメ 内面：口縁部ハケメ	64-2
J-1	I	漆器	物			4.4	8.0		37	施反模 漆敷板等 19世紀	64-5

第84図 出土遺物



図版64 伊古田B遺跡2次出土遺物



1 遺構検出状況
(北西から)



2 遺構検出状況西側
(南東から)



3 遺構検出状況東側
(南西から)

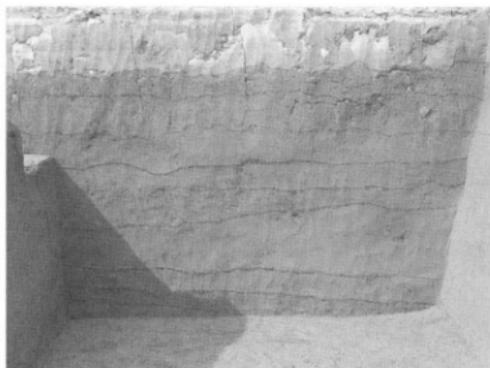
図版65 遺構検出状況



1 北壁全景
(南西から)



2 基本層序
(北壁中央部)



3 基本層序
(北壁東端部)

図版66 基本層序



1 SI 1 壺穴住居跡
(南から)



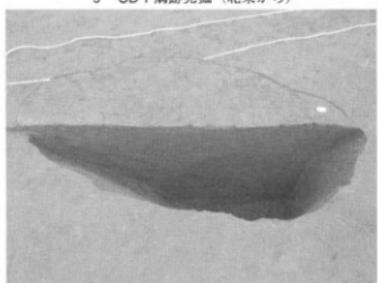
2 SI 1 壺穴住居跡断面 (西から)



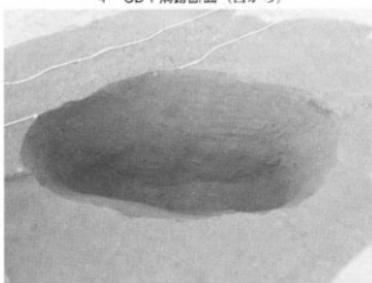
3 SD 1 溝跡完掘 (北東から)



4 SD 1 溝跡断面 (西から)



5 SK 1 土坑断面 (南から)

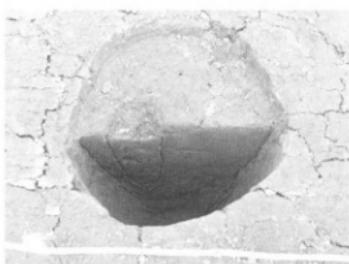


6 SK 1 土坑完掘 (南から)

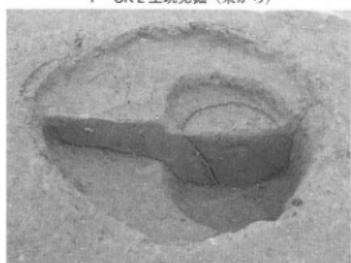
図版67 壺穴住居跡、溝跡、土坑



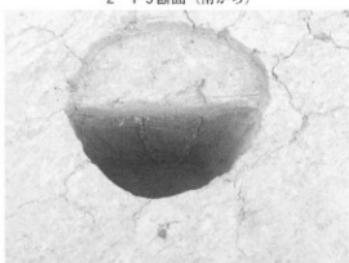
1 SK 2 土坑完掘（東から）



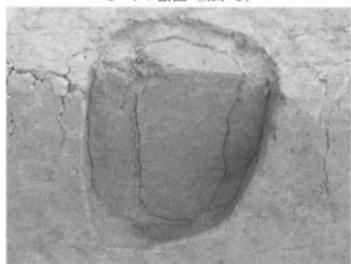
2 P 3 断面（南から）



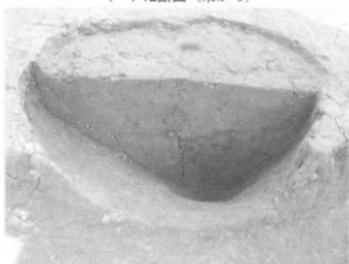
3 P 7 断面（東から）



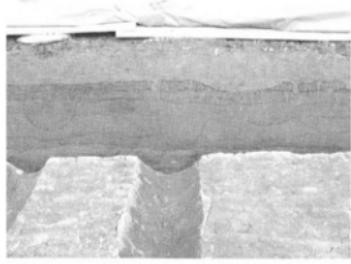
4 P 12 断面（東から）



5 P 15 断面（南から）

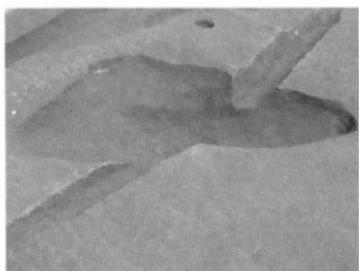


6 P 16 断面（南から）

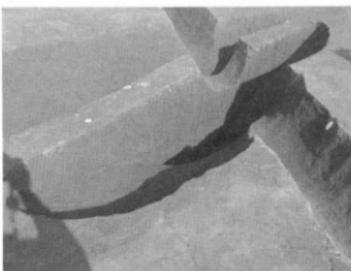


7 小溝状造構群断面
(東壁)

図版68 土坑・ピット・小溝状造構群



1 SX1 性格不明遺構（南西から）



2 SX1 性格不明遺構断面（北西から）



3 完掘全景（西から）

図版69 性格不明遺構・完掘全景

XIV 北目城跡第7次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	北目城跡（宮城県遺跡番号01029）
調査地点	仙台市太白区郡山字東郡山2丁目106-7、107-5
調査期間	平成19年11月7日～9日
調査対象面積	79.24m ²
調査面積	25.5m ²
調査原因	GL-4500mmの杭打ちを伴う木造2階建て個人専用住宅建築工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 鈴木 隆 加藤 隆則 臨時職員 森田 賢司

2 調査に至る経過と調査方法

平成19年9月18日付けで、鈴木 實・鈴木愛子氏より、深さ4.5mの杭打ちを伴う木造2階建て個人専用住宅の建築に伴う発掘枠が提出されたので、平成19年11月7日に調査を実施した。建物建築範囲に東西8.5m×南北3.0mの調査区を設定して調査を行なったところ、調査区内から遺構が検出されたため引き続き本調査を実施した。

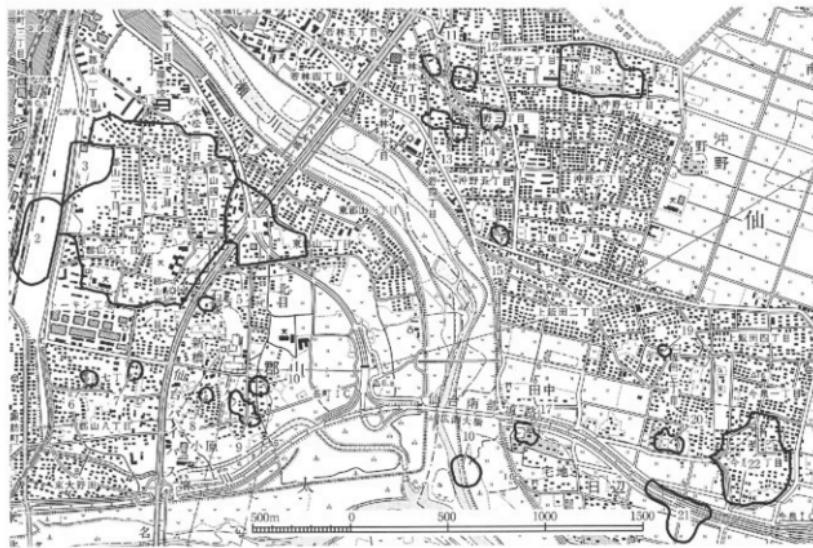
3 遺跡の位置と環境

北目城跡はJR長町駅の南東1.5kmに所在する遺跡で、仙台市街の南東部、太白区郡山字北目宅地から郡山四丁目に所在し、北東を広瀬川、南部を名取川、また西を長町一利府構造線に画された郡山低地に位置する。遺跡は、広瀬川右岸の標高約8～11mの自然堤防上に立地し、調査地点付近の標高はこのうちでもっとも低い標高8m前後である。遺跡の北東を流れる広瀬川は、遺跡の1.5km南東で名取川と合流し、さらに6.0km東側で仙台湾へと注ぎ込む。

遺跡は、東西450m、南北450mの規模であり、遺跡範囲の東側は、本調査地点に隣接する道路によって画されている。一方、西側は郡山遺跡と接しており、遺跡範囲外（郡山遺跡の範囲内）には現在も「郡山堀」と呼ばれる堀が見られる。この堀は、明治時代中期の地籍図から、北目城の外堀である可能性が高い。また、遺跡の北側は、北西方向から南東方向にかけて広瀬川の旧河道が走り、現在は標高が1.5～2.0mほど低くなっている。また、地籍図には南側範囲の限界である道路も表れているほか、遺跡周辺には屈曲する水路や城館に特有な「折れ」のある地割りなど、かつての北目城を偲ばせる景観が現在も残っている。

北目城は、延宝年間（1670年代）に記された史料『仙台領古城書上』によると、16世紀後半までは栗野氏の居城として機能していたことが知られる。その後、伊達政宗が慶長5年（1600）、閔ヶ原の戦いで白石城の上杉景勝を討つための前線基地として、仙台城の完成まで入城していたとされている。同史料によれば、城の規模は記載内容から、東西四十六間（約370m）、南北五十六間（約280m）とあるが、地籍図に見る城の痕跡はさらに広域に及んでいることから、これは主郭のみを指していると考えられる。

北目城跡周辺には、旧石器時代から近世までの多くの遺跡が残されている。特に北目城に関連の深い同時期の遺跡として、本遺跡の北東1.6kmに沖野城跡（18）が、また南東2.8kmに今泉遺跡（22）、同1.8kmに日辺館跡（17）があげられる。いずれも広瀬川の左岸に位置する中世の城館跡（日辺館跡の詳細は不明）であるが、六郷地区と七



第85図 遺跡の位置と周辺の遺跡

郷地区との境界付近に旧河道が確認されることから、本来的には広瀬川の右岸に位置し、同河川が名取郡と宮城郡の境界となっていたものと思われる。

沖野城は、「仙台領古城書上」によれば、栗野大膳の居城とされている。同城跡の記録は多数残されているが、発掘調査の成果から、北側と東側に二重の堀が巡っていることが明らかになっている。今泉城は「仙台領古城書上」によれば、須田玄蕃を城主としたとある。今泉遺跡の概要については、本書「Ⅳ 今泉遺跡第5次」を参照されたい。

北目城跡はこれまでに、第1～6次調査を実施し、古くは縄文時代後期の堅穴住居跡や土坑（第1次調査）、縄文時代後期末葉～晩期初頭の土器など（第6次調査）を検出している。

今回の第7次調査は、遺跡範囲の最東端に位置し、戦国時代末期～近世初頭の堀跡を検出した。同時期の遺構は、第6次を除くすべての調査で検



第86図 調査区配置図



第87図 調査地点の位置

出されている。中でも第1次調査は、障壁のある鉤型に屈曲する規模の大きな堀跡（SD1堀跡）を検出しておらず、南側で検出したSD15堀跡と併せて、北日城の主郭を画する堀跡と見られる。

同堀跡の底面から下層では陶磁器、朱塗鞘の駒差や短刀、曲尺、加飾漆器、木製品（下駄、柄杓など）のほか、クリ、クルミ、ヒシなどの植物遺存体、巻貝などの動物遺存体が出土した。水成植物であるヒシの存在は、同堀跡が水堀であった可能性を示している。また、中間層では寺社などの建築部材である虹梁や18世紀前半の肥前磁器、火縄銃の弾丸が、上層では19世紀代の陶磁器や木刀、下駄などの木製品が多量に出土している。

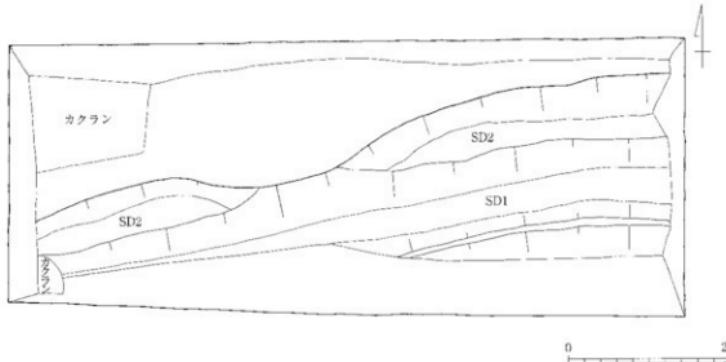
一方、第4次、第5次調査でも16世紀後半の土坑や戸戸跡が検出され、北日城関連の遺構である可能性が高い。また、遺跡北西部の第2次調査で検出した溝跡は、地蔵園から外堀であろう。このほか、調査次数は付されていないが、平成12年に本地点の西側隣接地で、個人住宅建設に伴う確認調査を実施し、障壁のある堀跡を検出している。

4 基本層序

調査地点は50～70cmの盛土がある。南側ほど上層が厚く、堀は近年まで窪地としての景観を残していたようである。I層は堀跡の窪地に堆積した土層で盛土同様、堀の中央に向かって傾斜している。II層は東壁の基本層序に表れていないが、北壁のはば全面に層厚10～20cmの明褐色砂質シルト土として確認される。III層は黒褐色シルト質粘土で、SD1堀跡ないしはSD2溝跡に掘り込まれている。III層以下は褐色や灰黄橙の水成堆積層で、酸化鉄を多量に含み、層中に黒褐色粘土層や炭化物、未分解腐食土層をラミナ状に含んでいる。III層以下の水成堆積層は、西側隣接地でも確認されている。

5 発見遺構と出土遺物

III層でSD1堀跡、SD2溝跡を検出した。遺物は、SD1堀跡の底面から土製品が1点出土している。



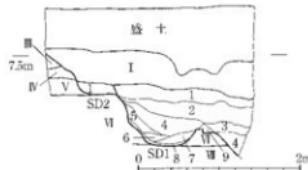
第88図 遷構配置図

1) 堀跡・溝跡

SD1 堀跡 調査区を東西方向に延びており、南側は調査区域外におよんでいる。北側でSD2溝跡と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。北側の立ち上がりは80~100cm底面は基盤層を掘り残して、堀と平行の障壁を設けている。障壁南側は堀の中央に向かって下がっている。規模は検出長8.1m。検出面から底面までの深さは、障壁北側で約75cm、南側の最深部で90cm、方位はN~70°~Eである。堆積層は1~9層を確認した。堀跡底面付近の土層(4~8層)はV・VI層ブロックを多く含んでいる。水成堆積を示すラミナ状堆積は見られない。

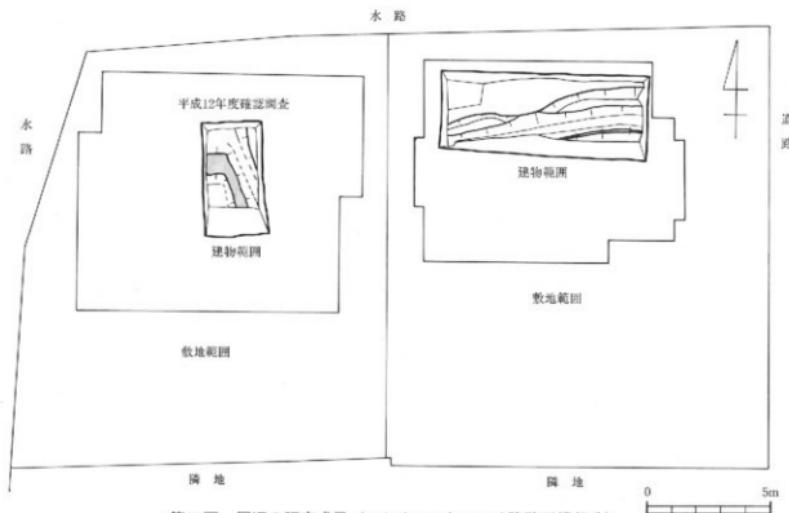
出土遺物は、調査区東寄りの障壁北側、底面から若干浮上した位置で土製品1点が出土した。土製品は直径2.8~3.2cm、高さ8.5cm、底面向かってわずかに広がる中実円筒形である。端部の方はわずかに内側に入る上げ底状で、他方はやや外反するが破損しており不明である。色調は明赤褐色で、外面はタテ方向にケズられる。

SD2 溝跡 調査区をSD1堀跡と平行して東西方向に延び、南側は



層	名	土 色	性	層	名	土 色	性
I	10YR4/4	褐色	砂質シルト	V層	10YR4/1	褐色	砂質ブロックを部分的に含む。
II	10YR4/2	灰青褐色	砂質シルト	6	10YR4/2	褐色	砂質シルト
III	10YR4/2	黒褐色	シルト質粘土	7	10YR4/2	褐色	V層ブロックを多量に含む。
IV	10YR4/1	褐色	砂上質シルト	8	10YR4/1	褐色	V層ブロックを多量に含む。
V	10YR5/4	にい青褐色	砂上質シルト	9	10YR4/1	褐色	砂上 (10YR4/1), 硫化物をラミナ状に含む。
VI	10YR6/2	灰青褐色	砂上質シルト	10	10YR4/2	灰青褐色	シルト質粘土。
VII	10YR4/2	灰青褐色	シルト質粘土。				
層	名	土 色	性	層	名	土 色	性
SD1-1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	1	10YR4/2	灰青褐色	砂層をまだら状に含む。
2	10YR4/2	灰青褐色	砂質シルト	2	10YR4/2	灰青褐色	V層粒を少々含む。
3	10YR4/2	灰青褐色	砂上質シルト	3	10YR4/2	灰青褐色	砂上質シルト
4	10YR5/2	灰青褐色	砂上質シルト	4	10YR5/2	灰青褐色	砂上質シルト
5	10YR5/2	灰青褐色	砂上質シルト	5	10YR5/2	灰青褐色	V層をまだら状に少々含む。
6	10YR5/4	にい青褐色	砂上質シルト	6	10YR5/4	にい青褐色	砂層をまだら状に少々含む。
7	10YR4/2	灰青褐色	砂土質シルト	7	10YR4/2	灰青褐色	V層粒をやや多量に含む。
8	10YR4/2	灰青褐色	砂土質シルト	8	10YR4/2	灰青褐色	V層粒を少々含む。
9	10YR4/2	灰青褐色	砂土質シルト	9	10YR4/2	灰青褐色	V層底部の黑色部を少々含む。
SD2-1	10YR4/2	灰青褐色	砂質シルト				

第89図 調査区東壁断面図



第90図 周辺の調査成果（スクリーントーンは障壁天端部分）

同遺構により切られている。犬走り状の施設とも考えられたが、SD1堀跡と切り合っており、かつ堆積土も明瞭に異なることから、同堀跡に先行する遺構と考えられる。出土遺物はない。

6まとめ

今回の調査では、障壁をもつ堀跡を検出した。平成12年度には西側隣接地点より、同じく障壁をもつ堀跡を検出し（第90図、写真1）、調査地点付近において堀跡が東西方向に展開している可能性が高いことが明らかになった。

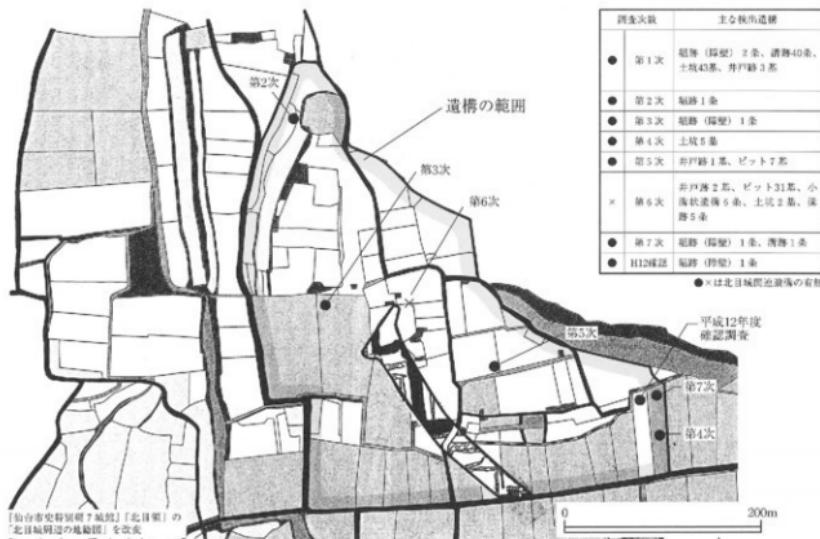
第1次調査では、障壁をもつ非常に大規模な堀跡（SD1堀跡・SD15堀跡）を検出した。SD15堀跡は現在の用水路と一致していることが明らかとなった。明治時代中期頃の地籍図にも示された同用水路は、現在もまったく同位置にあり、第1次調査区から東へ200mほど延び、北側、東側への屈曲を経て本調査地点北側の水路に至る。また現在も水路南側に連なる屋敷地は、明治初年の『郡山村絵図』にも示されていることから、水路や屋敷地などの現況が明治時代頃の景観をある程度残していると見てよい。

以上のように、明治時代の地籍図に辿れる現況が近世の景観を反映したものと仮定するなら、本調査地点の堀跡もSD15堀跡の延長という考えが成立立つ。さらにSD15堀跡やSD1堀跡が北目城の主郭を画する内堀と推測されていることから（金森1995）、本地点の堀跡も、北目城の内堀の可能性が考えられる。

＜参考文献＞

- 金森安孝1995「北目城跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第197集
- 金森安孝1996「関ヶ原の戦いの出撃基地 北目城を掘る」「歴史群像」名城シリーズ-仙台城
- 工藤信一郎2007「北目城跡第6次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第314集
- 工藤哲司2006「北目城跡第4次発掘調査報告書」「前田館跡他」仙台市文化財調査報告書第301集pp.69-74
- 工藤哲司2006「北目城跡第5次発掘調査報告書」「前田館跡他」仙台市文化財調査報告書第301集pp.75-79

- 佐藤 洋1999「北目城跡（第2次調査）」「陸奥国分尼寺跡ほか」仙台市文化財調査報告書第238集pp.86-89
 豊村幸弘2004「北目城跡（第3次）」「保春院前遺跡他」仙台市文化財調査報告書第274集pp.97-101
 柳原敏昭2006「北目城」「仙台市史」特別編 7 城館 仙台市pp.165-169



第91図 北目城関連の調査成果



写真1 平成12年度調査区・全景（南から）

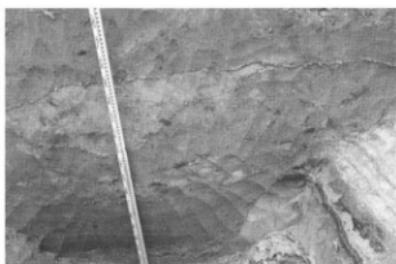


写真2 平成12年度調査区・北壁断面



1 SD 1 堀跡検出状況（東から）



2 SD 1 堀跡完掘（東から）

図版70 調査区全景



1 調査区東壁



2 調査区西壁



3 SD 1 堀跡完掘（北西から）



4 SD 1 堀跡遺物出土状況（底面）



5 SD 1 堀跡出土遺物

図版71 調査区断面・遺構・出土遺物

XV 北屋敷遺跡第4次発掘調査報告書

1 調査要項

遺跡名	北屋敷遺跡（宮城県遺跡番号01220）
調査地点	仙台市若林区六丁の日中町14-2
調査期間	平成19年11月19日～20日
調査対象面積	27m ²
調査面積	17m ²
調査原因	仙台市消防局40m級防火水槽新設工事
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担当職員	主事 鈴木 隆 文化財教諭 志賀 雄一 工藤 慶次郎

2 調査に至る経過と調査方法

平成19年9月13日付けで、仙台市消防局長の藤橋孝彰氏より、40m級防火水槽新設工事に伴う「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」が提出され、平成19年9月20日付で、宮城県教育委員会教育長宛に進呈した。この回答を受けて確認調査を行った。防火水槽新設予定地に4m×2mのトレンチを設定して調査を行ったところ、溝などの遺構を検出したため、引き続き本調査を実施した。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	北屋敷遺跡	住居跡	自然凹地	平安～近世	4	羽笠廻遊跡	散布地	自然妥協	平安
2	砂庵跡	居住跡	自然凹地	中世	5	施設廻遊跡	散布地	自然妥協	中世
3	西口遺跡	河川帯、水田帯、台地帯	洪積、冲積	発生～中世					

第92図 遺跡の位置と周辺の遺跡

3 遺跡の位置と環境

本遺跡は、仙台市東部、県道仙台塩釜線沿いにあり、六丁の目交差点より東方約1kmに位置している。標高は約5mで、七北田川と広瀬川の間に広がる沖積平野上の微高地に立地している。登録されている遺跡の範囲は、東西約180m・南北約200mである。区画整理以前の小字名は「六丁の目字北屋敷」で、周辺には同様に「明星敷」「星敷」「鹿子屋敷」「中屋敷」「札屋敷」など、屋敷の所在を示す小字名が多数見られる。また区画整理以前は「居久根」と呼ばれる屋敷林もよく残り、古き農村集落の景観をとどめていたが、開発が急速に進み、ほとんど見られなくなってきた。

今回の調査地点は、本遺跡のほぼ中央部に位置する。昭和53年（1978年）、六丁目コミュニティーセンターの建設に伴い行った第1次調査で、平安時代から近世にかけての遺跡であることが明らかになった。遺跡の中心となるのは、江戸時代の仙台平野に形成された農村の屋敷跡と考えられる遺構である。屋敷は堀と考えられる溝で囲まれ、その中に掘立柱建物跡・土坑・井戸跡等の遺構を発見した。堀は屋敷を囲むほかに、隣の屋敷との区画施設の役割も果たしている。屋敷内からは、瀬戸産・美濃産の陶器、大皿相馬陶器、肥前産磁器、瓦質陶器、灯明皿、漆器、などの遺物が出土している。また17~19世紀の墓石が見つかっており、中には天明4年（1784年）の銘が刻まれたものもあった。平成10年実施の2次調査では、溝跡7条・溝状土坑1基・土坑2基を検出し、近世陶磁器などの遺物が多く出土している。東西方向に重複して延びる溝跡は、「宮城郡国分六町目村全圖」から、屋敷の南側を区画する堀跡ではないかと想定される。また堀の護岸の「しがらみ」の遺構も見つかっている。平成13年実施の第3次調査では、第2次調査で検出した溝跡群に関連すると考えられる溝跡や、杭列、陶磁器類が発見されている。

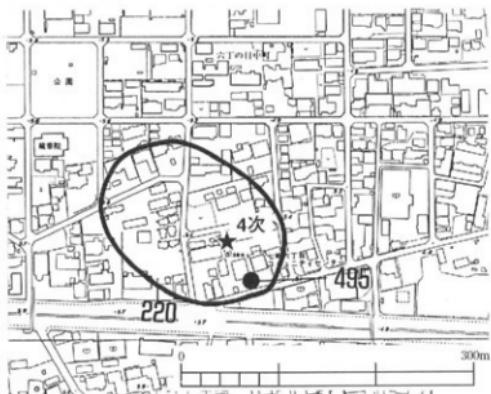
4 基本層序

基本層序は、約20mの盛土下に大別では3層、細別では4層確認された。

I層は盛土前の旧表土で、層厚は5~65cmである。

II層は下部にIIIa層の巻き上げが見られた。水田層の可能性がある。層厚は0~15cmである。

III層は、シルト質粘土層と砂質シルト層の違いにより、2層に分けられた。IIIa層は層厚0~25cm、IIIb層は層厚80cmである。IIIb層は細砂・粗砂をラミナ状に含み、河川堆積の可能性が考えられる。



第93図 調査地点の位置



0 5m

第94図 調査区配置図

5 発見遺構と出土遺物

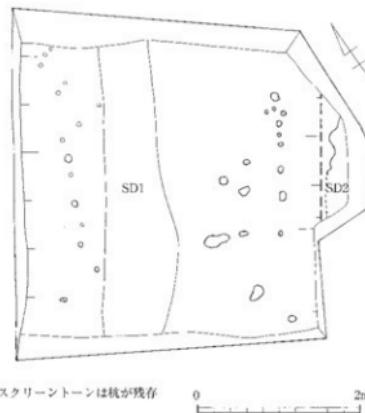
Ⅲa層上面で溝跡を2条検出した。また、陶器が23点、磁器が52点、石製品が1点、鉄製品が1点、瓦が1点出土した。

1) 溝跡

SD1溝跡　Ⅱ層上面で検出した。南北に延びる溝跡で、東側は一部で立ち上がりを検出したが、西側は調査区域外に及んでいる。東側はSD2と重複し、新旧関係は本遺構の方が新しい。断面形は上底が長い台形を呈する。検出した限りでの上端幅は約3.7m、下端幅は0.6m～0.9m、深さは1.2mである。堆積土は3層に分けられるが、いずれも自然堆積によるものと考えられる。西側の斜面では杭列を検出した。残存している杭が10本、痕跡のみのものが5基あり、南北にはほぼ交互に配置されている。しがらみ状の遺構であった可能性が考えられる。残存する杭または杭跡の直径は5～15cmである。また、東側の斜面でも杭跡と見られるものを17基検出した。こちらは杭が残存するものではなく、杭跡の直径は5～20cmである。

SD1の1層から出土した遺物は、陶器4点、磁器7点、石製品1点、鉄製品1点で、いずれも破片である。2層から出土した遺物は磁器片5点である。また3層から出土した遺物は陶器18点・磁器35点・瓦1点で、全て破片である。いずれの層にも近世の遺物が含まれている。

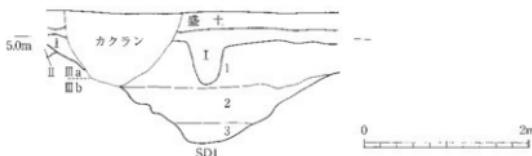
特に3層からは、17世紀後半～19世紀後半の陶磁器が出土している。肥前産の陶器である呉器手腕（第97図1）は、灰釉が施され漆緋痕がある。年代は17世紀後半のものと見られる。同じく肥前産磁器の染付皿（図版75～6）には、蛸唐草文とコンニャク印判による菊花文が施されている。また焼緋痕が見られる。焼緋の技法は、19世紀に



第95図 遺構配置図

※スクリーントーンは杭が残存

0 2m



年号	土色	特徴	他	参考
I	10YR5/2 黒色	粘土質シルト	陶瓦土。	
II	10YR4/2 黄褐色	粘土質シルト	下部にⅢa層の巻き上げあり。水田層。	
IIIa	3Y5/2R オリーブ色	シルト質粘土		
IIIb	2Y4/2R オリーブ色	砂質シルト	漂砂層。軽粉碎をウミナ枝に含む。淀川堆積土。	
SD1	土 色	土 色	他	参考
SD1-1	10YR3/2 黑褐色	シルト質粘土	自然堆積層。ビニール等を含む。	
2	10YR2/2 黑褐色	シルト質粘土	自然堆積層。ビニール等を含む。	
3	10YI3/2 黑褐色	粘土質シルト	Ⅲb層をまだら状に少量含む。近世陶磁器を含む。	

第96図 調査区・南壁断面図

確立してきたものであることから、この皿は19世紀又はそれ以前に作られ継ぎ直されたものと推定される。

また切込座磁器の染付碗（第97図-3）には、螺文と源氏香文が施され、見込文様も見られる。時期は19世紀前半と推定される。この碗に描かれた香文は、源氏物語を利用した香道の楽しみ方の一つである「源氏香の図」に似ている。「源氏香の図」は、享保の頃成立したと考えられており、着物や帯・重箱の模様にもよく使われている。描かれている香文は、「行幸」の図をデザインしたものではないかと思われる。一緒に描かれた蝶は、源氏物語では「梅のをり枝、てう、鳥とびちがひ、唐めいたる白き小枝に、濃きがつやかかる重ねて・・・」（玉壁）といったように衣装などの装飾を描写する際に登場しており、この碗にも源氏物語と関連する文様として用いられたものと考えられる。これと同じ文様の碗は、平成13年実施の第3次調査でも出土している。

その他痕地は不明だが、19世紀中～後半の陶器で灰釉を施した段重（第97図-2）と、19世紀後半の磁器で見込み摺絵文様を施し蛇の目凹高台をもつ染付の鉢又は皿（図版75-5）と見られるものが出土している。

SD 1 の 1 層から出土した鉄製品は鍔（図版75-7）で、最大長17.3cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ82gである。SD 1 の東西斜面で多数の杭跡を検出していることから、これに関連して使用されていた可能性が考えられる。同じく 1 層からは長さ9.3cm、幅4.1cm、厚さ3.3cm、重さ160gの砥石（図版75-4）も出土している。材質は凝灰岩と見られ、両側面に擦切り痕がある。

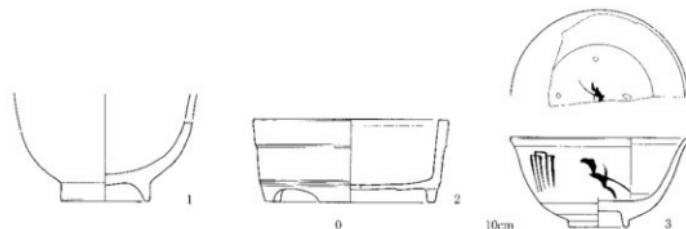
SD 2 溝跡　調査区の東側拡張部で検出した。SD 1 と重複しており、新旧関係はSD 1 よりも古く、掘り込み面はⅢa層上面である。遺物は出土しなかった。

6まとめ

- ① 南北に延びる溝跡を 2 条検出した。掘り込み面が異なることから、SD 1 がより新しい溝跡である。
- ② SD 1 は、Ⅱ層中より18世紀代と考えられる陶器片が出土していることから、18世紀以降に形成されたと考えられる。また、3層から近世の陶磁器に加え、明治期の染付皿が出土していることから、この頃までは一定の深さを保ち、機能していたものと推測される。また 1・2 層には共にビニール等が含まれ、近隣住民の話等も勘案すると、戦前頃までは溝跡が残存していたと考えられる。
- ③ SD 1 の東西両斜面からは杭跡が検出された。西側は特に杭がよく残存しており、一定範囲に交互に配置されていることから、しがらみ等の可能性が高い。
- ④ SD 1 の南側延長線の東に第1次調査で検出した溝跡等があることから、SD 1 はその規模から判断すると、東側の屋敷地を囲む堀として第1次調査の西側まで延びていた可能性が高いと考えられる。
- ⑤ SD 2 は、第1次調査区北側で検出した屋敷の区画溝と同様の造構と考えられる。

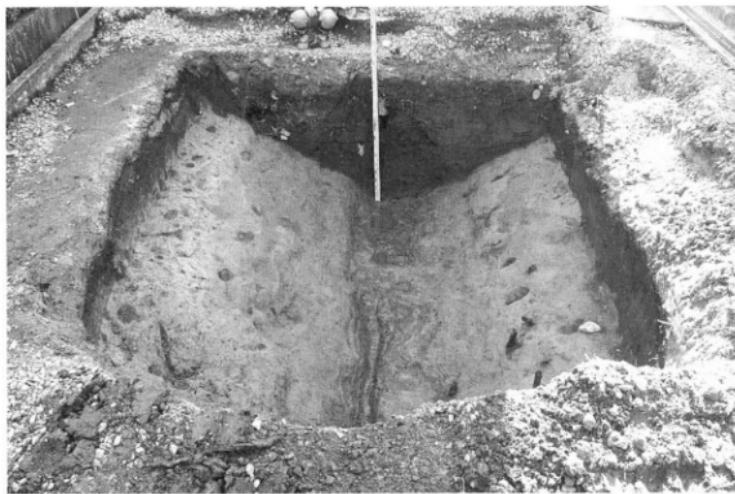
＜参考文献＞

- 阿部秋夫・他校注・訳2004『新編日本古典文学全集 源氏物語③』小学館
伊東真文・竹田幸司1999「北屋敷遺跡（第2次調査）『陸奥国分尼寺跡ほか発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第238集pp.90-106
木村浩一1979「北屋敷遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第17集



図中 記号	登録 番号	遺物名	出土場所	分類	器種	法 量 (cm・g)	特徴・備考	写真 図版
1	J-1 SDI	3	6	南壁	碗	容高・長 (6.8) 口径・幅 (12.2)	5.6 縁前 凹船 縁後手縫 瓢箪形 17c後	75-1
2	J-2 SDI	3	6	南壁	段重	5.2 (11.0)	(0.6) 底地不明 灰釉 19c中～後	75-2
3	J-3 SDI	3	7	底部	碗	5.6 (11.0)	切込 桧付 龍文 鎌式青文 見込み文様あり 19c前	75-3
	J-2 SDI	3	7	底部	件舟形		底地不明 桧付 蛇ノ目凹凸 19c後	75-5
	J-3 SDI	3	6	底部	盤		縁前 桧付 細縫空文、菊文(コンニヤク印判) 烧締模 18c後	75-6
K-1 SDI	1	4	4	聚落系	砾石	9.3 17.3	縁前凹船 口縫面に擦切り痕あり 奥さは個人用で計測	75-4 75-7
N-1 SDI	1	4	4	芦製品	紙	4.1 15	33 0.5 82	

第97図 出土遺物

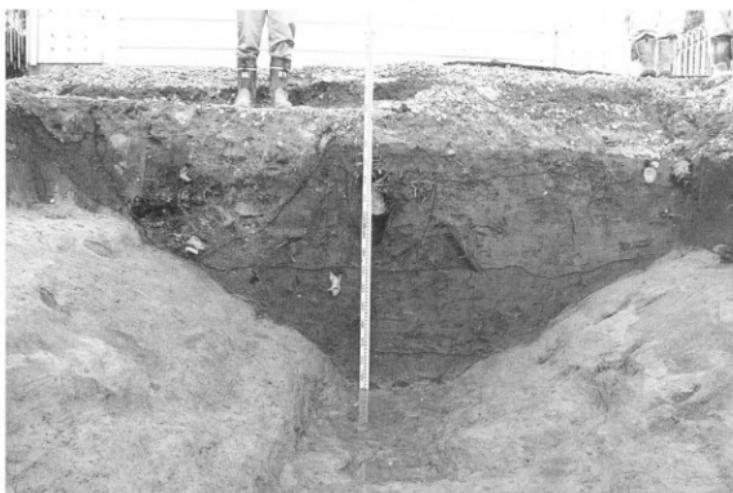


1 遺構完掘状況（北から）



2 基本層序（南・東壁）

図版72 調査区全景・基本層序



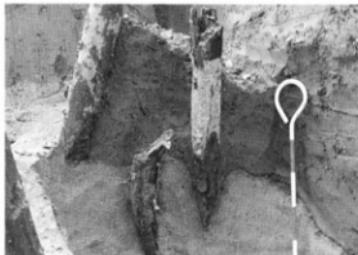
1 溝跡南壁断面



2 杭跡検出状況（東から）



3 杭跡検出状況（北東から）



4 SD 1 杭跡断ち割り断面状況（東から）



5 堆積土 3層染付皿出土状況

図版73 SD 1 溝跡

1 検出状況
(南から)



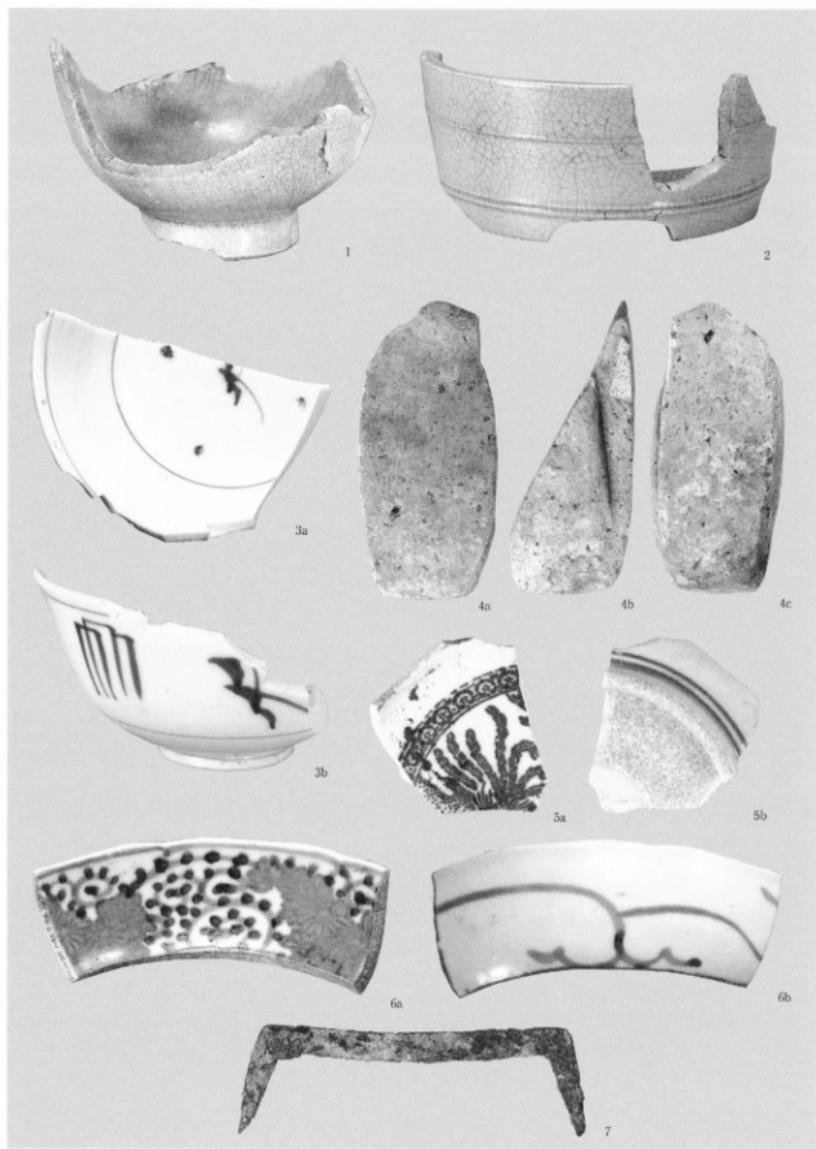
2 検出状況
(北から)



3 南壁断面
(北から)



図版74 SD 2溝跡



図版75 北屋敷遺跡4次出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	みなみこいすみいせきはか 南小泉遺跡						
副書名	発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第326集						
編著者名	長島榮・鈴木隆 加藤隆則 早川潤一 鹿田雄介 工藤慶次郎 志賀雄一 森田賢司						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町3丁目7-1 電話 022-214-8894						
発行年月日	平成20年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
南小泉遺跡 (第52次)	仙台市若林区一本杉町 26-1	04100 01021	38°14'33" 54°28"	2007.1.29 2007.1.31	20m ²	墓局建築	
南小泉遺跡 (第53次)	仙台市若林区遠見塚1 丁目6-29	04100 01021	38°14'11" 54°24"	2007.2.19 2007.2.22	42m ²	個人住宅 建築	
南小泉遺跡 (第54次)	仙台市若林区一本杉町 22-9	04100 01021	38°14'34" 54°23"	2007.3.5 2007.3.7	33m ²	個人住宅 建築	
南小泉遺跡 (第55次)	仙台市若林区遠見塚1丁 目44-5の一部、44-51, 52, 53	04100 01021	38°14'17" 54°38"	2007.4.18~4.19 2007.6.18~6.21	96.6m ²	個人住宅 建築	
南小泉遺跡 (第56次)	仙台市若林区遠見塚2 丁目140-577	04100 01021	38°14'23" 54°32"	2007.5.14 2007.5.18	19m ²	個人住宅 建築	
南小泉遺跡 (第57次)	仙台市若林区一本杉町 22-7, 8	04100 01021	38°14'35" 54°23"	2007.10.15 2007.10.18	40m ²	個人住宅 建築	
今泉遺跡 (第5次)	仙台市若林区今泉2丁 目82番4、82番8	04100 01235	38°12'38" 55°42"	2007.2.13	21m ²	個人住宅 建築	
今泉遺跡 (第6次)	仙台市太白区今泉2丁 目4799	04100 01235	38°12'41" 55°45"	2007.7.2 2007.7.6	24m ²	個人住宅 建築	
大野田古墳群 (第12次)	仙台市太白区大野田字上ノ 壁20、25-1、25-10、水 路、塙の各一部	04100 01361	38°12'48" 52°35"	2007.2.26 2007.3.2	45m ²	個人住宅 建築	
西台畠遺跡 (第6次)	仙台市太白区西台畠心土地区域 整理開拓区域内20街区1番 地	04100 01005	38°13'34" 53°32"	2007.3.13 2007.3.20	52m ²	個人住宅 建築	
中田南遺跡 (第4次)	仙台市太白区中田7丁 目216-1、216-2	04100 01272	38°11'29" 53°14"	2007.4.25 2007.4.27	36m ²	個人住宅 建築	
茂ヶ崎城跡	仙台市太白区茂ヶ崎 2-1	04100 01119	38°14'20" 52°25"	2007.6.18~6.21 2007.7.28~7.31	72m ²	野草園改 築	
伊吉田B遺跡 (第2次)	仙台市太白区伊吉田字イコ タ63ブロック4ロットの一 部、5ロット	04100 01480	38°12'46" 52°19"	2007.7.17 2007.8.10	250m ²	共同住宅 建築	
北目城跡	仙台市太白区東都山2 丁目106-7、107-5	04100 01029	38°13'16" 54°05"	2007.11.7 2007.11.9	25.5m ²	個人住宅 建築	
北屋敷遺跡 (第4次)	仙台市宮城野区北六丁 目中町14-2	04100 01220	38°15'05" 56°27"	2007.11.19 2007.11.20	17m ²	防火水槽 建設	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南小泉遺跡 第52次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	掘立柱建物跡、溝跡 土坑・ビット	土師器、須恵器	
南小泉遺跡 第53次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	堅穴住居跡、河川跡 掘立柱建物跡、溝跡	土師器、陶磁器	
南小泉遺跡 第54次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	掘立柱建物跡、土坑 小溝状遺構、ビット	土師器、須恵器	
南小泉遺跡 第55次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡、土坑、ビット 性格不明遺構	土師器、石器 弥生土器、陶磁器	
南小泉遺跡 第56次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡、土坑、流跡跡	陶磁器、瓦 木製品、土師器	
南小泉遺跡 第57次	集落跡・屋敷跡	弥生～中・近世	溝跡、ビット 性格不明遺構	土師器	
今泉遺跡 第5次	集落跡・城館跡・ 包含地	縄文～近世	溝跡	弥生土器、土師器 剥片	
今泉遺跡 第6次	集落跡・城館跡・ 包含地	縄文～近世	溝跡、土坑 畦畔状遺構	陶磁器、木製品	
大野田古墳群 第12次	集落跡・円墳群	縄文～中世	掘立柱建物跡 圓溝、溝跡、土坑、ビット	埴輪片、縄文土器 石材	
西台畠遺跡 第6次	包含地、甕棺墓	縄文～古墳	堅穴住居跡、溝跡 土坑、ビット	土師器、須恵器 鉄製品	
中田南遺跡 第4次	集落跡・屋敷跡	縄文～中世	堅穴住居跡、ビット	土師器	
茂ヶ崎城跡	城館跡	中世	甕棺墓	甕棺、人骨、数珠 古錢、金具	
伊古田B遺跡 第2次	散布地	古墳～平安	堅穴住居跡、溝跡 土坑、小溝状遺構	土師器、石器、 陶磁器	
北目城跡 第7次	城館跡、集落跡、 水田跡	縄文～近世	堀跡、溝跡	土製品	
北屋敷遺跡 第4次	集落跡	平安～中・近世	溝跡	陶磁器、石製品 鉄製品	

仙台市文化財調査報告書第326集

南小泉遺跡他

発掘調査報告書

2008年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 022(214)8894

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市青葉区立町21-24

TEL 022(263)1166

